

〔六〕  
渴死の比丘  
先見佛

何ぞ来るやと母が曰く兄六子は皆證果を得たり故に大王六子を取て身体を碎玉ふ事微塵の如くし玉ふとも終に悪を犯じ今此の小子は凡火にして微善を修すと雖も未だ道を得ず是の故に身命を惜み王命を畏て殺業を爲身壞命盡て後大地獄に墮せん事を憐念するが故に我送り来るなりと王復母に問玉はく汝は如何なる道を得たりや母が曰く我の阿那含道を得たりと王此等の語を聞て我れ罪根を犯と云て忽に懺悔す兄六人の死屍を取て荼毘し乃ち六の塔婆を建て是が爲に供養し日に三度懺悔し玉へりと 大莊嚴論に見たり

○昔波羅脂國に一りの比丘あり舍衛國に來て世尊を問訊せんとして 倡て行中路に於て甚だ渴乏す前んで一の古井に到る一りの比丘は水を汲て便ら飲一の比丘は其の水は細小の虫有を見て是を飲ことを得ず爾時水を飲する比丘問て曰く汝何ぞ此水を飲ざるや我れ一飲の身心清淨なり渴乏頓息して暑熱速に除くと伴の比丘答て曰く水中に小細の虫有り世尊の制戒に虫水を飲ことを得ざれと今是れ澆水無し如何共爲べからず我れ彼の制戒を守が故にと飲水の比丘の曰く汝但水を飲て渴死を免れよ修道持戒する者身命を護る亦是法の爲よ非ずや半途にして渴死せば佛を見ることを得じと伴の比丘答て 我れ寧ろ身命を喪す共佛戒を破るべからず我此の身命は夢幻の如し持戒解脫は求生の天事也小を捨て大を取る豈非損有と爲乎身命の輕ことハ一毛の如く道戒の重ことは太山の如しと遂に即ち渴して死

す飲水の比丘は舍衛國に到り果して佛所に詣り佛預め知して故に問玉はく汝何國よりして來ると比丘答て曰波羅脂國より來ると復問玉はく汝伴有や否やと答曰二人爲伴道中にして甚だ渴乏して井に臨む虫其の中に在り伴の比丘は堅く戒を守て飲ずして渴して死す我の即ち是を飲て水の氣力に因が故に今來て世尊を見奉ることを得たりと佛の言く汝癡人なり我を見ずして我れを見と謂り彼の死せる比丘已に先づ我を見る夫れ比丘有て放逸解怠にして諸根を接せず身命を重くして道戒を輕する者は我れと共に住すと雖も彼已に我を離る事遠し彼常に我を見と雖も我れ方に彼を見ず若比丘あり絶海幽岸に在ると雖も放逸からず精進にして諸根を接し身命を遺道戒を守る者は我を去と遠と雖も我常に彼と見る彼れ常に我に近と 諸經要集に見たり

忍辱部

○前漢の韓信は家貧して常に食なし嘗て南昌亭の長慰て日日食を分て與ふ其の妻これを嫌ひ拒て晨炊て鬪の中にて食す信食時を考へて行とる食を具す又一の漂母世を渡者有り深く哀て懷け養こと數十日の間なり信悦を曰く吾れ世に出ば重く報せんと母が曰く汝の自食することだに能はず何を以てか人に報せんや吾れ報を望て 養に非ずと又淮陰の少年までも深く悔る一日市人の中に辱て跋扈して曰く汝ら世に有て何かせん若能

〔七〕  
韓信出二  
跨下一

六戒門

く死と思は我を刺殺せ命が惜ば我が跨の下を出と信俛て出之庶人性と云て皆笑ふ後よ  
 漢王に仕て楚士となる此時に至て漂母を召て千金を興へ前に辱めたる少年を尋て中尉の  
 位を授く而して武夫に語て曰く吾れ少年の辱めに因て死ば名無らん故に忍て此の位に封  
 せらるゝなりと 漢書に見たり

張良取

○前漢の代に張良と云人あり嘗下邳の圯上に遊ぶに一つの老人あり履を圯下に墮す謂  
 良曰く汝が下て履を取り來れと良聞之善す即ち殿と欲す然とも彼者老人あるが故に強  
 忍て履を取て跪いて進む老人足を出して受て笑て去る須臾にして復還て曰く汝に教へさ事  
 あり後五日の平明に此に來れと良跪いて諾す因て其の日を檢て往くに老人已に先  
 到る怒て曰く汝が老人と約して後來 ことは何ぞや去て後ち五日に蚤會せよと期に及て  
 鶏鳴に行人老又先つて在り怒こと甚し復後五日を期す良夜半に往く頃く有て老人も亦來  
 る即ち喜て一編の書を出して授て曰く是を讀ば王者の師と爲ん穀城山の下の黄石の即ち  
 我れありと云て遂に去て見ぬす夜明て其の書を視ば廻ち太公望の兵法の書なり良常に習誦  
 す後に高祖に仕て數奇策を顯すと 漢書に出たり

○當初羅云尊者の性甚だ急にして動すれば瞋怒を生ず佛種種に呵責し玉ふに心意開解し  
 て道を得て已に十大弟子の中忍辱第一の名あり一日羅云鉢を持して城に入りて乞食し無

羅云尊者

唐僧藏忍  
 行西方生

道不信の婆羅門家に向ふに慳貪悋惜して與ざるのみに非ず走り出て、瞋怒惡口法杖を以て  
 羅云を打つに頭破れ血流る復た沙を搏て鉢の中に入れて狼藉あること云ふべからず而  
 ども羅云深く心を攝し忍を合て鉢を持して河に至り流る血を洗ひ鉢を濯て曰く我れ自ら行  
 て分衛す犯せる過なくして横まに此の禍を受く我が痛む所は須臾の間なり彼の惡人長時  
 の苦報を奈何せん我れ今ま五蘊の無我あることを悟れり譬へば利劍を以て臭屍を割が如  
 し屍ね更に痛を知らず又天の比露を以て溷猪の食に飼か如し溷猪はこれを捨て走り去る我れ  
 如來の眞言を以て世の凶愚に訓ゆ凶愚これを背て信せざるも亦爾あり 羅雲忍辱經の説

○唐の汾州の釋の僧藏は西河の人也年未だ弱齡にして出家し神清循良にして高學の心な  
 し大衆と交るに恒に下位に居ず戒善密かに根塵を守り碩徳に逢ては禮屈を盡し俗者を以て  
 の必ず奔走す若し衆務に當る日淨人と同く營み他僧の垢衣を見れば即ち潜に澣濯し自ら紐  
 縫して與ふ盛夏の炎者に至り乃し衣を脱ぎ草奔の間入て蚊虻の咬齧に任せ膚即ち臙腫し  
 血流れども忍て彼が飢を救ふ恒に念佛すること算數の及ぶ所に非ず志さし勇猛にして懈倦  
 疲勞せず預じめ報盡ことを知る臙病の者に謂て曰く山僧多幸にして諸天の來迎を得たり吾  
 れ命終して必ず淨土に往て諸の上善人と一處に聚會せんと當捨壽合掌念佛して安然と  
 して終ると 宋僧傳に出つ

忍辱仙人

○昔々忍辱仙人林中に住して勤修苦行す時に羯利王宮女を將て林間に遊戯す酒宴妓樂既に止て王息臥し玉ふ諸女花を采が爲に林中を回に仙人の有を視て悦て供養す仙人爲ま説法し玉ふ諸女法を聽が故に久して歸ことを忘る王匪覺て諸女を召玉ふに一人も見す王念し玉はく人來て勾引し去なりと乃し瞋恚を生して利劍を携て是を尋玉ふに諸女仙人の所に居す王仙人に問て曰く汝何事をか作や答て曰く忍辱の行を爲すと王又た念すらく此の人我が瞋を視が故に即ち忍辱を修すと云ふ今正に試と欲して利劍を以て一臂を斷王復問て曰く汝が何等の行を修すと答て曰く慈忍を行すと王亦一臂を切是の如くして手足耳鼻を斬身を七分に割れども一念の瞋恚を生せず是を忍辱の行人と云と 新婆娑論に見たり

○後漢の劉寬饒と云ふ人は温仁にして人を怒する心深し其の妻の夫人遂に寛饒が怒る色を見ず怒る聲を聞かば常に面てに笑あるが如し妻有る時きその瞋る色を見ばやと思ひ禁中に朝んとて漿束偉を去り出て立けるに侍婢に仰せて肉の羹を持せて前に備ふ失たる牀にて裝束の上へに翻覆す寛饒更に神色を變せず徐く有て曰く羹にて汝が手は爛爛さる乎と云ふ其の性度の温和柔軟なること如此と 續漢書に見

精進部

○昔し佛弟子二十億耳尊者は其の耳に環あり二十億の金に價せり故に名とす佛舍街國の給

〔十一〕

和劉子 觀世音

億耳比丘 精進之訓

孤獨園に在す時き億耳比丘林中に學道して晝夜眠を精進にして勤むれども道品を得ず心に念して云く佛弟子の中に精進修道すること我れ最第一あり而ども解脱することを得ず沙門の法は甚だ得難し我家は富り家に歸り白衣とあり布施を行して福業を修せんと如來即ちかの心を知て比丘を呼で言はく汝が今ま如是思ふや家に在し時に琴を彈せしや絃を調べて歌をうたふに琴と調子と相偕や答て白さく爾ありと佛又言はくその絃若は緩く若は急なる時其樂の調に偕や比丘の曰緩急その調子に背時は樂をすなと能はず此の故に柱を揺しその處を得て音調和する時き歌音樂調宜に相應して聽く者をして感せしむと佛の言はく佛道の修學も亦如是極めて大精進すればは心神惛て昏散す絃意にして聽べからざるが如し退心生して道を得難し極めて精進ならざる時は心神怠て閑味なり絃緩して聽べからざるが如し懶惰を生して道を得べからず故に樂の調和にして聽べし修道の時を觀察すべし若し能中に在る者の此則ち最上の行なり如是久しからずして無漏道を得べしと爾の時き億耳比丘佛敎の義を思惟し閑靜の處に於て修道 四果を證す 中阿舍經

○北山に愚公あり年九十にして大行山王屋山の二山を平げんとをへり或人は是を聞て曰く汝が年老たり山は是れ大なり何ぞ平ぐる事を得んやと云て大に笑なり愚公が云く我れ死すども子有り子死すども又た孫あり孫又子を生せん然して山は更に益事なし終の何ぞ平げざ

〔十四〕 愚公平山

らんやと云ふ其時操蛇の神是を聞て即ち天帝に告ぐ天帝夸娥氏の二子に命じて一山をば東と云に置一山をば雍南と云所に移ぬ 列子にせけん 世間の願心厚時は其の功を遂往生淨土の願心も眞實至誠にあらすんば何ぞ其の功を成ずることを得んや

〔十五〕  
二祖慧可  
斷一臂

○昔し初祖菩提達磨來ニ震旦一梁の武帝に謁す祖即ち帝の契悟せざることを知て嵩山の少林寺に寓して而壁して座す二祖の慧可乃し往て庭に立夜大に雪ふる 遲明積て膝を過慧可に勤せず潜に利刀を執て臂を斷て 哀を求む祖即ち其の懇誠を憐て安心の法印を授く言下に更於て省悟すと 正宗記に出

〔十六〕  
釋明證傳

○釋の明證の十許歳にして父母の家を離れ元興寺に入て相宗を學す然とも天性不敏にして退屈を生す乃し寺を出て他處に行んと欲す 適雨降が故に暫く殿陛に憩て情 簷溜の階に落を見に其石皆窪なり忽ちに思惟して曰く 柔ある水の堅さ石を穿り 稽年の爲なり然れば即ち我れ昏愚ありと雖も豈息べけんや 便ち房に還て所業を勵で晝夜懈すこれより高峯

得たり貞觀六年に僧都に任す同十年五月十六日に卒す年六十 元亨釋書に見たり

〔十七〕  
老嫗磨  
李白成

○昔し李白山中に入て讀書す學未だ成ざるは退屈して棄て去る日に一溪を過に及て老嫗の鐵杵を磨を見る白問之曰 鐵作んと欲すと白其の言を感じて敢て家に歸らず遂に學業を成すと 天仲記に見たり

〔十八〕  
大政太子

○昔し大施太子の國土の人民の貧乏あるを愍念して大王の寶藏を開て寶を施玉へとも人民多さ故に施す所満足せず是に依て龍宮に入如意珠を求て無量の珍寶を雨し衆人に與んとて海中に入て珠を乞玉ふ龍王是を感じ則ち殊を太子に與ふ太子珠を得ハ珍寶を雨して無量の人民に與へ玉ふ爰は龍神集りて僉儀して曰く此の珠ハ三界第一の重寶殊に龍神守護の珠あり此の珠を人間に渡すこと頗る龍宮破滅の相ありとて龍王方便して美女とあり太子に近き玉を取て龍宮に歸る太子大さに逆鱗して海水をからして再び此の珠を取んとて貝がらを以て潮を杼玉ふ龍王 嘲て曰く汝は是れ癡人あり此の海水を杼竭ことハ無量劫にも叶べからずと太子誓を發ていよく勇猛精進にして是を杼玉ふ諸天其志を感じて神力を加して大海を酌たまふに海水半減す龍神大さに驚き珠おくりて太子に與ければ太子の所願既に満足す 釋鑑の四に見たり

〔十九〕  
孟軻與三  
字思問

○孟軻あるとき子思に問て曰く堯舜文也 武也 武は往當の聖人なり其の道徳ハ今も務て致し得べきやと子思答て曰く彼も人あり我も人なり其の聖人の言を稱し其の行をなし夜ハこれを思ひ晝はこれを行ひ滋滋焉としげく行ひ汲汲焉と常に懈らず喻は農人の時に赴き商者の利に走るが如くにせば聖人の道に至ざらんやと 孔叢子に出たり 惠心の僧都は願三往生一如營三世路と云りなぞらへて思に信にゆへあるかな

〔二十〕  
總頭  
佛  
身  
爲  
三  
飛  
理

禪定部

○鬱頭藍弗或時林間に坐禪し玉ふに諸鳥屢鳴て久く安禪に住する事を得ず又た池邊に禪定を爲は遊魚轉躍て禪思を驚す故に禪力を全することを得ず即ち瞋恚を發して曰く願くは未來に生を受は翅を著る 獺の身となりて樹に上ての飛鳥を害し水に入ては鱖魚を殺して魚鳥の怨を報せんと又異處に移て志を專に去て遂に非想三昧を證得す後に命終して非想非非想天に生ず順次業を以ての故に八万大劫異熟果を受く善果皆盡さて又順後業を以ての故に前の惡願に報て欲界に墮落して水獺とある身に羽翼を生ずるが故に是を飛狸身と云ふ能虛空を翔河水に入り常に魚鳥を取て食とすと 宗鏡錄大論等に見たり

〔廿一〕  
淨度  
傳

○釋の淨度は吳與餘杭の人あり少して遊獵を好む嘗て孕鹿を射て胎子を墮す鹿母悲痛して地に倒臥て又子を舐る淨度は是れを見て 忽に開心得悟して即ち弓を摧さ矢を折て出家して道を修す凡そ誦經すること餘萬言に及ぶ常に山澤に獨處し坐禪誦習す若邑中に法會佛事有る則の身に九燈を然し端正して以て供養とせり是の如くする事累年にして而後に弟子に告て曰く汝等香湯を辨せよと云て乃し沐浴して身垢を清め說法し玉ふ事數千章に至る 誠るに餘事を説す唯た生死因果の 理を述言已て奄然とえて寂す 梁傳習篇に見たり

○宋の徽宗皇帝政和三年四月に西蜀嘉州の使節奏しけるは大風吹て一ツの洪水を折る枯朽

〔廿二〕  
東林  
慧持

入定

したる慧窟の内に三リの僧有て定に入在髮鬚垂蒙て指爪甚た長しと帝即ち京師に召至しむ秋八月に定僧を昇て禁中に入る譯經院の三藏大師金總持に勸えて金磬を鳴して其定を出さしむ僧の曰く我は是れ東林の遠法師の弟惠持と云ふ者也西の方峨嶺山に遊び因に此に入定したり遠公 恙無や否やと三藏の曰く遠公は昔し東晉の人あり世を去こと今已に七百年なりと僧聞て爾より言ひす三藏啓して曰く公今や何れの地に歸らんと欲するや僧の曰く陳留縣に往んと云て即ち復入定す乃し其の言に隨て陳留に葬て塔中に安す帝即ち其像を圖せしめて諸寺に頒ち送り御製の贊三首を賜ふ其の三曰有情身不無情彼此人々定裏の身皆得菩提無樹不須辛苦問三盧能一 晉燈錄に見ゆ

〔廿三〕  
月光童子  
水觀

○昔し月光童子語て言く我れ往昔の時に如來興出于世一名て水天如來と号す諸の菩薩衆に教へて水觀を修習せしむ皆 悉く觀成して三摩地に入ることを得たり我是の時に比丘たり自ら修習して水定に安禪す爾時我が弟子の沙彌其の窓より窺ふて室内を觀に唯清水のみ室中に遍す童稚の沙彌其の故を知らず一ツの瓦礫を取て彼の室内の水に投入れたり我れ定より出て甚だ心痛す是の故に沙彌に教へて我れ復た水定に入り瓦礫を除去らしめ定より出たるに心痛無くして元の如しと 華首經の説

〔廿四〕  
入定道人

○昔し道人有り定に入て久し弟子即ち齋食の節屢呼とも覺せず其の前に向て挽立んとす

醫神之事

臂舒て長きこと一丈餘なり弟子大に恐る道人已に定を立つに臂痛こと甚だし弟子具に白す師の曰く定に在る時は身軀柔軟あること母胎に在る日の如し後復相ひ觸ること莫れと云て藥治して愈と 三惠經の説

〔廿五〕 曠法師傳 并宗本

○宋の哲宗皇帝元祐の始め汴京に曠法師と云ふ有り定中に西方極樂に遊て大蓮華を見に黄色の光明照耀す其の上に名を題して曰く宋の比丘宗本之座と云ふ曠法師自定起て蘇州の靈岩寺に往て問て曰く禪師何が故そ位已に極樂に歸するやと宗本禪師の 圓照 曰宗本苟も佗の意なし修禪の時心極樂世界に在て想を生せずと 天寶鑑に出

智慧部

〔廿六〕 鹿頭梵志 扣三觸體 而知一三世

○昔し如來耆闍崛山に在す一時五比丘と共に靜室を出て山下に向ひ鹿頭梵志に遇て俱に尸陀林に入り玉ふ林中の骸骨縱横に散在して親疎新舊を知り難し如來勅して言はく鹿頭は博學之識にして星宿の行度を明めて吉凶を辨じ草木の榮枯を見て水火を占ひ醫藥に通達して病源を知り音聲を解了して死生の因縁を覺すと即ち一ツの觸骸を取て示して問へしむ是れ何人そや何に由て死せる是れ何れの治療か有へすと鹿頭即ち觸骸を扣て而して答て曰く是れ男子なり濕毒集まりて百節酸疼して死す若し呵梨勒を蜜に和して服治すべくは必ず死すべからずと重て問て曰く死して後ち何れの處に生するやと答ふ三惡趣に展轉すと又一ツ

の觸骸を扣て問ふ答て曰是れ女人なり懷妊して胎破て死す若し好蘇醃醢を服せば死すへからず今畜生中に生すと又一ツの觸骸を扣て問ふ答て曰く是れ亦た婦女なり産して死す今人中に生すと又一ツを扣て問ふ答曰佗の害に由て死す而して天に生すと佛即ち難詰して言はく佗に害せられて死せん者は必ず三惡趣に生せん今天に生せんと云ふ其理有やと鹿頭更に是を扣て音を聞て答て曰く此人平生の日十善を持せしを以てありと佛言はく汝か云ふ所の如く皆な差すと香醉山の南に優陀延比丘有へ無餘涅槃に入れり如來即ち神通の手を伸て其の觸骸を取り來して問玉ふ鹿頭是を扣て曰此の觸骸の其の本無し謂く男に非ず女に非ず生じ來れる處を見ず取り回すに都て八方に音聲をし是れ更に我が智力を以て知こと能はそ抑誰そやと如來言のく止あん止なん汝是を知ること能はし假令は無量劫を経て了知せんと欲すと云ふとも亦た測度すべからずと鹿頭が曰く良とに未會有なり我れ蟻子蠕動の類と雖ども尚を來去の處を知り鳥獸の音聲尚能く聞て其の情意に達す此の觸骸を知ること能はす如來の智慧正法の奇特は九十六道に超絶せり唯た願くは是を語り知らしめ給へと佛の言く是れ無學の大阿羅漢優陀延尊者已に無餘涅槃に入れる觸骸ありと鹿頭曰觸骸の上に尚を知ることを能はす况や深法の妙理をやと尋佛弟子とあり無學の道果を得たりと 增一阿舍經の説

○阿安檀那經の中に説玉はく佛昔し祇洹精舍の中に在て晡時に出て經行し玉ふ舍利弗

も同じく佛に從て經行せり是の時に鷹あり鴿を逐て搏とす鴿怖て舍利弗の邊に飛隠て尙  
 を怖て聲を出し周章て止す如來の邊に移り隠れて後ち鴿即ち身心安穩にして亦怖る色なし  
 舍利弗これを見て佛に問てばさく佛も我れも同く三毒なし何の故にか鳩既も我が影を怖て  
 佛の影に移りて後ち身心安穩にして聲あさやと如來言ひく汝は三毒既に斷すと雖も習氣  
 未だ除らむ此の故に影に隠て尙怖る我は本結習氣悉く除きて餘なし故に怖れず今汝此の  
 鳩の宿世の因縁亦た幾劫の中ち鴿とありて生を受たることを觀見せよとの玉ふ舍利弗即  
 ち宿命智定に入りてこの鴿の宿世を觀見するに生々世々鳩の中より來る乃至八王大劫この  
 かと常に鴿の身を受て復た其の已往をば觀見すること能はず舍利弗即ち定より起て佛に白  
 して言さく是の鴿すてに八王大劫このかた常に鴿の身と作て餘の生を受すそれより已往を  
 ば我復た知ること不能と如來重ねて言ひく汝若し過去世を知り盡すは亦試に此の鴿の未  
 來世を觀見せよ此の鴿何れの時にか脱れて餘の生を受くべきやと舍利弗即ち天眼智定に入り  
 て觀見するに生々世々鴿の身を脱るべからず乃至八王大劫にも亦免れずそれを過て後ハ  
 能く知ることなし如來の玉はく諸の聲聞辟支佛の知る所八王大劫を限とす尙これを過る  
 こと殊伽沙等の大劫の中に常に常の鴿の身と作へし其の罪訖て餘の生を受け五道に輪回後ち  
 に人間と作り五百世の中ち利根聰明あらん最後の生の時に佛あり世に出て無量の衆生を度

晉明帝日  
 遷長安共  
 還近

せん此の人その遺法を聞て五戒の優婆塞とあり比丘に從ひて佛の功徳を讀し大菩提心を發  
 ち三阿僧祇劫に六度を履行し十地の位に至り成佛して無量の衆生を度して涅槃すべしと是の  
 時舍利弗は深く慚愧懺悔して佛に白して言さくこの一ツの鳥は於て我れその本末を知るこ  
 と能はず況や諸の衆生に於てをや我か智慧の拙あさこと如來に比するに數にあらず寧ろ阿  
 鼻地獄に入て無量の苦を受くと云ふとも佛の智慧を得るとならば我れその苦を受るに難と  
 せじと

○晉の明帝太子たるの日適長安より使人來れり父の帝問玉はく日と長安と孰か近き太子  
 對て曰長安近し未だ聞ず人有りて日邊よりして來ると云ことを翌の日帝又問ふに太子對て  
 曰日近しと帝驚て詰て曰昨は長安近と云ひ今日は日邊近しと其の言こと何ぞ相ひ遠ふや  
 太子の曰く目を舉ては即ち日を見る未だ聞かず此に座して目を舉て長安を見ること有り  
 とは帝大に奇とす 晉書に見ゆ

三國大因緣集卷之六

三國大因緣集卷之七

四重門

殺生部

初殺人現報

唐朱此反  
報附殺書

盜賊殺  
婦人鄭  
生

○唐の朱泚反逆して尋で敗北す殘兵二百餘人を從て落て往く道に迷ふて田父は問ふ田父が曰汝は朱泚に非ずやと其將源休が曰く是れ漢の皇帝なりと田父が曰く天地は凶惡を長育せず蛇鼠の龍虎と爲こと能はず天網恢々たり去て何くに適とするやと朱泚怒て是を殺さんと欲す田父俄に消失たり朱泚其の日の暮又向に殺せし段秀實が亡靈を見る而して馬より落て悶絶し已てに蘇りて了に韓旻と云ふ者のに討れて首級を挂らる 廣徳神異録に見

○唐の榮陽と云ふ處に鄭生と云ふ人有り善く騎射の術を逞くして而も其の心ろ武勇にして亦た策畧有り葦維の郊に移り栖て一日醉又乘して弓を挟み矢を腰にして馬に騎て獨り田野の間た數十里に行く天已てに暮れて風雨頻なり大木の下とに雨宿して空漸やく霽たりと雖とも其はだ冥くして路に迷へり馬又任せて行道の傍はらを見れば門有り即ち神廟なり馬を門に繫我身の廟屋に宿す東の庇の下た又匿て夜を明さんとす忽ちに廟の西の空舎の中ち物音す幽靈の出るかと恠み弓の絃を鳴し矢を爪とりて伺がふ俄に一りの男有て身の長

四重門

高衣其短短かき者の大なる囊を負て劍を杖て出つ而して進みて曰く庇の下たに在る者の盜なりやと鄭生が曰我は葦維の郊に栖者也獵に出て、雨に遇道に迷て此に宿すと彼の者の云く爾らの我れ此を出て去るべし弓絃を弛て我か心を安堵せしめよと鄭生常に別に一絃を懷又貯はふ已て又絃を弛て彼の者の前に投密かに懷中の絃を以て弓に繫たり彼の賊大に悦こび劍を抜て鄭生を殺さんとす鄭生即ち矢を番て汝我れを欺むくや我れ汝を欺むく者也中心を貫き地上に射例して殺さんと云ふ賊の云く良とに達人なり我れ此にして死されん乎と鄭生曰く我れ害を爲者に非ずと放して去らしむ賊即ち走り出て、去る鄭生思ひく若も多勢にして亦た來らば寧ろ能はんやと大樹の上に登り匿る良久して月已て又朝あり忽ち一りの婦人有り面容甚はだ艶にして美麗あり空舎の中より出て、樹の本とに來て曰く樹上の容り良に仁惠あり憐れみを垂玉へ我は近き村里の者なり盜の爲めに誘はれて此に來る盜已てに我か衣裝を利して遂に此の空舎の中にして殺して尸を棄衣を剝て去る願くは君我が怨を雪玉へ此の賊已てに田横が墓に匿て明日の亦た燠を待つと云ひ畢て泣々其の狀は消て失ぬ鄭生即ち空舎の中ちを見るに女の尸有り馬を馳て洛に至り河南の尹鄭叔と云ふ人に白す即ち獄吏數人を遣はして果して田横か墓の中ちにして賊を捕へ得たりと

○周の大夫杜伯は字は恒と名く忠義の名臣たり宣王已てに其の妾妃か讒を信して司工鋒と

大平廣  
記に見



周官王伯  
殺杜伯  
一冤報

云ふ臣下に仰せて杜伯を殺さしむ其の靈魂即ち形を顯はして王に見て曰く我れ何の罪有て殺すやと王即ち祝を召て託言せしむ宣王の曰く汝を殺す者は司工鋒也と祝託して曰く而らは何を鋒を殺して我か恨を謝せざるぞ宣王即ち鋒を殺して祝を以て謝せしむ杜伯猶を可ず司工鋒又た形を彰はして曰く臣に何の罪有てか殺すと宣王大に憂て皇甫と云ふ臣下に告て曰く祝已てに我か爲め謀て司工鋒を殺さめたり鋒亦た形を彰はして常に見て我を責是れ奈何せんと皇甫か曰く此の上は祝を殺して謝去玉へと宣王即ち祝を殺して謝すれども孟あし祝又た形を彰はして常に見ゆ三年の後ち宣王圃に出て、田す従人野に滿たり日中に杜伯は白馬素車を乗り司工鋒は左りに在り祝は右に立つ道より右の方たに廻杜伯は矢を番て射る宣王の心中に當て脊を折て斃れ死すと記見如是枉て誅殺せられし者の怨靈出て、冤報せし事史傳繁多也何ぞ三世の因果を撥無せん

三盜相殺  
害

○昔し唐の眞宗皇帝の天禧年中又三人の盜賊あり一ツの古塚を發て其の内に送籠たる金銀財寶等悉く盜み取る其の中か又二人謀て一人をして店屋に遣して餅を買しめ此の者の還り來らば殺さん此の寶物を三人分て取らんよりは一人を殺して汝と我れと二人分ち取らば亦た多からざらんやと既に一人餅を買て還り來る彼の一人潜に思はく此の寶物を三分にして取らんよりは二人を殺して我れ一人是を得んと即ち毒を餅の中に包入て還る二人即ち彼の

五  
伎兒冤魂  
之實事

一人を差殺して崖より谷底に推落し而して二人其餅を食するに毒發して熱狂偃溥して死す三人互ひに害心有りて三人共に死す迪吉録されは彼此俱害すると大經に説るは此等の謂歟○宋の元嘉年中に李龍と云ふ悪者有て黨を立て類を聚めて夜行して富祿の家に入とて劫掠狼藉也此の頃丹陽の陶繼之と云ふ人有り秣陵縣と云ふ處の令と爲て密く尋ね搜に遂に李龍等を捕得たり其の中に一人大樂の伎兒有り是れは李龍等か黨類の劫盜には非ず其の宿に往懸て遊び音樂を奏して有けるを一同に擲捕たり陶繼之此の事を詳に正さずして黨類の名牒に書記す宿の主及び貴人等皆證人と爲て劫盜に非すと云ふに陶繼之も心中には同類に非すと知と雖とも名牒を載て國守に送るを以て引還すに及はず遂に劫盜十人の數として郡の門側にして是を斬る此の伎兒か音樂の藝は精能にして又辨惠有る者也將に首を刎と爲の日親族隣人朋友相識たる人集まり見る者甚はた衆し伎兒が曰く我は賤き者と雖とも常に善道を慕ひ未だ嘗て非を爲す劫掠の黨類ならずと雖とも陶繼之是を知乍ら枉て殺害せらる若死して鬼無くハ則ち己なん鬼有らは必ず自ら訴んと云て琵琶を弾じ數曲を歌て而きて斬れたり衆皆其の枉て殺されし事を哀んで泣を流さぬは無し一月餘を経て陶繼之か夢に伎兒來て案前に立て云て曰く昔枉て我を殺す實に不分の所爲なり天帝に訴て理を得たり今來て卿を取んと云て跳て陶繼之が口に入て腹は落たりと見て驚寤て俄に絶入りぬ狀ち風頭

如し種種に謔言して良久して方に醒たり時有て亦發り輒ち靈語して責るに陶繼之反張して頭べ後ろに折て四日にして死す其後家甚だ貧悴にして一兒早く亡し一孫孤露にして路次に窺寒し無頼にして絶すと 冤魂志に見

蘇武爲靈  
鬼訴劫賊

○昔し漢の世に何敞と云ふ人有り交州の刺史となり任に趣き蒼梧郡の高要縣と云ふ處に行き暮て鵠奔亭と云ふ驛舎に宿す夜未た半あらざるに若き女一人樓閣の下より出て、語て曰我が姓は蘇氏名は娥字をば珠娘と号す本とは信廣縣の循里と云ふ處の者也早く父母に後て又兄弟なし不幸にして夫を喪し孀となりて子なし我已てに困窮に迫りて自ら家を保つこと能はず帛百二十四、譜代の婢に致富と云ふ者の一人より外かは世に恃むべき者なし彼の帛を賣て同しき縣の平伯と云ふ人に車を貸て我れ及ひ錢帛を乗載て故郷に歸る去年四月十日此の亭に行き暮て宿を借て止まる亭の主自ら刀を拔戟を持來て我に問て曰婦人は何より來れる車の上へには何をか載たる男夫の伴ひし者は有りや無やと我れ怖しく思て答へず即ち刀を振て我と婢とを刺殺して樓閣の下に埋み財物を取収め牛を殺し車を燒て牛骨をの亭の東の井の中に深めたり我れ告げ訴ふへき所なし明君 適來り玉へり此の故に出て、自ら陳る也と云て嗚咽とむせび泣何敞か曰く汝が屍骸を發出さん何をか驗とせんやと女の曰く我れ上へ下た皆な白き衣にして青絲の履を著り尙を未だ朽と云て即ち失たり何敞即ち夜明

顔延年  
報數千人現

けて後ち樓の下たを掘せしかは二人の女の尸有りて果して然なり即ち亭の長襲壽を捕て考問するに罪に伏す信廣縣人遣して問に蘇娘か語に違はず是に由て襲壽及ひ父母兄弟悉く獄に繋ぎ終に族誅して 誠とす 太平廣記に見

○前漢の嚴延年は字の次卿と号す東海縣の下邳と云ふ處の人也河南の太守となり法令酷烈にして土民を戮すこと草を薙よりも容易小罪有る者と雖とも宥赦けす冬の月に 囚を決斷す血を流すこと數里あり世の人号て屠伯と云ふ郡の中ち畏れ栗きて 家に喜慶の小兒もなく門に夜る吠る狗もなし其母東海縣より來りて酷政を見て大に驚き顔延年か家に入り來らず旅店に宿を取りたり延年來りて謁せんと云ふに母即ち戸を開て見す延年大に怖れ歡て冠を著して禮を厚くし種々に白す良久して出て、見而して延年を數 誠て曰汝幸に河南の太守とあり仁愛を以て愚民を惠み孝義を以て百姓に教ふる事無くして 恣に國人を殺して己れか威勢を盛りにせんとす天道は神明にして人品は靈理あり冥罰近きに在り冤報遠からず我れ汝が母として老年に當りて齡壯りなる子の刑戮せらる、を見んとは意寄ざりし者をや我れ早く歸りて汝が墓の地を掃除して待と云て母已てに東海に歸る一年餘の後ち顔延年果して坐せられ市に葉られて 戮せらる 漢書本傳に見

○釋の知玄法師は姓は陳氏眉州の洪雅と云處の人也母夢に明月懷に入ると見て感して胎

精玄法師  
之感事實

ひ已てに産して乳哺の中かより三寶を喜び五歳の時漸やく文字を知り讀書父は梓州射洪縣の令なり兒をして花を詠せしむ兒即ち詩を賦して曰く花開滿樹紅花落萬技空唯餘一朶在明日定隨風父大に歎吟す七歳にして法泰法師の涅槃經を講するに遇て一たひ聞て理に徹す十一歳にして出家し學業は自然智を發して已てに十三歳にして大衆を集めて指授す常に自ら恨む邊鄙の言音更に中國に通し難しと象耳山に入て大悲咒を誦す夢に神僧來り知玄の舌を截て別の舌根に換ると見て夫れより明辨利鋒これに對するに大河の流るゝが如し唐の懿宗皇帝尊重して紫袈裟を賜ひ悟達國師と号せらる法乾寺を作りて知玄を寺中の玉虛亭に居しめらる亦た書工に勅して法師の影を禁裏に圖せしむ其の崇重如是裴相國日に親しみて友とす僖宗皇帝の中和年中に知玄の左足に人面瘡を生す苦痛萬端なり夫れより先に一りの道人有り知玄と友たり別れて去る時に曰く師若し急難有らば某の岩洞の泉の下とに來れど即ち此の瘡の痛苦に由て彼の道人を尋ぬ道人泉を指て洗はしむ既に水を掬する時人面瘡言て曰く汝知玄は漢書を讀むや遠盡已てに體錯を害せし事を議りや知玄答て曰漢書を讀て是を識と瘡の曰汝の遠盡なり吾は體錯なり汝ら其の時吾を害す其の恨みを如何ん夫れより以來かた汝は十生を受けて生々出家して道行精進なるか故に吾れ怨を報する事能はず今已てに天子の寵に由て名利の心起れり吾是を恨として怨を報す道人の三味甘露の水に

佛因位殺弟之感報

由て我か冤を解すと云ふ是に於て洗之其の痛み心肝に徹して悶絶して亦た蘇へり瘡漸やく枯 宋高僧傳に見たり

○昔し如來阿耨達池の上より在りて舍利弗に告て言はく乃往過去無量劫又羅閱祇園に長者有り須檀と名く七珍財寶に富て家内豐饒なり子有り須摩提と名く父年極まりて命終す異母の弟を修耶舎と名く兄の須摩提謂く弟の修耶舎を殺して諸有の財寶田園悉く我れ一人の主たらんと即ち計を設け弟を偈て耆闍崛山に到る懸崖に臨みて弟の手を捕へ谷底に推落し大石を以て是を擊埋む是に由て兄死して後ち無數千劫に餓鬼中に入り亦た崑山地獄に墮して痛苦す爾の時の長者は淨飯王なり兄子須摩提は我身是れなり弟修耶舎は今調達是れあり無量劫に彼の罪業の報ひを償ひ又無量劫に修道して今正覺を成すと雖とも罪惡の餘習を以て調達即ち山頂より大石を轉ばし擲て佛を厭殺んと欲す其の石の長三丈闊丈六なり耆闍崛山の神を鞞羅と名く手を以て石を接するに小片迷りて佛の母指を傷りて血を出せり是の逆罪に由て調達亦た無間獄に墮在すと 興起行經の説

次 殺畜現報兒

○昔し吳唐と云者あり春日に兒を伴て山に入て獵するに麋鹿の麋を將ゆるに値ふ唐乃麋を射るに即ち死ぬ鹿母太驚て悲鳴して止す唐草の中に伏隠る後に麋を平地に引き出にす及

吳唐射子 麋鹿中吾

て鹿母復來る唐又た其の母を射殺す前の麕を射たる處に至れり又た一鹿來る又た弩を張てこれを射んとするに其の箭忽ち反て吾か子に中る唐弩を擲て兒を抱き膺を撫而して涕哭す時に空中に聲有て曰く吳唐鹿の子を愛するも汝と何を異んと唐驚き聽くに所在を知らずと事文類聚に見たり

〔十一〕  
沛人殺三燕而略三千不レ

○昔し沛國の人三子を生れり共に瘡癩にして語ること能はず適一りの道人來て曰く君罪あり其の愆を思惟すへしと其の人の曰く吾昔し小兒たりし時梁の間た燕の巢り内に三ツの雛あり試みに指を以て口を開しめて莢藜を食しむるは是れを呑りて即ち死す其の母還て徘徊し尋ねれども其の子を見ず大悲鳴して去りぬ今深これを悔と道人の曰く即ち此の事なりとて飯りぬ 續搜神記 に出たり

〔十二〕  
何澤殺生成二獨身

○唐の何澤は本と容州の人なり廣州の四會縣と云ふ處の令とあり其の性甚はた無道なり唯口に厚味を適せん事を工み家の内に數千の鵝鴨雞猪を養て用に隨て殺す是れ皆な村里の百姓に課て供納せしむ何澤唯一子有り愛憐特に甚 たり一日雞一雙を烹て食はんと欲して湯を爨て其の沸揚るを待つ其の子忽に鬼物に接せられ撮て投るに似て沸鑊の中かに入れたり一家駭て是を引出たすに鵝と共に煮爛て死す何澤了二たひ子なく其の身獨立して果して牢籠せり 報應錄に見

〔十三〕  
斷二牛舌一其子瘡

○唐の武德年中に隰州の大寧縣に賀悅と云ふ者あり隣人牛を殺すを相ひ助力して牛の舌を繩を以て勒して聲を擧ざらしむ後ちに賀悅三子を生り皆瘡癩にして言こと能はずと 法苑珠林に出

〔十四〕  
無レ舌生二子

○唐し世の末に洛陽の阮倪と云ふ者其の性強毅にして力量有り無道にして殺命を好む酒に酔て郭門に出るは野飼の牛有りて放れて草を食む即ち捕て其の舌を割取て歸り炙として食へり一年計の後に阮倪一子を生するに舌なく瘡にして聲なし時の人是れ牛舌を斷せし報應也と云ふ 太平廣記に見

終 殺畜現報其身

○唐の内侍徐可範と云ふ人は其性殺生を喜み江河に網を布山野に箭を飛ばし凡を殺す所の鳥獸魚蝦數千萬に至る復常に鱉を活なから其甲を穿ち熱油を注ぎ入れ燒殺して食又羊を屠て其の四面に火を燒羊大に渴する時五味汁を飲しめ尋で殺して腸胃を煮て美饌と爲て敷ふ如し是烹宰の數千萬に及ぶ宋の僖宗皇帝に從て蜀の國に行く道にして病を受けて睡る毎とに諸の獸諸の鳥來りて可範か身肉を啖ひ啄ばむ苦痛して號び喚ふ床の下たに炭火を熾して身を炙り油と醋を其の身は灌き苦を以て上へに覆へば苦痛止む暫らく睡る晝夜相ひ繼て如是已てに命終て其身の皮肉皆盡て唯一束の黑骨のみ遺れりと 報應錄に見たり

〔十五〕  
報可範現

〔十六〕  
唐王遼斷  
現報  
舌

○唐の王遼の河内と云ふ處の人也兄弟三人有り並びに天行の時疾を感して一所に臥す其の家  
の後に大木あり上へに鵲の巢あり旦夕翔り鳴て噪しく喧すし甚いた其の喧噪を厭ひ惡  
て病愈るに及て網を張て鵲を捕へ舌を斷て放つ其の日より兄弟三人同時木舌を患へ是  
を刺て血を出たすに腫痛甚いたし齒斷爛れ齒落つ家漸やく衰弱に至り病亦た差す三人共に  
行乞丐す也 官驗記に見

〔十七〕  
迦留陀夷  
死被害而

○舍衛城中に婆羅門あり迦留陀夷の大檀那となり常に供養す唯た一子あり是に婦を迎ふ婆  
羅門死せんと欲して其子に命じて我れ死すとも尊者を供養すること我か如くせよと而して  
其子供養すること父に違はず尊者亦た常々往て住す或る日婆羅門子佗處に出行せりその婦  
に仰せて尊者を供養せしむ是の日五百の群賊の中に端正の美男あり婦是に染著して招て密  
會す尊者の漏かど恐れて婦と賊と計りて殺して馬糞の中埋む波斯匿王是を聞つけて婆  
羅門家並ひに左右十八餘家を殺し五百の賊を探り捕へて手足を截て市に棄つ諸比丘即ち知  
來に此の事を問ひ奉るに説き玉へく乃往過去の時に迦留陀夷は大天祠の祭主となる五百人  
ありて一ツの羊を牽てその四足を截て祭主に詣て、祈願す祭主これを得て羊を殺す殺すか  
故に地獄に墮ち無量劫の苦を受くその時の祭主今の迦留陀夷是なり羅漢果を得と雖とも  
餘殃なを盡さずして今此の報を得その時の羊は今の婦是なり昔の五百人すて羊の四足を

〔十八〕  
殺俗害  
絹之報

截て今大王の爲に其の手足を截る、五百人の賊是也 毘奈耶律に見也

偷盜部

○唐の河間と云ふ處に邢文宗と云ふ者の其の家を燕の境内に造りて棲その性麁陋なり貞觀  
年中に忽に厲風を憂ふ百餘日にして眉鬢皆な抜たり寺に往て罪障を懺悔するに曰我幽州に  
赴ひさ向ふ道にして一りの旅人絹十餘疋を持って廣野に歩む我追詰て殺さんとす此の人の云  
我れ此の絹を以て佛經を寫す料紙を買んと欲す而して今此の劫奪に逢り命ち免かるへから  
すと終に殺して絹を奪ふ其の時に一りの老僧又た南を指て去我れ此の事を告弘發れんと  
懼れ思ひ刀を揮て向ふ老僧叩頭曰く一生の間誓願して此の事人に語るべからずと邢文宗  
宥すして老僧を殺して草叢の中かに棄たり二十餘日の後に河間に還る彼の僧の尸を棄たる  
處を過るゝ暑氣炎天の比なるを以て尸の皆壞爛すべしと思ひ路の次てに往て觀に尸骸少し  
も損せず唯生たるが如し邢文宗馬の鞭を以て僧の口を築しかば口より一ツの蠅出て、飛鳴  
て直に文宗が鼻に入る久しく悶て百計すれとも出でず了に癩病となり鼻落ち口爛みぬと語  
る種種に善法を營なみ懺悔して罪を謝すれとも効なく一月餘りにして死す 冥報拾遺録に見  
○齊の栢林寺に弘明と云沙門有り會稽山陰の人なり少して出家し貞苦にして持戒す或時山  
陰の雲門寺に住して法華を讀誦し禪定を修す一瓶あり且ごとく淨水自ら滿つ又諸天童子日

〔十九〕  
弘明傳并  
沙彌畜生  
報

々に來下して給使をあす時に一りの小兒來て誦經を聽く弘明の曰く汝ち何ん人そやと小兒答て曰く我れは昔し此の寺の沙彌あり其の時帳下の僧食を盗て食す此の業因に依て今園中に墮して畜類となる師の道業勝たりと聞て今故に來る願くは師方便を以て此の苦患を拔除し玉へと弘明是れを慰て説法勸化し玉へり即ち解得度して忽ちに隱ぬと  
法苑珠林に見たり

〔二十〕  
皇甫遷  
母錢  
爲子

○隋の大業中年に宜州の城南の里民に皇甫某と云ふ者の有り其の家兄弟四人一所に聚まり棲て度世の營を至す各々皆妻を持ち其の弟二の弟を皇甫遷と名く惡友に交はり遊びて産業に懈たり屢諫むれ共聽ず或時其母已て買べき物有りて錢三緡を取り出たし床の上に置て後の舍に往たる間だに皇甫遷自外入り來て堂に昇るに人更らに見ぬす便ち彼の錢を盗み去る母還て錢を求るも無し家内の男女を集めて問ふ皆な知らずと云ふ母怒りて悉く鞭筆を加ふ男女大小皆な怨み怒我等此錢の不知何ぞ虐責すること如此なるやと後の年に至て皇甫遷死す尋で其の家に猪有りて一豕子を生す八月に至りて社日の祭り有り遠き村より此の豕子を買求めんと云ふ家にも是を賣と云ふ其の夜妻か夢に我れは是れ汝か夫皇甫遷なり母の錢を盗める故に豕と生れ來り債を償なふ今遠村の社に賣れて行かば必ず殺されん汝ち吾か婦として何を見るに忍びん願くは汝ち債還して我か命を濟て得させよと夢覺て姑

〔二十一〕  
趙太女  
子  
錢  
倫  
爲  
親  
之  
羊

は語る姑の曰吾も夢みる事亦爾なり吾か子と云ふことを知らざりきと云て泣き悲みて賣ず家も居ること二年にてし死すと  
法苑珠林に見ゆ

○唐の長安市は毎歳の元日已後親しき商賈は遽に集まりて飲食して相ひ遊ぶを傳坐と名く是れ風俗あり東市の趙太と云ふ者次きは是の遊を設けて衆商を催集む客已てに來りて其の家の碓の上を見るに年十三四の童女有り眉目甚は佳麗青き衫に白き帽みし急に頭を繫て碓の柱に挂たり童女泣て客を謂て曰我の此の家の子也往年未だ死せざりし時に父母の錢二百文を盗み脂粉を買とす未だ買ざるに病して死す其の錢の舍の西北の角なる壁の中に隠し置たり此の盗める罪に由て未だ用ひざるに報を得たり父母に命して語り玉へと云ふて即ち化して青き羊となる頭は自色なり客驚て主人を告ぐ主人その形を問ふ乃ち是れ我か女なり死して已て二年に及ぶ壁の中を檢するに果して錢有り父母大に悲み歎きて羊をは寺に送りて僧を供養し家舉て肉を食せず佛道を行すと  
法苑珠林に出

○昔し長樂卿と云ふ處に富祐の人あり其の婢を春と名く一日粥を煮て家内の上下未だ喫せず竈の前へに置たりしに家に飼ける猪子之を食ひたり春即ち火杖を以て追ひ打ければ猪子後ろの山を差て逃竄て夜に入れとも歸らず其夜大家の夢に我が弟の死して久しきが後の山の岩陰に居て泣々云ふやう我れ兄の錢五百文を盗みて使ひける故に死して後ち此の家に猪

〔二十二〕  
監兄錢  
爲猪子

二十三  
陳寔知  
盜與  
緝

子とありて來り債を償なふ而るに飢て堪難く粥を食せし所春甚ハだ誠めて我を打つこと劇し願くは我を哀み玉へと云ふて夢覺たり驚恠みて微明に岩陰を尋て猪子を得て還る悲しむく痛はしくて見る所に二日よして猪子死す人有り是を五百文の錢にて買んと云ふされども賣るべき仔細に非ず山の下は埋めり五百文の錢を竊める業の盡たる故に自ら先世を知りて夢に告げ尋て還り死す五百錢に買んと云ひしも故有り也

○後漢の陳寔字を仲弓と号す潁川の許と云ふ處の人也少して縣の吏となり學を好みて徳を修して道を行ふて清廉あり太丘の令長となりて訟へ有れば曲直を判す負たる者も理に屈して怨を其此る年荒て不作す盜人夜る室内に入りて梁の上へに匿れたり陳寔是を見ても少しも奇ます子及び孫を呼集めて前へに座せしめ色を正ましく聲を和かにして訓て曰夫れ人は自ら勉ずは有るべからず身の常の業は無くは何を以てか世に立てるべき不善の人と雖とも未だ必ずしも本とより惡人には非ず其の天然の性と馴て習ふ處より自ら惡人となる此の梁の上なる君子是ありと其の時盜ひと大に驚て自ら地に下り頭を地へ附て罪に伏す陳寔が曰く君か容貌を見るに頗る惡人に似る當に貧困に由て如是身を危ふして命を輕くする皆是れ貧が故なり良とに痛はしき哉と云て絹二疋を與ふ從此一縣の間に盜びとなく成りと

後漢本傳 是等は皆な其の盜竊に由て恐懼熱惱する者也是れ克念則んは狂せ

二十四  
寔  
鬼  
隨  
人

二十五  
夫  
沈  
井

るも聖となると云へり設ひ劫賊と云ふとも心を改めて正道に歸せば賢人君子とも爲さらんや

邪婦部

○王勤政ハ滌陽と云ふ處の民俗也隣家の婦人と密通す其の婦限り無く勤政を愛め連て佗國に走らん事を計る爾らは夫必ず追ひ來らん心の任に居こと能ハじと婦即ち夫に毒を與て殺す夫の一族是を奇みて官に訟たふ即ち婦を捕て考問す勤政是を聞て歎の我れに歸せん事を恐れて獨り江山縣と云ふ所に逃て行けは己てに七十里を去て今は遠く隔たり跡を認て追ひ來る共も及ぶべからずと心を放す甚た饑たるを以て店屋に入りて食を買ひに店の主即ち二人の食を調へて出せり勤政が云我只一人也何そ二人の食を出すやと店の主が日向に被髪の人有りて公の後に隨て入る此の故に二人の食を設けたりと勤政驚き歎息して思ひく是れ

○鬼相ひ隨ふ何國に往くとも免るべからずと是に由て自立ち還りて官に到り罪に伏して婦と共に死さると

迪吉録に見

○宋の潤州の民家に商人有りて佗國に行て數日を経て歸らず忽ちに園の井の中かに死人有りて聞て婦走り往きて是れ我が夫なりと云ふて泣き悲み官に訟へて曰く我が夫假初も出て歸らば今死して園中の井の底に在り云何なる者の、殺して沈めたと云ふ張弁丞相その

時瀾州の守あり是を聞て隣里近村の民を召寄て井の中を見せて此の婦人が夫かと問に皆云ふ井甚た深くして見分す即ち戸を取り出たして見すの知るべからずと張弁か日多くの人皆を見分せと云ふ而るを婦人特り見知り尤て我か夫なりと云ふは有れ由有るべしと云ふて枚て考問するは果して白状隣家の少夫と密會し相ひ圖て殺すと即ち少夫及び婦人共に市は斬と 沈存中筆談に見

〔二十六〕  
唐書參政  
之妹

○唐の寶參と云ふ人は龍門の奉先と云ふ處の廷尉たり曹芬と云ふ者あり北軍の下司として止住す酒に酔て其の妹に通せんといふ父是を見て大に辱しめ警むれども可ず度々及びて軍中に知る者多し父恥怒て井に投して死す寶參聞て兄妹を擲て死罪に行なはんとす軍中皆云く父の喪を行せて後に斬玉へと云ふ是れ年月を重ねる間に中官に賂して死を免れんと欲す寶參是を察知して日父已てに子を恨みて自殺す父子の情此の時に絶す三年の喪を待ば父を殺すの子を罪せざるに同すと云て即ち曹芬を斬と 唐書寶參傳に見

妄語部 並惡口誹謗

〔二十七〕  
彭淵材胎  
生之鶴

○彭淵材と云ふ者その性迂濶なり兩の白鶴を蓄ひ客來れば夸て曰く此の白鶴は仙禽あり尋常の鶴はみち卵を生す今この鳥は胎生す或時珍客あり亦た此説を語る其言未だ畢ざるに園の奉行の許より今青白鶴一ツの卵を産と告たり淵材これを聞て叱て曰く偽はり告るも

〔二十八〕  
佛奇一貴  
羅云妄  
語

のかを何そ卵を生すべきと鶴を客の前へに將て來らしむるに此鶴即ち頸を展て地に伏亦一ツの卵を生す淵材これを見て客の笑はんことを恥て赤面して曰くこの鶴は仙人の道を忘れたりや嗟昔れ禹錫が嘉話の説に誤られぬとて首を搔て大に惡たりと 墨客拙筆に見

○昔し羅云尊者未だ道を得ざる時少年尙少して好で妄語す信少して無量の人をして佛を見奉ることを得ざらしむ如來これを調へんと欲して遠く行きて還り玉ひて羅云に仰せて深盤に水を汲ましめ脚を以て盤を踏跳して覆せ又水を汲み入れよとの玉ふ羅云白して曰く盤既に覆して水その中に受け容すと佛の玉のく汝が心性に信少なく好で妄語すること盤の覆たるが如し法水更に受容べからずと種々に呵責去玉ふに羅云即ち心意開解して直信成熟すと大論の説

〔二十九〕  
程普樂見  
二地獄

○唐の程普樂は少して音聲伎樂を好む永徽六年七月に微疾に依て俄に死す心上煖なるが故に家人敢て不埋第六日の旦に至て蘇甦して曰く我れ閻羅王の前に行くに此の土にて我れと友たる張舎兒と云ふ者今獄中へ墮して苦を受るを見る閻羅王我に語て曰く汝が未だ死すべからず今より二年を過て後ち命終し其の時正に此の獄中に来て苦を受る事此の舎兒が如くあらん此舎兒爰に墮在する所以は本と人間に在りし時妄語綺語惡口兩舌し亦たの僧尼を調弄し佛法を輕戯し或は三寶の名を借ては他の財物を誑かし以り是れを以て婦子を養育し



或は伽藍に入りての僧物を食用して汚穢不淨あり是れ等の業を以て今此の苦惱を受くるなり汝ぢに於て舎見が如きの重罪なしと雖ども彼れと友たるを以ての故に又過なきに非ず故に重ねて此獄に入て是の如くの苦を受くべしと我れ是れ等の事を見聞して即ち蘇りぬと其れより京師に到り諸寺を経歴して戒を受け堅く守持して不犯法苑珠林に見たり

○昔し佛在世の時長者の婦孕んで十月を満れども其子産生せず尋で重ねて有り身已に月満て産するに始の子は母の右脇に在て出でず如是次第に九子を孕て各々十月を満て産す爾れども第一に懐める子は胎中に留りて出ることを得ず其の母愛て治療するに亦た毒藥を服すれども損傷せず既に年老て其の親屬に遺言す我年極まり病重して死せん胎中の子は猶活せり我死せば腹を開て子を育せよと云て氣絶たり尸を塚間に送て神醫耆婆を請して腹を割て一兒を得たり頭髪皓白にして諸親に語て云我れ先身に惡口を以て僧を罵是の因縁に由て母胎に處こと六十年を経て大苦惱を受たりと世尊遙に此の兒の善根已で熟することを知召て自ら彼の塚間に到り小兒に告て言はく汝は是れ長老比丘かりやと答て白さく是なりと爾時諸比丘白佛言く今此の老兒宿世に何の業を造てか久く胎中處するやと佛の言く過去迦葉佛の時に諸比丘即ち夏座安居す一りの比丘有て僧の維那と爲て制法を出して曰此の夏座九旬の間に要らず道を得たる者には自恣を聽すべし若し未だ得ざる者に自恣を聽

長者子在胎六十年

すべからず而して諸比丘は皆得道す唯此の維那一人のみ道を得ず制法の故に維那に自恣を聽さず心中太だ懊惱す汝等比丘の爲に夏座安居の料及び僧事を營理して安穩に修道せしめたり而るを反て我を聽さず布薩を恣にすと大衆即ち是を牽て閉室の中に閉たり維那怒て罵て曰汝等常に閻冥に處して光明を見ざることを我が今の如くならんと云て自ら經死して地獄に墮して久く苦を受け今始て得脱し胎中に淹留し閻冥の間だに苦惱し維那と爲て僧事を營みし功德に由て佛に値て出家修習し阿羅漢果を得んと百緣經

○昔し佛弟子に畢陵伽婆蹉と云有り恒河を渡り玉ふに水彌滿す乃し水神に向て曰く小婢流れを留よと水神此の言を聞て悦びすと雖ども比丘なるが故に水を遮留て渡す水神後に佛所に到て佛に白して言さく佛弟子我れを罵て小婢と云ふと佛畢陵伽を呼て曰く汝ら恒河の神を慢こと大ある過なり懺悔し改謝せよと畢陵伽即時に恒神に向て合掌して曰く小婢怒事勿れ今汝らがために懺悔すと大衆是れを聽て笑て曰く云何懺悔しあがら又水神を慢小婢と云ふやと佛恒水の神に告て曰く汝ら畢陵伽が懺謝することを見るや是れ即ち慢心有るに非ず此の人五百世が間常に婆羅門の家生して高貴あり故に憍慢有て諸人を輕賤す今過去の餘習に引れて口には憍慢の言有りと雖ども心には其の念あしと智度論に見たり

○昔し如來諸比丘と共に毘舍離國の梨越河に到て漁人の魚を捕を見玉ふ一の大魚有て網に

畢陵伽婆蹉

百九十四

熟巨梨魚

入る五百人有て挽とる水を出てす五百頭の牛を借て千人其力を併て漸く岸に著て見れの一  
 身にして百の頭あり身軀は魚にして頭は是れ諸獸なり怪き事限りなし佛即ち魚の所に至て  
 汝は是れ迦毘梨ありや不やと魚答て云ふ是なりと佛亦問玉はく汝に教へて惡言を巧にせし  
 者今何れの處に在りやと魚答云阿毘至と墮せりと阿難その因縁を問如來言く乃往過去迦  
 葉佛の時婆羅門の兒有り迦毘梨と名く聰明博識なり父死して後ち其母兒に問今世間に汝か  
 多聞深智なるに亦勝る、者の有りやと兒答ふ沙門勝れたり我れ疑しき事を問に皆な解脱す  
 沙門の問こと我れ答こと能はずと母教て曰汝偽て沙門となり其の法を習學し已てに達  
 せの家に還べしと兒即ち比丘と作て學三藏三尋で家に還る母問て曰く今の沙門に勝こと  
 を得んやと兒の曰尙未だ勝れずと母憤て兒に告て云く汝自今後ち沙門と論議せん若  
 し勝ずは即ち罵辱しめよと後論議して勝ざれば即罵て曰汝等沙門は是れ愚闇無知なり頭  
 は牛頭馬頭兔狐羊犬鹿鹿猫鼠乃至且獸の頭に似たりと如是持戒行道の羅漢比丘を罵辱し  
 ひ此の故に今魚身を受て一身百頭猪象驢駝虎豹豺狼等衆獸の頭に似たり此の賢劫千佛の出  
 世の後も尙未だ此の魚身を脱せずと 賢愚因縁經の説

○佛瞻婆大城に在す時彼の城中に長者有り繼嗣なき事を患て六師の外道に仕て之を求む其  
 後ち幾程なくして婦有身せり時に長者外道の所に行て問て曰く我か婦已てに懷妊す是れ男

樹提不三

子なりや將女子なりやと外道答て曰く胎内の子に必ず女子ならんと長者是れを聞て慈惱し  
 て曰く我れ子を求むる事只た男子に在りと又如來の所に到て是を問ふ佛の玉はく懷胎の  
 子は是れ男子なり更に女子は非ず而も福德無比ならん必ず疑ふ事をかれと外道是を聞て心  
 に嫉妬を生して即ち菴摩羅果を以て毒藥を合して長者の家にて曰く瞿曇沙門善く汝が婦  
 の懷胎の相を占ひ説り生産の時に臨ば此の藥を與ふべし若し此の藥を服せば所生の子端正  
 無比にして産母尙患なからんと長者大に歡喜して其毒藥ある事を知らずして即ち婦と與ふ  
 婦毒に中りて忽に死す于時六師の外道甚だ悦て城中を周徧して高聲に呼て曰く沙門瞿曇彼  
 の長者の婦は男子を生すべし其兒は福德無比ならんと云ふ子尙生せざるに母已てに死たり  
 是れ福德ありやと其時に長者婦の屍を城外に送て荼毘す死屍漸く火に焼れて腹裂たり兒  
 胎内より出て火中に端坐する事猶し鴛鴦の蓮華の上に處するが如し其時に如來耆婆に告て  
 の玉はく汝ら火の中に入て兒を抱き來れと耆婆行て火叢の中に入るに清涼の河水に入る  
 が如し即ち兒を抱て佛の所に還る其時に佛長者と告ての玉はく一切衆生ハ壽命不定なり猶  
 し水上の泡の如し衆生若し懸重の業果あれば火も燒こと能はず毒も害する事あたはず是の  
 兒の業果は我が所作にあらざるありと時に長者の曰く唯願くは如來爲に石を與へ玉へと  
 佛の玉はく此子は猛火の中より生ず火をは樹提と云ふ故に此兒を樹提と名づくべしと

涅槃經に見たり

唐三十四  
唐慧皎按

○唐の釋の慧眺姓は莊氏にして出家し小乗の法を學す襄陽の報善寺の哲公の座下に住せり哲公三論を開講す慧眺是を聞いて不忍を生し誹謗して曰く三論は空理を明す今又講師の空を執著すと言語發し已ぬれば忽に舌抜出る事長さ三尺又眼耳鼻より皆血を流出する事七日七夜なりて時伏律師と云有り其拔舌の事を聞てこれに告て曰く汝ち太愚癡の致所あり一言の毀謗其科五逆罪に過たり何爲ぞ其罪を免る、事を得ん若し是を免れんと欲せば唯た大乘を信せよと眺是の語を聞て乃し燒香發願して前非の誹謗を懺悔すれば舌即ち還て口に入り收りぬ遂は哲公の所に行き誓心して唯た大乘の法を聽けりと

宗鏡錄に見たり

唐三十五  
梁女兩舌之罪

○唐の咸陽に婦女あり姓は梁と云貞觀年中に死す然れども胸あた、かなり故に葬殮せず已てに七日を経て甦りて云ふ我れ人にどらはれて一ツの大院の内に入る三リの官人有り案文を前にをさ筆を取りて居又左右に侍る人ありき乃し左右の人に謂て云く此婦女死して爰に至るべき者か否やと勘辨せしめ問ふに一人ありて一ツの案文を開きてかながへて云ふ此者死すべきものと姓名を同ふすこのゆへに追來りて責のみと官人左右の侍臣のものに救して即ち放還さんと欲するなりと其時梁婦官人又白していはく我れ何の罪ありて責を受けてかへると官人案文を勘ふるに云く梁女平生にをいて餘罪更になしといへども兩舌の罪あり

り即ち一人來りて其舌を拈斧を以て是を斫事一日の中に四度なり如是すること七日して送りて歸らしむと云ふ時に其の家主舌を見るに腦爛て有之と

冥報拾遺記に見ゆ

三國合類 大因緣集卷之七終

三國大因緣集卷之八

六蔽門

慳貪部

【一】

○唐の章莊は廣く書典を讀み學智の名あり其性甚だ慳吝なり米を數て炊き薪を秤て爨少しの肉と云へども能く覺て饑とも弄す一子有り八歳にして死す妻是れを斂葬するに法の如く服を著せしむ章莊是を剝取て故席に裏て塚に埋む而して其席を取りて歸る愁へ歎きて嗚咽する事は腸斷膽落るか如しと雖とも唯た慳吝の性は如是 朝野僉載に見

【二】

○佛在世に舍衛國に長者有り難陀と云ふ大福にして財寶無量なり然れども慳貪嫉妬にして布施することなし閻門七重に造りては堅く乞食貧人の行くを制し鐵網四方に設ては密しく啄鳥獸狗の來るを遮る嘗て一子あり梅檀香と名づく父長者壽終の時子に謂て曰く吾れ死して後ち沙門婆羅門等に布施する事勿此の諸有の財物の七世に供するに足れり必ず能く守護すべしと云て命終す其れよりして舍衛國の旃陀羅が家の盲母の腹に託胎す乃し生産すれば兒も又盲目あり漸く八九歳に成る時盲母一杖一器を與へて曰く汝ち眼晴なし我又盲者なり故も長く養育する事能はず自乞食して餘命を擧へしと其後ち小兒家々に行て食を乞ふ一日梅檀香が家に到るに守門の者怒て手を取て深坑に擲入る乃し頭破臂折盲母聞之杖にす

【三】

がり來て曰く汝ち何ある惡事をあして 苦に遇やと子母に告て曰く我梅檀香の家に行くに惡人の爲めに打擲せらるなりと佛是を知めして阿難に對して曰く難陀長者慳貪の業に因て今梅陀羅が家の盲母の子と生其身も又盲報を受く命終の後阿鼻地獄に墮すへし若し人財寶を積て自衣食せず亦布施を行せざるは愚中の愚是に過たるは無し是の故に智者は布施を修して生死を出ん事を覓汝等必ず慳貪を生して無邊の苦を受る事なかれと 出曜經の意

○昔佛在世の時舍衛城中に婆羅門の長者有り財寶無數にして慳貪放逸なり常に門を閉て客の來るを喜まず食時には必ず門士に仰せて戸を開て人安りに入ることを防ぎ乞丐の來り索むることを制す一時肥羅を殺し薑椒を以て和調して煮熟し夫妻二人對座し一兒を前に置て飯に具して相食ふ佛此の長者を照見し玉ふに宿緣有て度すべき者也則ち化して沙門と作て座の前も現して咒願して言はく多少の布施當に大福を得べしと長者擧り頭見て罵て曰く汝の道人として羞む無く夫妻相食する中に何を唐突すると沙門の曰卿愚癡にして羞を不知室家對して共に娛樂す卿が父を殺して以て怨家を養ふて不知反て沙門を罵や是れ我か父を殺して其肉を食ふ卿等が口腹の即ち是れ丘塚也妻兒は妄に愛貪を起さしめ卿をして惡趣の牢獄に入らしむ是れ怨家に非ずやと 五言十二句 長者の曰道人何か故ぞ説くこと如是なるや答言く其案上の雞肉は是卿が先世の時の父也慳貪の故に常に卿が家に來て食せらる妻

は是れ卿か先世の母也思愛深くして今還て汝が婦となる兒是れ前世の業有て羅刹鬼已てに卿か子と成來りて愛を以て卿を苦しめ犯さんとす汝ら宿命を識す父を殺して怨を養なひ母を以て妻とす五道生死の業繩固く卿を縛て輪廻無窮也汝ら愚にして不知唯我れ能く此を見る豈慚恥せざらんやと佛形忽ちに現して光明照耀す長者身の毛豎て懺悔慚恥し五戒を受たり佛爲に説法し玉ふに須陀洹道を得たりと法句經の是を以て思ふに父母死して其生する所を知らず或は其の所生の緣因に由て其子還て先世の父母を妻とし夫とし亦其肉を食する等生々輪廻の際た皆如し是

【四】  
摩訶南長者

昔佛在世の時舍衛城中に長者有り摩訶南と名く珍寶無量にして繼子無し性甚た慳貪にして庵布を衣とし庵澁を食とす朽故の車に乗し樹葉を綴て傘蓋とす一時蓋を食ふに自ら惜んで是を煮て汁を啜り其の滓を賣て財用とす未だ曾て少分の布施するをも見ぞ沙門婆羅門貧窮の乞兒來れば門を閉て入れず況や一粒の施心あらんや又父母妻妾奴婢と雖も供給ならんや老て後病發るに醫師を請せず遂に命終して諸有の産貨悉く官家に入る一分追福の供養にもならず如來說さ給はく摩訶南曩辟支佛に一飯を施す甚た至心あらず手づから地に投て與ふ是に由て人中又還り來て富祐也投與て亦悔るが故に財を用ること能はず死鬼中に生すと雜阿含經の説

【五】  
迦留陀夷  
女慳食

○如來昔し舍衛國に在せし時に長老迦留陀夷既に阿維漢道を得て鉢を持して城に入りて乞食す一りの婆羅門の家に到る主人の在らず婦一人門を閉て煎餅を作る迦留陀夷即ち定に入りて通を起し地中より庭上に涌出して鉢を乞ふて煎餅をまばり居たり婦これを見て心に思はく是れ沙門は餅を貪はりて來り立てり即ち曰く假令ひ沙門の兩眼は脱て地に墮ち盃ぎの如くなるも與へじと迦留陀夷の雙目衝出て盃の大さになる婦の曰く沙門我が前に倒に立つとも與へじと尊者又倒まに立てり復曰く假令ひ我が前に死すとも與へじと尊者即ち滅定に入りて息絶身冷婦大に驚て心に念するやう此沙門の常に波斯匿王宮へ行て未利夫人の師なり若し此にして死せりと聞なば如何なる過に落てか辛き目みんと即ち言て曰く汝ら若し活かへらば我れ一餅を與へんと尊者便ち定より起て甦かへるが加し婦尙を餅を惜む唯た一ツを與へんとするに盆内の餅みな連り著て離れず尊者の曰く我れ餅を貪らず願くは祇洹中の比丘僧に與ふべしと是の婦宿善熟するを以て心に念す實に餅を貪せず但我を愍み玉ふ故に來りて開化し玉ふと即ち餅の筐を携て祇洹に到り衆僧に施す尋で迦留陀夷説法するに其の婦法眼淨を得たり夫家に歸り亦祇洹に到る迦留陀夷爲めに説法するに同じく法眼淨を得たり乃至身を終るまで常に供養す十誦律の説

財貪

范蠡子被

○越の范蠡は五湖に遁れて姓を改ため名を替て陶朱公と號す三人の男子あり大に富て財を積貯へたり其の中男楚國に往きて人を殺して官に囚しかり父即ち黄金を出たす科を贖ひ救はん事を計り少子を使さんと云ふ長男か云く我は長子なり我を留めて少弟を遣すは是れ家督の詮なく我を不肖の子と思ひ給ふ乎と云ふ朱公即ち己ことを得ず長子を遣すに竟に果して中男殺されて長子の空しく歸る朱公歎して曰長子を使さば事調はずして中子必ず殺されん事を知りて少子を遣さんと云ひしものをや其の故は長子の我れと共に財利を求めて貧しさを經揚りて財の求め難きことを念す故に用ることを輕せずと知れり少子は我が富て後に生れし故に財を用ることを輕す而れり長子の其の科を贖ふに財を出たす事を勞ひて果して殺させたり少子を使さば其の命を贖ふに財を出たす事を惜むまじきが故に事調て殺されすして歸るへき者なりと

史記越世家に見

市中用二

○昔し長慶年中に一りの商人有り市に出て利を求むるに賣買の兩斗を用ゆ或る時雷震して此の人を殺す雲絶雨晴て後死骸を見るに脊に二門口月八三と云文字有り諸人意をしらず時に道人來て斯の文字の背骨にて豎の中畫不見云て馬の鞭を以て脊の文字の上に當て見るに市中用小斗と云の五字とあれり

事文類聚天台補註に見たり

○昔し佛と阿難と舍衛國の曠野の中を行き玉ふ黄金の伏藏あり如來の玉はく是れ大毒蛇なり

〔八〕

黄金伏藏是

りと阿難の言く實に惡毒蛇なりと爾の時さ田の中に耕す者あり佛と阿難と毒蛇有りとの玉ふを聞て即ち往て視るま眞黄金あり偷に取りて歸り俄かに富祐になれり國王聞て捕へて糺明し獄に入れて誡め盜賊の罪とす先さに得たる黄金のみな用ひ盡せども免む尋で刑に行なはんとして責の具を出し桎械を加へて苦しむ云ふはかりなし其の人唱へて言く大毒蛇世尊惡毒蛇阿難と大王聞て奇み喚て故を問ふ何を毒蛇と言乎と其の人即ち答て曰く我れ往日田中にありて耕作するに佛阿難説きて毒蛇との玉ふ我れ往て見るに黄金なり取りて歸りて富祐なりしも今の實とに大惡毒蛇なりとて偈を説く諸佛の語に二ツをし惡毒蛇の勢力今始めて知れり我今此の危難に臨む毒蛇は螫ところ身一ツに及ふ財寶の毒蛇の螫こと家の眷屬に及ぶ是の故に佛語に信を生すと 大王聞て是の人深く佛語を信解することを知りて偈を説て黄金をば還し與へ罪を宥めて家に歸らしめ大に佛事を興す 大莊嚴經論の説

○漢期門郎程偉が妻の何れの處の人と云ふ事を知らず神に通して萬物を變化し道術の仙女なりよく水銀を煎して白銀とあす用る事あれば常に作る更に亦貯積す程偉思はく多くこれを作りて貯へば富祐なるべし僅かに作りて數用ゆ何んぞ夫れ少や願くは我れに教へよその方を得て白銀多く貯へんと妻の曰く公が骨相は金銀多く得て福ひを買んとす教へからずと程偉頷りに逼つめて習はんと云ふ妻大に辭すれども聽さず忽に尸解とて其の妻の尸

程偉之妻

蟬の如く蛻けて去る 眞詰に見ゆ

〔十〕樂羊子之妻賢

○樂羊子は家貧し妻錦を織りて業とす羊子は學を勤め行を慎み賢人の名を世に聞ゆ或る時樂羊子出て行くに道にして黄金一餅を拾ひ得て喜こび持て歸り妻に與ふ妻悦びずして曰く君子は遺物を拾はずと云へり此一餅の金を以て君子の行迹を缺べさやと云ふ羊子恥て本の所に黄金を棄たりと 列女傳に見ゆ されば黄金は人を富し用を調のへ實に寶ありと雖も貪則ち行を損し愧を設け福を生し身を亡はし家を破る也

色貪附五欲

〔十一〕阿輸迦王

○昔し阿育王は常に六萬の羅漢を請して供養し説法を聽受せらる其の弟を阿輸柯王と名く毎に衆僧の供養を見て更に何の徳有てか如是あると阿育王の言く比丘常に受と雖も深く無常を觀するを以て貪着を生ずる事無しと阿輸柯王是を信せず阿育王是を調んと欲して潜に人を遣して王位に登り玉へと勸めしむ阿育王又答て曰く國に二りの王有んやと即ち誅罰せんと欲す且らく七日の中ち閻浮提の主たらん快樂を極むへし是を過己らは當に殺さんと阿輸柯乃し位に即て五欲を恣にす一日過れば旃陀羅をして鈴を振て告しむ一日已てに過く餘り六日有て當に殺すへし是如七日を滿て鈴を振て曰七日已てに過たり今日當に死すへさ也と阿育王問玉はく閻浮提の主受樂を快やと阿輸柯答曰我都て樂無し旃陀羅日毎に

〔十二〕阿難端正

鈴を振て高聲に唱ふ七日の中ち一日已てに過て六日を餘す乃至六日已てに過て今日有り方に死せんと我此聲を聞に妙ある五欲も樂しませ憂しみ深しと王聞て罪を許す阿輸柯即ち道果を證す喩は人有り遍身に樂を受れども一處を針にて刺則んは樂しみ息て痛を愁が如しと 大論に出

〔十三〕樂欲五百仙人失

○阿難は前世の時忍辱無瞋の行を修せしか故に其の身端正にまて人見て歡喜す或は右の肩の白さを見て水汲む女あり前抱さし子の頸に纏べの繩の繩を知らずして子を井の中に落せり如來即ち横被を制して右の肩を隠さしむ 本行經 ○或は淫女ありて阿難の面容麗しきに深著て禁咒を以て其の心を撓し淫肆に將て往さしを文殊これを引還して正念に住せしむ 摩訶佛經の説

〔十四〕香欲連池神

○雪山の中に五百の仙人あり五通を具足して飛行自在なり甄陀羅女已てに雪山の池中に於て沐浴し歌ふ其聲を聞て禪を退し通を失せり 婆沙論の説

○昔し一りの比丘あり林中の蓮花池邊りに經行す蓮華の香を聞て鼻受の心愛著す池神尤て曰汝ち何ぞ林下の禪坐を捨て我か香氣を偷む香に惑著するか故に諸經使の伏する者皆起れりと時に更一人有り池の中に入りて多く其の華を採根莖を掘挽て狼籍にして去る池神黙して誠しめず比丘の曰此人池中に入りて華葉根莖を破るに更に寂として言いぬず我れ唯池邊

に經行すち何ぞ呵することの急なるやと神答て曰世間の惡人は常に罪垢の中かに在り塵池に足を没し糞尿は頭を陥いる如し是不淨の者我共に語はず汝は是れ禪行の好人にして此の華香に著して好行を破る譬は白蠟は鮮潔にして異物黠汚すれの人衆人皆な見るが如し此の故に我れ汝を呵す彼の惡人の譬は黒衣に黒を黠するか如し人の見ざる所誰か是を問はんやと雜阿含經の説

〔十五〕  
味欲沙彌  
成二酪中  
虫一

○昔し一りの沙彌あり常に酪を愛す師の比丘己てに羅漢果を得たり檀越即ち酪を供す沙彌常に其餘殘を得て心中に惑著して離れず命終して殘酪瓶の中に生ず後ちに比丘又た酪を分る時さ曰く徐々にせよ此の愛酪の沙彌を傷ること勿れと諸人その故を問ふに答曰此酪中の蟲の本是れ我か沙彌なり殘酪を貪愛死して後ち伊瓶中の蟲となれりと而して説法するに虫即ち開解す重て三歸を授くるに虫死して天上に生すと 婆沙論の説

〔十六〕  
觸欲却撥  
仙失し通

○過去の時さ仙人あり名けて却撥と號す五通を具して國王の爲めに敬重せらるる飛行自在にして王宮に往來す大王即ち自ら仙を捧げ髮を地に布て床に昇せ手から食を供養して年久し王政道の爲めに遠く行く王に一女あり端正無比なり大王この女めに告げて仙人の供養を司まむ時に彼の仙亦た飛行して來る王女即ち手を以て擊て床に坐せしむ女の柔軟の身手に觸れて欲愛を生し通を失して歩より還ると 却撥仙人經の説

破戒部

〔十七〕  
破戒人爲  
龍

○龍佛に白して言さく我れ初初より大海に住す初めは妻子はなほは少あり今の眷屬繁多なりと佛の玉はく佛法に於て出家し戒を違背し行をかかす如是類壽をはりて龍の中に生するなり狗樓孫佛の時九十八億の在家出家禁戒を違犯するもの龍の中に生ず狗那含佛の時八十億の居家出家戒を破り心を放ま、にして龍の中は生す今ま我世の中に於て九百九十億の居家闢諍して經戒を誹謗するもの龍の中に生するなり 海龍王經に見たり

〔十八〕  
飲酒人破  
三戒

○昔し一りの鄭婆塞有り性本仁慈賢良なり五戒を受持して專精にして守る一時甚た渴して一罇を見るに酒有り水の如し遂に取て是を飲む是に由て飲酒戒を犯す時又酔て心性亂る隣家の雞來て其の舎に入る盜て殺し煮て瞰ふ此に盜殺の二戒を犯す隣女乃し雞を尋て其の室に入る強逼て交通す即ち邪行を犯す隣家は官に訟へて問訊するに憚り拒て此事無しと陳す由て妄語戒を犯す如是五戒皆由酒犯す如來即ち諸比丘に告て自今已後茅葉の端を沾許の酒滴をも飲ことを得ずと 毗婆沙論に見たり

瞋恚部

〔十九〕  
道乘法師  
傲

○釋の道乘法師は叡山西塔寶幢院の沙門正算の學徒なり後に法性寺に移りて閑居す少年時より法華經を讀誦晝夜懈ことあし而れとも其の性多瞋にして常に僞語を吐て朋友童僕



等を罵恚息則さの頭を叩きて罪を悔一時夢中に法性寺を出て睿山に上る麓よりして遙に山上を見れば翠微より山頂に至るまで金銀珠玉殊妙嚴淨の粧せる樓閣あり其の中に百千無量の經典黃卷赤軸金銀の泥書あり乘見之希有の思ひを生ず傍に一人の老比丘あり即ち問之曰く此の經閣は誰れ人の建立ぞや比丘の曰く是れを知らずや汝ちが年來讀誦せし經卷あり此の善根力に依りて淨土に往生すべま乗この語を聞て太歡喜す忽ちに火炎起りて經典樓閣ごとくく灰とある乘又た比丘に問て曰何等の因縁によりて火起るやと比丘の曰く是れはこれ汝ちが嗔恚を起して誦經の功德を滅するなり若し今よりして恚を息て受持讀誦せば安養の往生亦た疑ひなしと乘夢覺てより佛前に向て誓て嗔恚を止て專精に經を讀すと  
元亨釋書に見たり

〔二十二〕  
馬師滿宿  
爲之龍

○馬師滿宿とて二人の比丘あり馬師は性愚痴なり滿宿は多瞋なり此二人亦た釋種なり本是れ田夫の子なり共に議して曰我等己てに耕作を以て辛苦す共に出家して此の苦を遁るべし佛法の中には衣食自然なりと聞く將愛ふる所無しと復た更に籌て曰誰も就てか出家せんと即ち舍利弗目連の所に到て出家を求め己てに質を改めて雞陀山の聚落に住して更に人の諫曉を容す諸の非威儀の事を作し六群比丘の中かに最も魁首たり後に此の二人は愚痴多瞋あるに因て死して龍中に墮生す是常に音樂戲笑を喜み說法論議して得道の信修なし他をし

〔二十一〕  
夏侯惇不  
鑑之面

て惑亂せしむ名利の心更に止息せず果して畜趣に墜落すと  
毗婆論の説

○魏の夏侯惇は將軍の位に登る嘗て流矢よ中られて左目を傷へり時に軍中には是を號して盲目侯と云ふ惇竊に聞て怒ること甚し一時鏡に向て又たその鏡を妬むそれより永く面を照さざる若し鏡を見れば恚怒して即ち地に投す  
蜀志に見たり

〔二十二〕  
濟陰王思  
怒蠅

○濟陰に王思と云ふ人あり天性急にして小事と雖とも大怒嘗て筆を執て書せんと欲す忽ち蠅有て其の筆端に集る再三これを驅拂ふに復來ること始の如し恚怒て自起て劔を抜て遠く逐ふ然れども終に得る事能はず還て筆を取て地に擲又た足を以て蹋壞と  
魏略に見たり

〔二十三〕  
舍利弗六  
住退

○昔し舍利弗過去世の時嘗て菩薩の行を修す其の位已十住に至りて檀波羅蜜を行し凡て諸人の來り乞もの更に憍むこと多く皆な其の望むに隨て布施す一りの波羅門有り前へに進みて曰く汝の兩眼を抜て與らるへしと舍利弗の曰く眼はこれ人身の至要なり猶を天に日月有るが如し兩曜照せば世間の闇を除きて一切の衆生自の所用を達するに自在あり人亦た兩眼を用ひて進退取捨の功を成す我今佛道を行すこの眼に由て修學の便りとす兩目己てに盲あば行法照明の助けを失ふべし汝假令我が兩眼に非すと云ふとも亦た別に好む者の有らん自餘の望む所を云ふへま我れ能く與へんと波羅門の曰く夫れ布施の行と云ふは縱令の國郡家屋財寶妻子身目手足等總して人の望む所一念の憍惜なく乞ふに隨て與ふべし我れ今

諸餘の望みあし唯汝の眼睛を得んと欲す願くは抜き與へらるへし若し亦た惜んで與られずは是れ檀施の行は非す舍利弗この語に由て理に屈す是非あく両眼を挑て與ふ波羅門是を受けて即ち地上に捨て唾吐て曰く汝の面上に在る時は光瑩閃々として玉の如く清映凛々として珠に似たり此の故に我れ是を乞ふ今亦た是を見るに完肉連々として腦血穢々たり光りもなく明もなく極めて汚はし我は淨行の者なるが故に是の不淨に觸べからずと云て足を以て蹂躪して去りぬ舍利弗即ち思念して曰く無用の物に於ては乞ひ取りて詮なし我が一身の至要を損失せしめて而も亦た前へは捨て唾を吐て穢み剩さへ蹂躪す無義無法の惡者無道無信の蔽人也如是の輩らは我れ度すべきに足らずと此の一念の瞋恨を生ずるを以て九阇劫所修の行法の功德一時に滅すと

大論に見たり

懈怠部

○昔し孟軻儒を學して名あり母は錦を織て業とす中ころ孟子母の家に飯る母その學の至れる所を問ふ孟予の云未た博習こと不能母即ち刀を以て其の機經を切て云く汝中比にして學を廢て字に歸ること我か此の機斷が如し重ねて織べからず丈疋をなす事不能孟子大に懼れてそれより學校に往て日夜に學を勤子思を師として道を聞き遂に名儒と成たり

列女傳

【二十四】孟母機

【二十五】樂羊子

○樂羊子と云ふ者學文の爲に家を出て、遠く師を尋ね一年を経て後ちに家に歸る其妻の絹の絹を織て業とす樂羊子が中ころ學を棄て家に飯りたるを見て刀を以て機に向ひて云く此の織の本とは是れ蠶の繭より出で、繰合せ機は掛て經を成し梭を飛して一筋の絲緯になす一絲を増て寸となし織て息ざれば尺とある尺を累て尙織ことを已ざれば遂に丈とあり疋となす若し今丈疋にも満すして是を斷は前々の功は損して空しく丈用更になし君僅に學して飯るも亦これと同じと云ふ樂羊子大に愧て又學に趣きて七年歸らず遂に天下に名を揚たり

列女傳

散亂部

○昔し仰山因みに洪恩禪師に問曰我れ今如何して見性することを得んと禪師の曰譬は屋上に六窓有て内に獼猴有らん東邊に呼ば東邊に應し如是六窓俱に呼べは俱に應するが如しと仰山の曰若し内の獼猴困睡えて外の獼猴是れに相見せんと欲せば如何んと禪師此の時繩床を下て仰山の手を取て舞て歌ふ山々興レ汝相見し了ると録見普賢觀經に心根は如二猿猴と説けり是即衆生散亂の心に喩ふ身軀は屋の如く六根の窓の如く一心は猿の如し猿は一軀あれども六窓に應す心の一法なれ共六塵に奔るなり

○昔し佛在世に密婆私叱尊者と云ふ羅漢あり此の羅漢の前生を尋れば五百世の間獼猴なり

【二十六】六窓一猴之喩

【二十七】密婆私多

風動幡動  
問答

故に今佛弟子とあり阿羅漢果を證すと雖も動すれば樹上に攀のぼり 躁事と有愚人は是れを見て此の比丘は獼猴に似たりと云ふて嘲笑ふ然るに此の比丘阿羅漢果を得たるが故に内に煩惱心なしと雖も尙前生の習氣に縁て時々獼猴の業をあせりと  
○六祖の慧能嘗て廣列の法性寺に到て印宗法師の涅槃經を講演去玉ふに値ふ時に風吹て幡の動くこと有り一僧は風動くといひ一僧は幡動くと云ふ議論して已ず慧能進て曰く是れ風動くにあらず是れ幡動くにあらず仁者心動くと一衆駭然たり  
法寶壇經に見たり

愚痴部

二百十九  
摩訶盧比丘

○昔し一つの國あり多摩羅と名つく城を去ること七里よして一精舍有り五百の沙門常に其の中に居して讀經行道す時に一りの老比丘あり摩訶盧と云ふ性太暗鈍あり五百の道人一偈を教ゆれども遂に覺得ることなし諸の沙門是れを輕賤して會合する事なし故に常に精舍の掃除をのみ致せり于時國王諸の沙門を請して宮中に入て供養し玉ふ摩訶盧比丘自念言すらく我世間に生して愚癡闇昧なり一偈をたに知らに故に諸人に薄賤せらる世に活て甲斐なし所詮死なばやと思ひて繩を以て後園の大樹に繫自縊て死なんとす其の時に佛天眼通を以て遙に是を見玉ひて忽に樹神と現して曰く咄々比丘何爲死せんとすると摩訶盧具に意趣を述樹神の曰く月我か言を聽け汝ち昔し迦葉佛の時に三藏の沙門なり五百人の弟子有り自

二百二十  
摩訶盧比丘

多智なるを以ての故に衆人を輕賤し經典を吝惜して教へて爰を以て世々に聞鈍なりと  
法句經に見たり

○昔し營丘と云ふ處に一りの士有り天性不慧にして殊に折難を好む其の言こと必ず理に中らず或る日艾子が許へ造て問て曰く大車の下と藁駝の頂とに鈴鐸を著る何の故へそやと艾子が曰く車の甚た大ある物なり且復夜行く事有り狹路にして相逢則さハ俄か廻し避がたし鈴聲の遠く聞ゆるに藉て預しめ相ひ回避せしめん爲めなりと士の曰佛塔の上へに亦鈴鐸を設く然らば塔婆夜行て而して相避しむる事有りや艾子が曰く君理を通せず塔上の鳥鶻多く巢て糞穢を爲す故に塔の鈴有るは諸鳥を驚かす所以あり豈塔と車と同じく謂んや士の曰く鷹鷂の尾に又小鈴有り安を鳥鶻の鷹の尾に巢こと有らんや艾子笑て曰く恠哉君が理を弁ざることを夫れ鷹隼は諸鳥を撃の時或は林中に入り足線枝に縮て還ること能ざる事有り則ち翼を振る際鈴聲仄聞故に聲に應して尋索べきが爲なり豈諸鳥を驚かす爲の佛塔の鈴と同く謂はんや士の曰吾れ嘗て挽郎 喪家の樂を挽歌と云華車の大歌を見る未だ其の理を究ずと雖も今乃し是を知る若し木枝に縮て尋ね索る便なる事を但し挽郎の足に鷹の如く皮と線とを著るや吾れ是を知らずと艾子愠て而して曰く挽郎は死者の導あり死人生前に汝が如く詰難を好む故に鐸を鳴して而して其尸を樂しむ

るのみと 事文類聚に見たり

〔三十一〕  
愚人修福望報

○昔し佛在世の日羅闍祇國に愚人あり甚だ放逸にして父母に孝せず良善を輕しめ師長を敬せず家漸やく衰微せんとす是を歎きて福德を祈らんことを思ひ立ち外道の法に由りて火を祀ことを習ひ夜毎に火を燃し是を禮拜して夜半に及ひて止まる如し是三年にして一分の福報もなし復た更に日月に事る法を習て日の出るよりして没するまで月出るよりして隠るまで晝夜日月を禮拜すること三年に及ぶと雖も亦た一分の福報なし復た更又天神に事る法を習て香華燈明酒肉珍菓を備へて禮拜す此間たに貧困に至り資財田地等み亦賣盡して佗しき事限りなし勤苦憔悴して病を受く時に如來今祇洹精舎に在ますと聞て舍衛國に到り福德を得ることを望む世尊の相好顔容奇異あること星中の月の如く諸天大衆圍繞欽仰して巍巍蕩々たる粧ひを見奉り大に歡喜し頭面作禮して上の如く白して言く世尊は人天の變を度し玉ふと聞て香に遠く來りて皈し奉る願くは福德の利を授け玉へと如來告て言汝が事へし所は盡是妖邪師の教る法にして鬼魅に事るの行也祀こと山の如くして罪の海の如し主を殺し肉を屠りて福分を求むこれ福を設けて福を去ること遠し假令萬劫に勤苦して祀り禱とも罪業の積こと須彌の如く福報の來ること芥子ばかりも無し徒自費すのみ豈惑に非ずや又汝ち父母に孝せず賢善を輕しめ師長を敬せず憍慢放逸よして三毒熾盛あり何に由てか

福を得ん若能く心を改ため惡を棄三寶に歸し善を信じ己を修め仁慈を崇行なり四種の福報を得て世々に患なからん一には顔容端正あらん二には氣力豐滿三よの安泰にして病なく四にの一生のうち横難あし是を行して懈すは速かに得道せんと彼の人間て歡喜信解して曰く我れ愚にして邪師に惑ひ罪惡を積むこと九年あり今この慈化に由りて開解す唯願くは度して沙門とあし玉へと佛即ち善來比丘と言へは頭髮自落て沙門となり羅漢道を得たり法句經の說

〔三十二〕  
愚兒害父

○昔し佛諸比丘の爲よ本生經を説ての玉はく禿頭染衣の人あり兒と共に衣を持して水邊に行衣を洗ひて販る時に大熱の氣に中て一樹の陰に依り衣を以て枕とし休息して已に眠りに就す時蚊有て其の父の頭を咬其の兒即ち大なる棒を以て蚊を打とす蚊は輕く飛て去りぬ其の棒父の頭の中て即ち父死す時に樹神偈を説て曰く寧與三智者一譬。不與三無智一親。愚爲父害蚊。蚊去破父頭。十誦律に見たり

〔三十三〕  
藥特極鈍之兄比丘

○藥特は父母早く亡して兄陀。まづ佛弟子となりて道果を得たり弟特。尋出家して舍衛國祇洹精舎に住す如來即五百の大阿羅漢に仰せて鳩摩羅の一偈を教へしめ玉ふ藥特の性極鈍闇闇にして一句をも覺ゆず一夏九十日に及ぶと雖も更に一字を覺れば一字を忘る兄の沙伽陀これを誡めて曰汝今既に出家せり而るに此の法句の一偈を誦すること能はず九十日

に至りて尙一句をも覺るを夫れ出家は學道を務め說法度生するを以て生死を離る船筏とす  
 汝か出家せしことの官を恐る、故與耕耘の懶故與販賣の苦しき故與君上奉事することを  
 厭故與諸道各々その所作あり出家の所作を爲こと能はずは俗家に歸りて白衣と作と弟これ  
 を聞て祇洹精舍の門に出て悲しみ泣世尊見て問給ふに具さに兄の言以答ふ佛の言はく菩  
 提を成せんことは汝か兄の諫るに由んとて佛自手を以て槃特の手を牽て靜室に請て、掃帚  
 を誦せしむ槃特即ち心よ思念しけるは灰塵土石除は即ち清淨なり煩惱は是れ垢れの埃智慧  
 は是れ帚なり除は即ち淨なり今智慧の帚を以て諸垢の塵を除くと如是觀め郭然として  
 羅漢果を得たり  
 增一阿含經第六の說

〔三十四〕  
 譬特爲二  
 法比丘一說

○周利槃特生得頭魯なりといへども佛恩の深切なることを感喜して二句の偈を誦し得たり  
 其の偈曰守レ口攝レ意身に莫レ犯如是の行者の得レ度レ世矣佛即ち槃特に告げ玉はく汝か今  
 年老て唯た一偈を誦す魯鈍闇昧なることの人みな知る奇とするに足らず復尋て偈の義を解  
 せよ所謂身三口四意三其の起る所を觀し其の滅する所を察せよ是れに由りて能く治すれ  
 へ天に生し 念よ亂るれば淵に沈む悟りて道を得れ 泥洹に到るこの一偈を分別するに乃  
 至無量の妙法ありて出生す心ろ開 意解ぬれ 阿羅漢を得へし其の根寔愚鈍ありと雖ども  
 道果を得て覺悟し易し根鈍更に遮ること無きか故にと槃特すてに佛の訓誨を受て得道す爾

の時又五百人の比丘尼あり別に精舍ありて住す世尊日每一比丘を遣へして經法を説かしむ  
 明日の周利槃特來るへしと諸尼これを聞て皆を預しめ口を覆て笑ふ明日來らへ我等方に例  
 の守口攝意を此方より唱へて愧かしめん亦たその外にの一言の演所有るへからずと云ふ  
 日槃特來る比丘尼大小皆な出て、禮拜し互ひに目見合せて笑ふ座に尋て齋を行なふ食し畢  
 て手を澡ぎ請して說法せしむ槃特高座に昇て曰く我の是れ德薄く才无 僅沙門と成て頑鈍  
 無智なり學する所ろ唯た一偈あり粗その義は識得せり當に爲に説き演願くの各々靜かに  
 聽と此の時年少の比丘尼かの偈を此方より説んとするに口謝舌縮りて聞くこと能はず大に  
 怖れて自ら責て懺悔す槃特即ち如來の所説の如く一々に身口意の起る所ろ滅する所ろ罪福  
 内外の差別又よく三業を治めて天に昇り亂れて淵に沈み悟りて道を得神を凝し想を斷して  
 定に入り泥洹に赴むくの法理を分別解説するに諸比丘尼その異を恠しみ皆な大に歡喜して  
 漢果を得たり  
 法句經の說

〔三十五〕  
 燒三柁檀  
 作之炭之

○昔し長者の子あり愚にして貨を辨へず得失を別たす其父柁檀香木を車に載船を積て佗國  
 に往きて賣ふ日を重ねて商ひ月を越て售ども更に賣す國人に問けるは市の店に今は何か  
 直賣買り易きやと其人答て曰くこの比市に售易く直高き者のは炭ありとその時かの長者の  
 子しが積みもちたる柁檀香木を炭と燒て賣り代をして歸る 世の人みか無相とい

以實相眞如と云ふて深理高上ありと云ふを聞て是れに傾きて無上の寶號を輕するも亦是の如し

〔三十六〕  
盜し鈴を  
自其身  
に

○昔し兩の人有り共に佛寺に入て鈴を盗みて歸る鈴は耳有能く鳴か故も他人の聞かん事を畏れ一人のみの示して曰く必ず耳をさへよと云ふ其の者愚癡にして鈴の耳をは覆す自ら吾か耳を閉と 龍門類聚に見たり

附 邪慢

〔三十七〕  
須跋陀梵  
士

○如來即ち河難に告玉はく此の婆羅林の外に須跋陀梵士と云ふ者のあり年老て已てに一百二十歳なり五通を得たりと雖も未だ憍慢を捨てず四空定を得て一切智を生し是を以て涅槃の理を得たりと謂ふ阿難汝ち彼に往て語るべし如來の出世は優曇華の如し而るを今の中夜に涅槃し玉ふべし若し思ふ所る作へき所る有らは早く爲べし後日に悔ひとも益有るべからずと汝如し是語らは須跋陀必す信受せん所以は云何ん難は五百生の往昔須跋陀か子なり愛執の習氣尙を未だ盡さず是の因縁の故に汝か言を信受すべしと即ち佛勅を受けて彼こま往て語る須跋陀聞て曰善哉我れ今如來の所に往んと阿難と連て佛所に至る如來廣く八聖道の法を説玉ふに須跋陀か心意即ち開解して初果を得たり佛に從て出家す如來又廣く四諦の法を説玉ふに即ち羅漢果を得たりと 涅槃經卷四十卷の說

〔三十八〕  
大慢婆羅  
門生身陷  
坑

○昔し南天竺摩臘婆國の大都城西の方二十餘里にして婆羅門の邑有り此の邑の中に大慢の婆羅門有り博學聰明にして内外の典籍其幽微を究め風範清高にして名聲遠聞自ら得道の聖者也と謂て 屢慢想を起し毎に言て曰吾世に出て妙道を闡き迷を照し凡を導く先賢後哲更我か恵に等者有るへからずと此に由て大王甚珍敬し國民大尊重す門弟數千其の道を味はひ其の風を歎ふ婆羅門又言彼の自在天婆伽天那羅延天佛陀の所には世の人靡慕て其の道を求め其の形を圖して恭敬供養す我が道德の彼等も超たる事無邊也と云て赤栴檀を以て自在大婆伽天那羅延天及び佛陀の像を刻て床の四の足とし已れ其の牀の上に座して亦た世に人無か如し此の時に當て西印度の論師跋陀羅維支と云ふは妙に因明を極め深く異論を窮む戒香高く薫じ惠光廣く耀けり大悲普く霑ひ法水沈く灌く彼の婆羅門が聰明博識にして増上慢を起し放逸の門を開きて一切群庶を邪路に引さ入る、事を聞て歎して曰惜哉時に人無して這凶徳を傾く事をと於て是錫を荷て遠く來り此の國に至て大王に白し遂に論議を望む婆羅門聞て笑て曰彼何ん人ぞ我に向て何をか論をべさやと即ち弟子と共に論場に向ひ赤栴檀の牀に座して佛の正法を貶非る論師の辨舌若三懸河一邪宗を拆て問答往復す婆羅門久して辭屈し理窮して口を閉數千人の貴賤同音に感歎す婆羅門大に辱怒て血を歐こと數斗大地拆裂て生身墜陷す其坑深して底なし靈雨已ては旬日に彌り衆流を納ると雖も積水

港たぐいこと無なと云いふ見三四城記一是安ありに感かん情じやうを以もつて未なた得とく道だうせざるを還かへて道だう有あり謂いふ愚ぐ蔽へい無む信しんの者もの也

〔三十九〕  
如來現に神しん變へん一一治ぢ之之憍けう慢まん

○昔むかしし如來にがは祇洹ぎわん精舍しやうしやに在ます時とき舍衛城しやゑじやう中に五百ごひやくの乾闥婆けんたつばあり是こゝれ天てんの樂がくを奏そうする神かみなり善ぜんく巧たくみに琴こんを彈たんし樂がくを作つくて常とこに如來にがはに供養くやうす其そのの名な遠とほく聞きゑて四方よもは隱かくれし時ときは南方なんぽうの城じやう中に乾闥婆けんたつば王わうあり其そのの名な善愛ぜんあいと云いふ亦またた巧たくに琴こんを彈たんし樂がくを作つくす國中こくちゆう無な双さうなり憍慢けうまんふかく我われに増まる者ものあらじと思おもふに北城ほくじやうに善ぜんく琴こんを彈たんし舞樂まひがくをなすと聞きて妬ねたむ心こゝろあり自琴みづかを携たづへて十六大國じゅうろくだいこくの間まだを廻めぐりて樂がくを作つくす一いっに七種しちしゆの音聲おんせいを出だす其そのの聲こゝろに二十一じゅういちの解義げぎあり諸しよの人民じんみん是こゝれを聞きくに皆みなな心蕩どう醉さいるが如ごとく放逸はういつにして樂がくしみ歡よろこぶ遂つひに舍衛城しやゑじやうに至いたり婆斬はしん匿たひ王わうに見みて樂術がくじゆつを摘とべんと云いふて使つかを遣つかはす大王だいわう聞きて歡喜くわんぎして曰いはく汝なんら遠とほきより來きて此こゝの國こくの乾闥婆けんたつばと樂がくを摘とべんと云いふ是こゝれ今精舍しやうしやに在まりといち佛處ぶつじよに將まさり至いたる如來にがは即すなはち身みを變へんして乾闥婆けんたつば王わうとなり天てんの樂神がくしんの眷屬けんじやくに般遮尸棄はんしやしきと云いふ者もの七千しちせんを隨まがへ各々ごうごうに瑠璃るりの琴こんを手てことに持もて左ひだり右みぎにあり大王だいわう即すなはち善愛ぜんあい乾闥婆けんたつば王わうに告つげて曰いはく早はやく琴こんを彈たんして樂がくを作つくと善愛ぜんあいこれを鼓くするに七種しちしゆの音聲おんせいあり音聲おんせいに亦また二十一じゅういちの解義げぎあり哀婉あいわんにして節ふしに合あひ聽きく人昏迷じんこんめい放逸はういつにして醉よめるが如ごとく時ときに如來にがは復またた般遮尸棄はんしやしきの瑠璃るりの琴こんを取とりて一曲いっくを彈たんし玉たまふに數千萬種すうせんまんしゆしゆの音聲おんせいを出だし其そのの聲こゝろ雅亮みやうりやう清徹しやうてつにして一會いっかいの大衆だいしゆ歡娛くわんご愛樂あいらくして身心しんしん適和たひわあること云いふはかりなし善愛ぜんあい

王聞わうきんて未な曾有なりとい歎なげす自みづから彈たんする琴こんの音おんの鄙ちやうことを忽すなに憍慢けうまんの心こゝろ忽すなちに止とて師しとせんことを請こて琴こんの法ほふを諡爾しにの時とき如來にがは本形ほんけいに復またり玉たまふ大衆だいしゆ嘿然えいぜんとして身みの毛髮もうはつ善愛ぜんあい乾闥婆けんたつば王わうの心こゝろ已すでに調伏てうふくして道果だうくわを得えたり百緣經の說

○善性ぜんしやう太子たいしは佛菩薩ぶつぼさつたりし時ときの子こなり後のちに出家しゆけして四禪定しじぜんぢやうぢやうを修しゆして忽すなちに增長ちやうぢやう慢まんを發はつして此こゝれ涅槃ねはんの因いんなりとい謂いへり臨終りんしゆうに至いたりて四禪天しじぜんてんの相さうを見る心こゝろ疑ぎて曰いはく我われ涅槃ねはんの因いんを成なず而しかるに今四禪こんしじぜんの相現さうげん前ぜんす如來にがはの所說しよせつ更またに實じつをしと此こゝ一念いっぺんの誹謗ひぼうを以もつての故ゆゑに還かへて無聞地獄むもんぢやくに墮おつて長時ちやうじに大苦だいくを受うくと大論の說

〔四十一〕  
善性比ぜんしやうひ正しやう返へん三四しやう禪ぜん

三國大因緣集卷之八終

三國合類 大因緣集卷之九 五道門

地獄部

紹明法師 魔終惡相

蜀の大慈寺の紹明法師は學智有り常に自俗を教導して佛法を弘宣す又勸て觀音菩薩の聖像を供養せしむ錢貨衣服を奉上する者の日毎に不絶寶物山の如くに積貯へ年を重ねて自ら放逸無信にして大に奢り信施を費し遣て慙愧の心なし酒肉に飽て彌欲貪あり後に病に臥て苦痛逼迫して曰く大さ鞠の如くある火ありて我か頂より足に至るまで轉ひ焼くこと間なし是れ助けて給ふな熱やと云て水食口に入らず宛轉屈曲衆僧集まり懺悔の法を行ひ物を施し種種佛事をあすに終に免れ弛ぬず號哭して死すと 冥戒經に見

二〇 澹之臨終 鬼

宋の何澹之は東海の人あり佛法を信せず唯だ殘害殺戮を事とす永初年中に病牀に臥す忽ち一鬼あり形ち長大にして頭は牛に似たり手に鐵叉を執て澹之を守る澹之恐怖して太た是を惡む道家の人を倩て攘すれども尙退かず沙門慧義病を聞て是を訪ふ澹之所見の鬼を談ず慧義の曰く此れは是れ午卯阿旁あり汝平生不善業を犯す故に地獄の迎ひ來るあり急き惡心を翻して經法に信を發さば其鬼自ら消滅すべしと汝ゆ然れども澹之は積惡の招く所る重さか故に身心迷惑して遂に本心を改めす少時有りて死すと 無祥記に見へたり

三二 宋陳安居 寔途裁斷 之入

宋の陳安居は襄陽縣の人也其の伯父は巫との神祠祭奠を辭とす子無きを以て安居を猶子として紹しむ而れども安居は本の家父深く佛法を信す是れに効て巫の淫祀を務ず養父大に憤り數責戒れども聽ず養父已に死す是より愈妖巫の業を廢て佛法を奉事す一日安居病に由て死す心下微暖なるを以て殯柩せずして守る七日の後ち蘇甦して家人に語りて曰く初め我れ夢の如くよして使者の來るを見る從者數十人刀杖を持て共に入り我を呼て將て去る從者我を縛せんと云ふ使者の曰く是れ有福の人也縛すべからむと已に行くこと三百里許にして一ツの城に至る樓宇檐を雙べ殿舍楹を輾る法曹の廳局有り庭に至て使者即ち紙筆を授けて死名の文書二十四通を疏せしむ爾の時一人衣冠正く笏を取て出でて曰安居が文書を剝奸に付せよと此の時二人の獄吏出つ一人の曰く是に九尺の大戒を挂べしと一人の曰く此の人の福善有り三尺の械を挂と論諍決せず剝奸良久文書を案視して遂に三尺の械を懸たり頃有て貴人を見る衣冠偉に權威輝り翼從數十人有り安居を見て曰く汝何として來れる是れ汝か養父に非據の訴へ有り但し明察の裁斷なからんや汝又小福有り此故に先つ遊觀せしめんと獄吏に仰て械を釋しめ貴人即ち安居を將て諸地獄を見せしむ獄城并に受苦の相皆な經說に符合す未だ見廻り果さるに使ひ來て安居を喚ふ貴人の曰く汝有る福無罪憂へ怖れざれ唯實を以て答へよと已に廳の場に至る男女の罪人數百一同に進む府君



出て、床に座す官人多く位に由て并ぶ一人衣冠正しくして階を下り囚の前に立て罪簿を讀む第一は臈縣の桐葉村の祭酒諸行と云ふ者の初め妻を娶り夫婦誓て曰く子有りともし無くとも妻を棄還るべからずと而して諸行道家の弟子衆し其の中に美き女の弟子有り是を奸して妾とま其本妻を棄妻常に怨み憤ると府君の曰く諸行夫婦常に誓言して其の大義を破る此の罪一ッ師として弟子の女を奸す是れ父子相ひ姪して道に違ふ此の罪二ッ邪淫非法の罪三ッ宜く刑罰を行ふべしと第二南陽の冠軍縣の祀竈家の婦の辭狀なり此の婦竈を爨て眠るその嬰兒僅かに二歳竈口に匍匐して糞す祭りの器ものを汗す婦驚て神祇に謝し流ひ淨めて清潔をらしむ其舅大に婦を罵て曰く天道神祇も靈性をま此の婦に汗れて罰を行ふふこと能すと日毎に酷責す婦怨に堪へず司命神聞て記録して送ると府君の曰く竈に眠るは過に非ず常にも亦た有るべし小兒の無知の者也又已に神祇に謝して罪を償ふ何を劇く罵誡め而天道神祇を罔して靈性をしと誹る速かに身を録し來れと須臾に面縛して大槓を挂て來る第三は安居なり伯父か訴牒を讀む巫祝の家を紹て家業を廢祭祀を務めずして釋氏に奉事す義に乖道法に違すと府君の曰く伯父か濫訴の非據の至り也巫の業を以て百姓を誑かし生を殺して邪神を祭り淫祀に由て信施を貪何ぞ有徳の猶子を誑て訴を致すや宜く治罰すへき者は伯父なりと而して安居に令して曰く汝ち無罪小福徳有り當り放還すへし克く勝

業を修して得道せよ壽は九十三歳ならんと安居退出貴人父來て曰汝ち力て功徳を修せよ我は是れ宛洲の者の姓名は某と云ふ一生持戒修福して尚を善力微あるを以て天下に生する事を得ず死して此に生れ府君の輔佐となる威徳高貴にして苦痛をなし汝ち必ず佛の禁戒を守り今此の見る所人に語て佛道を勸よと云て三人を添て安居を送らしむ而して家に歸る家人悲號の聲を聞く三人即ち安居を推て屍の上に昇すと覺て蘇る尋て人を遣して冠軍縣に問するに果して祀竈家の舅死す後に婦過に覺知こと有が如し安居か家合て三寶を奉持す九十三歳よして卒すと  
法苑珠林に見ゆ

〔四〕  
宋僧見  
二卷之一

○宋の武當寺の沙門僧規は道行疎にして空しく年を亘る或日病なくして忽に死す二日にして蘇りて曰く那夜五更に門を叩きて五人有りて房に入り我れを推ふせ赤き繩を以て縛り擲て將て去りぬ一ツの山に至るに土の色黒して堅し頗る鐵石に類して上に草木無し其の山を越て一城に至る城の門外に十餘丈の木を立て上に亦た横なる梁の如くなる木を置たり其木の端に土十斛ばかりを入たる匱を懸たり赤衣の人語りて曰く汝在世に何の罪福か有る此の秤を以て稱らんと俄に衣冠の偉き長者來て曰く汝は沙門として何を念佛せざると時に我れ一心に念佛す赤衣秤に上て稱に兩端正平也又一人の衣冠偉したるか來りて籜を考る僧規が名なしと而して大帝の前に至らしむ帝の曰く汝ち沙門として道業を勤さる

ゆへに小鬼の爲めに捕らる汝ち命ち未だ盡す今は放還さん必ず白衣の家に遊ばず道業を修せよ純ら善福を作て功德を營むべし善惡の所作の悉く幽冥の處に通ずるゆへに隠すこと能はずと僧規果して蘇息すそれより一心念佛修道すと  
法苑珠林に見たり

【五】  
宋趙泰見  
事而蘇  
生

○宋の趙泰は字は文和西河と云ふ處の人也學識道德の名有り公府屢辟とも出でず三寶に奉事法て持戒精進也年三十五にして南宋の明帝泰治五年七月十三日の夜半忽ちに心痛して死す心上微暖かあるを以て屍を覆ひ止めて十日を経たり其朝た氣を吹て甦り水を索め粥を食して即ち起て説て云く初め死する時二人有て黃馬に乗て從兵に令して唯批へ將て去と即ち兩の肘を引て東の方數十里に行く一ツの城有り崔嵬と高くして錫鐵の如し西門より入れば官府の舍有り二重の黒門の内に男女五六十人庭上に蹲る或は紐械枷鎖を以て繋さ或は面縛して挽來る庭の檐には鐵叉を持たる單衫の獄吏三十餘人有り堂上には府君大床に坐し官人其の位より由て左右に座す西の庇より官人座して人の國郡及び姓名を勘考す南の黒門より絳衣着たる官人來て階の下より立て次第に罪人の名を呼ぶ人間に在て罪惡を作り功徳を修し善法を行せし事を勘合するは各々品有り府君の曰く汝等常に知ること無さや六部の督録使者を遣して人の所作の善惡を記しむ而して日毎に校合して纖芥も差す人死すれは三惡道の牢獄あり夫れ殺し生淫神を祠る其の罪最とも重し佛に事へ戒を持ち慈心を以て布施

を行する者は天に生すと趙泰を見て曰く彼れは善福の人也地獄の相を見せて後ち取し還すべしと官人を添て東の方より遣はす一ツの地獄を見るに罪人男女六千餘あり灰土の上に蹲る猛火空より下て燒爛す同時は聲を揚て號叫す亦た大鐵樹あり縱廣五十餘步枝の四邊は劔刀の如し罪人その劔に貫れたる者十五人あり官人の云是れ人を罵詈訛言し佞の良善を毀滅せし者也と趙泰か父母及び弟三人此の獄中に在りて啼泣す俄に官人有て勅書を持來り獄卒に語て曰此の三人の家には佛法を奉事去て寺中に幡蓋を懸け燒香誦經する者有り是に由て獄苦を放して罪を宥と三人即ち自然の衣服其の肩挂て天に上生す趙泰大に歡喜す又一城に至る官人の曰是を更變城と名く罪福の多少を勘定して其者を此の獄城に遣して生處を定むと北門より入て見れは縱廣二百餘里に土屋數百有り中央に大なる瓦屋あり内に百餘人の官録の人あり各々善惡の業因に隨て罪人の生身變類を定む曰く多く殺生を好む者は蟬蟬の虫と作へし朝たに生して夕に死す若し人と爲とも短命ならんと偷盜の者は猪羊と作て身肉を屠て負を償しめん淫逸の者は鵠となし鷺となし惡口の者は鳶と爲し人其聲を惡ん債の多き者の牛馬となして償しめ魚鼈となして肉を以て還しめんと北の方の戸より出者皆な其身變して鳥獸魚鱉と成て出去り其外の獄城各々業に由て苦を受く其の相經文に違ず趙泰已てに本の城に還る府君出て、曰く諸地獄皆法の如くして刑罰の律令に



城門の下に於て一リの鬼子を見るに饑太た急なり乃し我に語て曰く我か母城に入て我か爲めに食を求む母と別てより以來五百歳を経たり餓虚困乏して命も終りなんとす尊者城に入て若し我か母を見玉は、吾か辛苦を語り願くは早く歸り來れと告て玉のれと云ふ于レ時我れ始て城に入て彼の鬼母を見て具さま子の語を説く鬼母答て曰く吾れ城に入てより以來五百歳を経たり然とも未だ曾て能く一人の涕唾をも得ず 適少唾を得たり是れを持して城を出て子と共に分ち食せんと欲するに門下に多くの大力の鬼神有て敢て出ること叶はず唯願くは尊者我れを將て城を出し玉へ我れ即ち出て子と共に 食と云ふ即ち鬼に向て生來幾時の程ぞと問ふに鬼答て言く此の城の七反成壞するを見らんと我れ鬼の言を聞て生死受苦の長遠なることを悲歎す是を以て慘然たり時に彼の鳥は乃性過去九十一劫に佛有て出世し玉ふ毘婆尸と號す我れ其の時に長者の子あり乃し出家せんと欲す其の時に出家せは心す羅敷を得ん然るに父母敢て聽ず強て我か爲めに妻を嫂既に妻を得已て復た出家を求む父母我に語て曰く若し一子を生せば乃ち相ひ放べしと後に一男を生す此の兒六歳に至て我れ復た家を出てんと欲す父母兒に教て曰く汝ち父の脚に纏付きて而して言父若し我れを捨て去らば誰れか養育せん先つ兒を殺して然して後に出て玉へと我れ其時に子に於て愛染の心を起し即ち子に語て言く吾れ汝か爲の故に復た出家せせと故にそれより以來九十一劫の間た五道に

【八】  
若達長者  
生鬼趣

流轉して未だ曾て見ことを得ず今道眼を以て彼の鳥を觀見するに乃ま是れ前の子あり其愚癡にして久く生死に處することを愁む是を以て微笑すと是の因縁を以ての故に若し人有て他の出家を障礙せば此の人の罪報は常に惡道に在て極苦を受て解脱すること無らん惡道の罪業畢て若し人中に生せば生盲とあらん是の故に智者若し人有て出家せんと欲するを見ては勸めて成就せしむへし留難をなす事勿と 付法藏經の說法 苑球林に見たり

○昔し如來祇洹に住し玉ふ時舍衛城中に長者あり若達多と名く財寶無量にして奴婢僕從象馬牛羊等稱て計ふべからず或る日祇洹に詣て出家を求む佛即ち善求比丘と言ふに鬚髮自落て袈沙其の身に着く國中の人民その富貴豪族の子にして出家入道せしことを感して衣鉢及び種種所須を供養す是を得已て利養の心を生し慳貪にあて同行の比丘にも施し與へす其後命終りて餓鬼とある而して積み貯へたる衣鉢等を守る諸の比丘この若達多か死せし骸を闇維せんとて房の戸を開くに骸の邊に餓鬼あり身は焦たる柱の如く色黒くして 燼の如し眼の窟て輝き息喘て口より煙を出だし已か衣鉢を守りて其形ち畏べし諸比丘これを如來に白す如來諸比丘を將て彼の房より到り餓鬼に語て曰く咄咄無慚愧にして出家しあから利養に貪着して慳吝にして惠施の心なし此故に今鬼道に墮て苦を受け尙慚愧を生せずして復た還て衣鉢を守るやと即ち爲めに種種說法し玉ふに心意開解して尋て飛行の餓鬼となりて祇洹よ

來り身光輝き瓔珞その身に嬰り華報已てに天に等し佛亦た說法し玉ふに果して天に生ず

〔九〕  
億耳到二  
餓鬼城一  
索水

○佛の言く我れ昔し曾て聞く大商主の子有り名けて億耳と云ふ海に入り寶を採て還るに忽ち伴を失て身心惶惶し尙飢渴に逼られて太だ痛苦す遙に一城の有るを見て水を索て飲と欲して乃ち往く然るに此の城は餓鬼城なり彼の城中に到るに四衢道の頭り衆人の集る處空くして何の所見あし餓渴頻に逼か故に水水と喚ふ諸の餓鬼是の水の聲を聞て皆な來て合掌して言さく願くは慈悲を以て我等に水を與へ玉へと億耳語て曰く我れ渴せるか故に來て水を求むる也と爾の時に餓鬼水を求むるの念都て息ぬ皆な各々長歎して曰く汝ち知らざるべし此は餓鬼の城あり云何此處に去て水を得んやと即ち偈を説て言さく我等處ニ此城二百千萬歲中尙不聞ニ水名ニ况復得ニ飲者一乃至惣て五言二十八句の偈有り先身の時慳貪嫉妬にして今此の處に來り飢渴火焚等の苦痛を受ることを説く

〔十〕  
餓鬼城散  
屍天

○諸の沙門有て諸の禪觀を行す或は塚間に居し或は樹下に住す時に塚間に在て一夜飢鬼の一ツの死屍を打を見る沙門問て曰く何故そ此の死屍を打耶答て曰く此の屍我を困こそ是の如し是を以て打之道人の曰く何を以てか汝か心を打ざる此の死屍を打て當に何の益かあると須臾の頃に於て復た一りの天ありて天の文陀羅華を以て一ツの臭屍に散す沙門問

て曰く何の爲めに此の臭屍に散花するや答て曰く我れ此の屍を以て天上に生ずることを得たり此の屍は即ち是れ我か善友なり故に來て散華の往昔の恩を報すと道人又た曰く何を以か汝か心に散華せずして乃し臭屍に散する夫れ善惡の本との皆な心の所爲なり何を本を捨て末を求やと

畜生部

〔十一〕  
唐李靖宿  
龍宮

○唐の李靖或日山中に獵して日已て暮たり谷陰の家に入て宿を借に主の朱衣の官人と見えて李靖を饗すこと懇あり夜半に及て門を叩くこと急なり一りの婦人出て、李靖又謂て曰く此は龍宮あり天帝今夜命して雨を行しめ玉ふ二人の子は遠く遊て家に無し命を背かは忽ちに罪を蒙へし願くは君此の役を勤て給れと云ふ李靖か曰く方に仰に従はん爾るに行雨の空よりして下る我れ更に空に昇るの術を知らず亦た一陶の間だに數百里を行く是れ如何せんと婦人の曰く驢馬有り是れに駕すれば飛が如くにして早きこと風より疾一小瓶あり僅に一斛の水を盛へし此の輕きこと毛羽の如し瓶の水一滴は下地三尺の水となる慎んで多く擲散すこと莫れと云ふ李靖肯ふて馬に乗瓶を持して空に上る黒白の雲は足下に在り電光閃て雲間に輝き雷音時時鳴て馬は連りに馳たり而して三十餘滴を洒さ下すに夜半の大

〔十三〕  
龍應經  
井墨雨

○昔し異國の山中に學徳高行の僧有り大衆を集めて經を講す一りの斐日毎に來て預り聽く其の質常に非ず僧奇て問ふに叟答て曰く我は實に人間に非ず此の山下の龍也師の講經を來り聞くも苦惱忽ちに息す福幸に非ずや此の恩甚だ重し何を以てか報せんと僧の曰く爾ら我れ汝らに求むる事有り歳旱頻に國民を愁しむ若し是を救んやと叟の曰く旱魃は我が所爲に非ず天帝己てに諸龍を制して雨水の源を斷今僅に一沛を得ば大雨を國中に施さんと僧即ち硯水一滴を與ふ叟是を掌に受て天に昇り去るを忽ちに雲興り雷轟て洪雨降る其水皆墨汁也と 神僧傳に見

〔十三〕  
金翅鳥并  
如意珠

○迦樓羅昔には金翅と云ひ正まは妙翅と云ふ翅に種種の寶色あるか故なり一日に一龍王と五百の小龍とを搏擲して食とす能四天下を繞る命終に臨む時海に至て龍を取れば龍毒を吐て食する事能す因て飢火に所燒翅を聳まて海に入り直に下て風輪際に至るに風の爲に所吹却て上る如し是すること七反して足を停る處あし金剛山の頂に至て命終す生平に龍を食する故に毒氣火を發して自ら燒く難陀龍王寶山を燒ことを恐れて雨を降して火を滅す身肉消散の唯た心のみ有り大さ人脾の如し紺瑠璃色あり輪王得之之珠玉と爲し帝釋得之警中の殊と爲と 演義抄に見たり

〔四〕

木魚之事

〔十五〕  
韋氏子  
之女爲

て背より血を出し苦を受ること無量なり此れ即ち先生に師の教へ 疎なりと恨し對あり或時其師舟に乗て海上を渡りしに大魚是を知て恨みを報せんと欲して既に舟を覆へさんとす師其の魚に問て曰く何んか故に我を害せんとするやと大魚が曰く師先生に於て我に教へ玉ふこと疎なる故に如是苦を受るなり是を以て恨みをなさんと思ふなり師の曰く汝に教へざるには非ず汝教へを承ざる故に此の苦を受るなりと大魚理に屈伏して懇に教誡を承て曰く願くは我が背上の木を抜き取りて法器となして我を救ひ玉へと言ひ畢て魚死しぬ時に背上の木抜けて師の下に至る師彼の木を取て魚の形に作り粥飯の器に用ひて是を擊つ世に木魚と云ふ者はあり 婆娑論に見たり

○唐の韋氏子は幼稚の時より儒教を崇ひ佛氏の教をば胡法にして中國の勸誡に宜からずと云て屢毀誹る二人の女あり姉の相里氏の家に適妹とは胡氏が妻となる相里氏は儒を崇とひ胡氏の佛を敬まふ常に經を習ひ三寶に奉事す外舅の韋氏子疾に臥て二人の女に遺命して曰く我の儒家を崇ふ者也吾死せば釋門に由て葬すへからず又僧を齋を行ひ佛經を讀へからずと女め是に従ふ父死して三年の後姉妹死す此事を姉に告知らせんとして人を遣す其の比る姉亦た疾に臥す此故に姉に語らす姉俄に物の怪の如して起出て坐す而して曰く我が妹は已てに死せり何を我に告ざると云て涙下ること雨の如く嗚咽して止す夫これを給て曰く

安そ此事有らん妹は微しく病と聞く近比半復せり佗の偽を信すべからず悲愁する事な  
 かれと姉又泣て曰く我か妹は已てに死して靈魂此に來りて我に語る今年十月に死せりと而  
 るに我 昨 黄泉に趣き地府の西曹に到る忽ちに高さ廊の内に呵責の苦患を受けて 喚 悲み後  
 悔する聲を聞に正しく我か父の聲也其邊の空を見れば下より焔然揚り 雷の如く雷の如く雷の如く  
 る我是を見るに堪ず行て遇問と欲するに守殿の者の許す問て悲哭せしに父其の聲を聞て叫  
 びて曰く平生儒道を執して佛法を誹謗せし故に此に來りて苦を受く其痛楚は言に宣へから  
 ず萬劫を経とも解脱すべからず日夜更に苦患の止息する時なし若し家財を罄して資福せば  
 萬か一にして或は暫く苦を憩ふこと有らんと泣泣語りて亦苦痛を受け叫び喚ひて猛火熾揚  
 れり又妹は宿世の罪障重しと雖ども夫の家に佛法を奉行し善福を積に由て即ち天宮に上生  
 すべし我は不幸にして此の家に來り君か儒を崇び三寶に信なきを以て我も無道にして父の  
 如く責を受べし而も亦た死せば神先化して鳥とあらん齋を行ひ僧に飯して吊ひ玉へ必ず其  
 所に來らんと夫聞て泣て曰く乾坤洪爐の造化物固に有之雀は大海に入て 蛤とあり蛇は  
 形ちを換て雉となり鳩の變して鷹とあり田鼠は化して鶉とあり腐草朽て螢とあり或は人忽  
 ちに變化して虎と爲り猿とあり魚とあり鯨となり其事と史傳に載て所見聞深く信して  
 疑はず然らハ君必ず形を換來らば鳥の物たる事と相ひ似て知難し何を以てか驗とせんと姉

の曰く尾の底白さは我也夫因果の道理は免るべからせ世の人不善を爲則んば 明 あるは人  
 誅あり冥は鬼誅あり絲毫も差す迷ふ則んば迷に隨て變ず善を爲者は少く惡を爲者の多し  
 是を以て一ツの廁の中に虫多萬を以て計一ツの埽の下たに螻蛄千を以て數ふ昔の名城大邑  
 は曠蕩として人の棲を失ひ万里の平原は見る所草莽に斷時移り事去れば悉く無常に歸す人  
 は唯能く善業を植て未來の生處を求むべし一ひ心を負て異類に落て迷ふ則んば悔とも益な  
 しと云ひ畢て息絶事卒す此の姉ハ婦徳を具して天理を懼れ慎み深く舅姑に孝有りて夫主に  
 順なり下目を慈みて身を謙たり義禮を正しくして信有る者也一家悲み愁て少長共に歎きに  
 沉む其の異類と爲て來るを待つ 尸は 殮して僧を請して飯せしむ其の期は臨みて數十の  
 鳥來る中に一ツの鳥庭の樹の枝に止まり姑の窓を伺ふて悲鳴屈曲すること言いハんと爲が  
 如し是を見る人嗚咽して涙を流す其の尾を驗するに果して二毛白さこと雪の如し 姑 出  
 て曰く實は吾か新婦ならば飛て我手に上れと鳥即ち來て手に上り狎て食する事素より養者の  
 如し而して飛ひ去りて日に來り鳴て食を求む佛事を營み種種追善す數月の後ち鳥も亦た  
 來らずと 續幽情錄に見

○須達多長者祇陀太子の園を買精舎を造立せんとて舍利弗と共に祇園の地に往て自ら二人  
 繩の兩頭を執りて精舎を圍す舍利弗慘然と去て愛への色あり須達多 怪て問ふ舍利弗答て

一切同地  
 受生

〔十七〕  
王會師母  
死爲二  
狗ト

曰く汝今此の地中の蟻子を見るや汝過去の毗婆尸佛の時に亦た如來の爲に此地に精舎を立たるに此蟻子その時に此地に在りて生ず乃至七佛以來皆汝佛の爲に此地に精舎を立つ此蟻子亦中に在りて生ず今に至りて九十一劫常に唯たこの一種の身を受けて解脱することを得ず生死長遠なること如是出離の種子をば植ざるべからずと説く須達多この事を聞て悲心憐愍して甚だ痛み傷む賢愚因縁 經の說されば繫念無量劫といへり一念の悪性は無量劫を経て朽す況んや一人一日夜に八億四千の念慮を生ず生ずる所更に善心なし彼の蟻子一種の身なを九十一劫を経て解脱せず所有生々生々年を積劫を累て同身を受るか故に無量劫にも生死を免べからず今苦し勤修せずんば出離執の時か有之哉

○唐の京師の西市の北店に王會師と云者有り其母先に終る服制已に畢りて顯慶二年の春其家に乃し一ツの青黃の母狗を産す會師か妻其狗の盜食ことを惡て杖を以て撃こと數下なり狗遂に人語を作て曰く我は是れ汝か 姑也新歸として我を撃ことは何ぞや我れ人爲日家人等に辛く當し故に死して狗と作り今日に羞を見と云て家を走り出つ會師是を聞て涕泣して抱て家に歸るに復た出て去る凡そ四五回に至る店の北の街の大牆の後に小舎を作て狗を置いて食を送る市人及び行客見る者多し餅を投して與者勝て計ふへからす此の狗齋時過れば食せず二歳を経て往方知す失たり 冥報拾遺録に見

〔十八〕  
夫死成  
婦鼻中之  
虫一

○昔し清信士あり平常持戒精進す報命已てに窮り重病を受けて甚だ苦しむ其婦大に悲しみ歎きて曰く君今死して何方にか往我亦君に後れなば誰をか怙まん唯た冀は同じ道にと云ふ夫これを聞に愛戀の心轉増盛にして魂神即ち蛻て婦の處に到り既に死して婦の鼻中に止り化して一ツの虫となり痛痒更に苦を受く婦甚だ苦みて啼哭して晝夜を分たす道人のり婦の家より到りて見るに虫あり婦の鼻より出つ婦即ち足を以て踏蹴す道人告て曰く踏却して殺すこと莫れ是れ汝か夫あり臨終一念の愛戀を以て化してこの虫となれりと婦の曰く我か夫平常更に精進持戒して經を誦す何に依てか虫とあらんやと道人の曰く過て愛を起し今この虫とあると即ち虫に向て三寶の名字を授く虫即ち心意開解して死して天に生ずと 經律異相の說

人道部 婦女

○維摩方丈の室内に一りの天女有りて大乘の法を説く舍利弗の曰く汝何を以てか女身を轉して男子と成らざるやと天女の曰我れ十二年より來た女人の相を求るに了よ不可得なり方に何んの轉する所か有らん譬へば幻術をなす師有りて自ら幻化して女となるが如し人有りて是れに問て曰く何を以てか女身を轉せざるやと是人これを正しき問詰とせんや舍利弗の曰く幻化には實とに定れる相あり方に何んぞ轉する所を求めんやと天女の曰く一切の諸法

〔十九〕  
舍利弗與  
二天女  
之相一



も亦如し是の定相あることなし即ち天女の神通力を以て舍利弗を變して天女の如くならしめ天女は亦た化して舍利弗の如くにあり而て問て曰く汝何を以てか女身を轉せざる舎利弗は天女の形乍にして答て曰く我れ今何んの轉する所を知らずと天女の曰く汝若し能く此の女身を轉せば一切の女人も亦た方に能く轉すべし汝若し實に女に非ずして而して女身を現せば一切の女人も亦如し是女身を現すと雖も女に非ず是の故に如來說さ玉はく一切の諸法の男に非ず女に非ずと此に於て天女即ち神力を攝て本形に復ぬれば舍利弗の女人の形相なりしも復た故の如しと雜摩經の常住佛性を見る者を大丈夫の相とす假令男子と雖も佛性を知らざる則さの名けて女人とす若し女人有りて自身に定めて佛性有りて知る則きは是を男子とすと云へり涅槃經又云大信心を名て爲三佛性と云へり同經持名の一心はこれ大信大行の故に此一心を決定する者を大丈夫と名く縱令女身と雖も男子とす必ず男女の相を執して差別を立つべからず當來には都て男子大丈夫の相好を具足すべし願力の善巧なること仰て信すべし

○昔し中宗の臣下に裴談と云ふ人あり佛法を信す其妻嫉妬深さか故に談是を畏る嘗て曰く女人よは三ツの畏れ有り少時の生の菩薩の如し誰の人か生の菩薩を畏れざることを有らんや多くの孩兒を膝の前に並べ愛育するを見れば九子龍母の如し何ん人か惡龍を畏れざる事の

裴談畏し

○二十  
聰明化爲  
木鳥并梓

らんや五六十歳に至て薄く粉黛の粧を爲ば或は青く或は黒し是れを見れば鳩盤茶の如し孰の人か鬼神を畏ること有らんやと事文類聚に見たり

○昔し韓朋と云ふ人有り其妻美色あり康王聞之奪取て妃とす朋深く怨みければ王怒てこれを囚にす朋忍に堪す已に自殺す王妻を勾引して高臺に登る妻自ら臺下に投して死す書を遺て曰く願くは尸を吾が家に還て夫の死骸と合て一所に葬しめよと王益怒て是を埋しむ夫妻の兩塚相ひ向へり後二塚の上に兩本の梓木を生す根は下に交て枝又上に連る鴛鴦の如くなる雌雄の鳥常に其樹に棲て朝暮悲鳴す世人の謂く此の禽は即ち韓朋夫婦の精魂の化する所ありと搜神記に見たり

○魏王龍陽君と共に船を汎て遊宴をなし釣を垂て歡樂し玉ふ陽君乃し十餘の魚を得て而してこれを棄て啼哭す王怪て問ふ答て言さく臣始て一魚を釣上るときは甚だ喜ぶ後に益多く成り次第又大なるを得ては前に得たるを棄と欲す今臣君に仕て寵恩を蒙て枕席を拂の身となり已に人君の位に登る然れども四海の内に美人甚だ多し臣か幸を得たる事を聞かば畢く裳を褰て趨來り媚を盡して君に見ん其時に至てハ臣も亦得る所の魚の如く棄られん今是れを念ふゆへに泣下ると王聞て深く憐て曰く美人の有ることを語る者あらば一族を滅せんと事文類聚に見へたり

二百三十三  
貴妃

○昔し楊貴妃は唐の玄宗の寵妃なり弘農の楊玄琰が女として生て深閨の内に養はれて人未  
 た知らず玄宗これを宮中に召れしより六宮の粉黛の色無か如く三千の寵愛は一身に在り嬋  
 娟たる兩鬢宛轉たる雙娥太掖の芙蓉未央の柳眉は柳に似て面は芙蓉の如し玄宗是に惑て晝  
 は終日に遊宴を催し夜の終霄席を専らにして尙未だ足らず驪山の華清宮に幸して貴妃を慰  
 め霓裳羽衣の曲を舞せて宴樂し玉ふ處に思ひも寄らず安録山が反逆起りて漁陽の鼙鼓は地  
 を動して大軍を以て責來る差も面白かりし羽衣の曲も興醒て取る物もとり敢ず蜀山の方に  
 落玉ひしに此の亂の本とは楊貴妃なり是を賜りて殺害し我等の命を助け玉へと諸將一同に  
 申けるを玄宗は先づ朕を殺して後に貴妃を害せよと歎き玉ふ貴妃は玄宗の御衣の袂の下た  
 に顔を指藏まて泣しはれて御座けるを大將軍高力士御車に参りて情なくも挽下し馬嵬の樹  
 の下にして縊り死しけり玄宗は蜀に落玉ひ程なく祿山が一族亡て二だひ長安の京師に還御  
 あり路の次で馬嵬を見玉ふに草のみ茫々として風は蕭索たり哀れにも悲しく御衣の袂を採  
 り玉へとも貴妃の面影のみ残りて其人は見ぬす泣々齊都に還り入り給ひて朝元閣を見玉へ  
 ば簾落て軒傾き西風急に吹て雨聲とあり最々御涙の種を植ゆ壁に背る燈ひの影衾に遺る移  
 り香に昔を返す夢も結ばず瓦に置く冷ある霜の夜も眠を忘れて明し兼ね玉ふ處に方士参  
 りて貴妃の魂の有家を見て歌を止め奉らんとて十洲三島の間を尋ねしに蓬萊宮の太真院よ

到りて尋ね得たり天寶十二年七月七日星合の夜玄宗と貴妃と長生殿にして牽牛織女の契を  
 羨み玄宗即ち楊貴妃の肩に靠かゝりて願くは天よ在ては比翼の鳥となり地に在らば連理の  
 枝となりて生生別れ離るべからずと私語せし事を左右に侍従もなく帝と我とのみ是を語り  
 て亦た知れる人なし是こそ我れに遇たりし徴なれとて黄金の鈿を半折て信に送り遣せり  
 玄宗是を得て彼の私語を聞玉ふに愈思ひに沈み玉ふ樂み盡て悲み來る世の習ひ哀ある事  
 ならずや  
 楊貴外傳并に長恨歌に見ゆ

二百四十四  
王昭君

○昔し王昭君は漢の元帝の時召れて後宮に册かれ花やかなりし處に匈奴狄中國とは古しへ  
 より以來相ひ怨みて通せず爾を此度び和睦の事有り是に由て狄の首魁望て云く帝の後宮然  
 るへき美人を賜り妻とせんと白す元帝即ち畫師毛延壽と云ふ者に仰せて後宮の美女三千人  
 を繪に寫して其中に顔容の劣る者を使はさんと有り婦人の輩ら胡國に往事を倦く思ひ畫師  
 に賂して形を麗く書しに王昭君は常に鏡に向ひて面を見るに諸美人に勝れて我ながら  
 む好しく覺ぬしかば去りとも我か形ちを惡は餘も寫さじと思ひ賂を與へざりければ畫師  
 是を憎て殊更に惡く書さければ元帝即ち王昭君を胡國に遣さる玉昭君は魁けさ狄の手に渡  
 りて胡國に趣き泣泣馬に搔乗られ琵琶を弾て曲を歌ふ馬背東風去路除幾多幽意寄琵琶と  
 往共行共未遠く漸く胡地に入りて愁に沈む涙の色は血に替て悲み夜唯た寝がてに明し佗て

秋來只爲一人一長かこちけり後に王昭君は三千の美人にも勝たる事を知し召て後悔し玉へ  
必も甲斐なく毛延壽を三族の刑に行かへられたり王昭君は強ちに故郷を戀て程なく死す是を  
埋しは胡國の草の色は皆を白し昭君が冢の上へに生たる草のみ獨り青し時の人哀しかりて  
青冢と名つけしと  
漢書成帝紀并白氏文集に見

昔時楚王より魏國の王へ美人を送り元より楚王に鄭褒夫人と云ふあり鄭褒をもへらく此  
の美人の來り去上へ今よりしては我が寵衰へん然れば此の美人を失んと思ひ先つ一ツの行  
をめぐらして魏國より來る美人を愛する事楚王よりも尙まされり時に楚王に我に於て妬を  
と思へりさて鄭褒魏國の美人に謂て云く君汝が鼻をさらひ玉へり王に見ぬは必ず鼻を掩か  
くせよと美人即ち王にまみゆる毎に鼻を掩ふ楚王鄭褒夫人に謂て曰く魏の美人我を見れば  
必ぞ鼻をかくす事は何事ぞやと鄭夫人答て曰く王の息臭き事を惡が故なりと王大にいかり  
て美人の鼻を削玉へりと  
劉向說苑に見たり

昔し佛在世の時舍衛城中に長者あり黎耆彌と名く七子あり第七子を産せし母を毘舍離と  
名つく賢明多智あり波斯匿王是を拜して妃とす已てに孕て三十二の卵を生ぞ卵毎に各一男  
兒を出たす長大して端正勇健なり後に姦臣の讒に由て王即ち悉く頭を刎て殺せり母は佛の  
教導に由て須陀洹果を得たり如來その過去の本縁を説給ふの説  
賢心經 ○昔し般遮羅王の妃五百

楚王鄭夫  
三十五  
計

人御之四

の卵を産す甚だ耻て函に盛て殪伽河に流す隣國の王河に逍遙して函を得て城に歸る日を経  
て後ち卵より各々一兒を出生す長大して驍勇あり向ふ所歎する者なし彼の隣國の王と般遮  
羅王と年久しき怨讐なり是の勇力の兒に軍兵を添て遣去征伐せんと欲す已てに城を圍に城  
中の兵の防く事能はず城已てに破れんとす般遮羅王極大恐怖す王の妃の曰く此五百の勇士  
は皆是我か子也彼等今母を見ての惡心定めて息なんど即ち自ら城に登りて五百の巾に告て  
曰く汝等のはれ我か所生の子なり何を父母に向て弓を挽箭を飛して此の城を破らんと欲す  
るや如是、逆罪を造る者の豈人道とせんや天神必ず罰すへし若是れ信せずの各々口を張て  
待べしと云ふて妃即ち兩乳を按に五百道の乳出て飛泉の如く各々五百子の口に注く此時五  
百子信伏して兩國和睦し好を厚く交りを昵くすと  
釋迦沙 ○濕生とは昔し布殺陀王の頂さ  
に二ツの疣を生す數日を経て疣破れて一兒を出生す已てに長大にして顔貌端正あり名て  
曼駄多と云ふ舊には頂生と翻す後に金輪王となる威德廣大あり此の頂生王の髀の上に  
亦二ツの疣を生す破れて二子を生す一りを遮盧と云ひ一りを烏婆遮盧と名くとの説  
涅槃經 ○  
菴羅衛女 菴羅樹の濕氣の中より生す樹に由て名とす翻して奈女と号す即ち頻婆娑羅王に  
密會して耆域を産り  
耆域經涅槃經の説 ○化生との謂劫初の人の如しと云云

仙境部

〔二十七〕  
法道仙人  
之傳

◎法道仙人は天竺の人なり初め靈鷲山の中に仙苑有り五百持明咒の仙有て金剛摩尼の法を修す皆能く道を得て十方刹に遊行し神通に乗して須臾に本處に還る壽命無量歳にして常より人天を度す法道は其の中の隨一なり或時紫雲に乗して空に翔り震旦を過百濟を経て日本に來り播州印南郡法華山に下る其山は八朶の峯あり此の故に名とす爾時五色の光明潒より出づ法道即ち靈場なることを知て止りて常に法華を誦す亦密觀を修するを業とす所持の道具の千手觀音の銅像と佛舍利と寶鉢と其外は一物もあらず多門天王頭天王來て守衛を加ふ千手寶鉢の法を修し得たり天龍鬼神來りて奉仕す常に寶鉢を空に投れば即ち飛て國郡の家に到り供物を受て山に還る州民是に由て空鉢仙人と名けて尊重結縁す生石大明神常供養を作り鉢を置し大石の地は空鉢塚と號して有之大化元年秋八月に藤井の某と云ふ者官米を載て罷を走て過に法道即ち鉢を飛せて供養を乞に與へずして曰く是は天子御厨の精練なれば私に争か供せんと鉢即ち飛て還るに船更に行かず船中の米俵飛連て山中に入る尙鷹行の如し藤井大に驚て菴に來て悔謝す法道笑て許諾するに米石飛て船中に歸る其米千斛積こと如二元の唯た一俵のみ南の河上は落つ今米田村と號す孝德帝聞て感歎玉ふ五年五月に帝不豫なり診治更に功なし阿部倉内磨を勅使として召す法道即ち勅に應し宮中に來て持念するに玉體平復し玉ふ留ること七日にして佛法の奥旨を演説す君臣歡喜して無遮の大會を設

〔二十八〕  
水  
關縣甘谷

く此の年山中に大殿を造て千手の像并佛舍利を安し天子幸し玉ふ天下神道を重くして佛法を輕くせし是より佛法を崇尊して諸州悉く傾き信す是れ法道の威德なり數十年の後に大光明を放ち雲に昇入して靈鷲山に元亨釋書還ると此等の仙人佛乘に皈して弘法利俗する者在世滅後其數多し

◎南陽の鄧縣に谷水あり至て甘美なり故に甘谷と名く山上に大壩聚有り其露落て流れ下る故に水は滋味有り谷中の人家此の水を飲て壽し上壽の百二三十其中は百餘歳七八十を則ち夭とす風俗通に出たり

〔二十九〕  
左慈幻術

◎昔し左慈と云ふ人の字は元放と号す廬江と云ふ處の人也少ふして五經は通達し亦兼て星宿の行度を見て天下の吉凶を知る漢の寶祚將に盡んとす乃し歎して曰く我れ此の運の衰るを見るに官位の高き者は危く才智の勝たる者は死す當代の榮華の食るに足らずと云て儒學を捨て道術を學して六甲を明め鬼神を使ひ天柱山の中に籠り石室の九丹金液經を得て是より變化自在の妙術を布し奇特無方の名譽あり魏曹操是を聞て召寄て一室の中に閉籠て食を止めて僅に一日水二升を與ふ一年にして開出たすに顔色更に衰へず氣力既に故の如し曹操大いに奇異の思ひをなし道術を學せん事を望む左慈か曰く道を學せんと思ひ玉の方は清淨無爲を行へし食の山海陸地の魚鳥虫獸の肉を食ひ酒に醜面し色に染惑し人を殺し

欲を逞たくまふす是の心を以て我が道術を學せん事は甚た難しと云ふ曹操大に怒りて左慈を殺さんどす先づ酒を設たふて飲しむ左慈即ち飲畢て杯を空に擲たり杯車輪の如く廻めぐりて棟の間に懸かり鳥の飛か如くして下たに落として落す坐中の人皆な目を澄すまして是を見る間に左慈は行き方なく失たり初め曹操賓客を會めて客に向ひて日の山海の珍羞皆な具そなへ唯その無き所は吳江の鱸魚のみありと左慈か曰く某し居ながら鱸魚を得て賓客を悦しめ陛下を快然たらしめんと即ち銅盤を求め水を貯へ盛て釣竿を投するに須臾して鱸魚を引出す曹操曰く一魚にしては座中も普からずと左慈又た餌を易釣を改めて沉て又魚一喉を引出す其魚の大さ皆三尺餘なり曹操是を鮪なまに作る亦是れ蜀の薑有らば何をか足すとせんと左慈曰く尙是れ得易と曹操疑ふて思はく是れ近き處の薑を取り來て我を欺くやと因語りて曰く我れ前に人を蜀中に遣して錦を買しむ汝に傳言す今二端を増して買ひ來れと云ふべしと左慈其の間に薑を得て還る後に錦を買しむる使つかひ歸りて君の使を聞て二端を増して買て返と果して符契ふけいの如と神仙傳の意

○漢の明帝の永平年中に 縣と云處に劉晨阮肇とて二人あり相友あふて天台山に入り藥を採て還ると道に迷ひ糧盡て飢に臨み山頭を見れば桃ありて熟す是を食ひて俄留り身健かに覺ゆ谷水を掬で飲に心潔さやにあり水に隨ふて蔓菁まんせいのあをなの葉山の方より流れ次に一

劉阮到天台仙室

ツの杯さいに胡麻の飯はんの屑すくづ有て流れ來る此の水みづ上遠からず人里ありと覺ゆ行きて宿からんと云ふて水みづに添そて行くこと一里ばかりにして又一ツの峯みねを越るに大なる溪あり二人の女出て來る其顔容かほち美麗みれいなること此世の人とも思ひれず即ち劉晨阮肇か名を呼かけ手を舉て招て云く君等きみ晚おそく來きませり待まちこと久しき哉と云ふて家に 倡うた還る奇麗きれいに作りあせる館たむけの粧まひ薨いか、やき梁はりり絲いとて玉たまの發しらみ暖あたたかに鞦韆たからの垣かき正しく庭にはには見なれぬ名も知らざる草花咲亂れ梢こずえに來鳴鳥の色音いろねも最珍いとめづかに階き級きを昇のぼりて堂のらに入れば錦の凡帳玉すたれの簾七寶はらうの瓔珞えいらく追風おひかぜに薰かほる空燒そらたきの芳はなひ實まことに人間世の外へつか別べつに乾坤けんこん有て棧すまあせる國歎かとぞ覺ゆる金銀きんぎんを彫おりめ珠玉しゆぎよくを飾かざる床ゆかあり二人の女劉阮りうけんと共に同おなく向むかひ座ます男子おとこは一人もあくて侍從しじゆう數十人みあ青衣せいぎを着きして面容めんよう端正てんせいなり手てごとに持もちて出でるを見れば胡麻飯こましはん山羊やんやうの膾はらの脯ほ胎たり熊くまの掌てのひらろその外そとか山海の珍珠しんじゆその數かずを盡つくし七寶しちほうの鉢はちに盛もりて前に備そなへ酒さけを設たけて勸すすむ何れも味あじひ美みよして天の甘露かんろの如し數千の客有りて入り來る皆その齡よ未また二十ばかりにして其麗うつくきこと傍あたりながら耀かがけり三五の桃ももを瓊じゆ璃りの盆ぼんに載のせ出でだし女婿むすめを慶けいすと云ふて手毎てごとに樂器がくきを取りて管絃くわんせんを奏そうす天に響ひび地に盈みちて心こゝろも自ら迷まい雲くもの晴はれ行ゆく樂たのしみのみ春はるの色いろに染そめたる計はかりりなり日ひ已やて暮くれければ客きやくのみな還かへり去いて燈あかりを秉もつに和なり劉晨阮肇りうけん臥ふければ二人の仙女せんじゆも共に臥ふして夫おとこれより婦夫めづとなり已やてに十五日じふご日まで留とどまりて今は故郷こきやうに立歸たり亦また來

りて契を結ばんと云ふ女の云く君等此に来ることも皆是れ宿世の縁ありて福徳の幸に招か  
 れたる所以なり卑俗の思出何事か是れに勝らん今は是迄也強ちに故郷を戀て還らんと思ふ  
 は罪障未だ滅盡せざるが故なりとて諸の仙女を喚て管絃歌舞して酒を勸め名遣を惜み別れ  
 を取りて山の東の洞口に送り出す劉阮二人道を求めて故郷に還りしに村里の有りさま見し  
 にも非ぞ替り果て亦識人なし里人恠て驗に七代の子孫なりとて白髪の翁出て傳へ聞く  
 前祖ある時山に入りて還らすと云ふ一族親類も絶て跡なし此の上は棲すべき縁もなし然ら  
 は仙女の家より還り住はやとて亦山路を尋るに道の洞口も見えず二人愁の涙に沈みしが大康  
 八年の比に二人なから行方なく失にき（續齊諧記）されの如し一旦にして樂み盡さ故郷に歸  
 りて愁へ歎かば前の快樂の中中歎きの種ならずや

○昔し後漢の費長房は市令となりて汝南の市を治む一りの老翁有りて一壺を肆に置いて藥  
 を賣る市已てに罷の壺中に入る人更に見ず惟費長房は高樓の上に在りて是を見て異み酒脯  
 を持して翁に遇ふ即ち共に壺中に入る玉堂甚た奇麗なり翁の曰く我は是れ壺公仙と号すと  
 云ふて酒を飲む已てに酩にして而て恐に道を求む翁即ち費長房を深山に連行さ猛虎  
 の中に置く射噴哮吼すれども獨り座して恐す復た朽たる索を以て万斤の石を繫さ費長房を  
 仰臥て心の上に懸け鼠蛇その索を咬に又恐れす翁即ち費長房か背を撫て曰く善哉子に教ゆ

（三十一）  
費長房學  
仙術

（三十二）  
桓景通  
家災

べしと復た糞を食しむ糞の中に三ツの蟲あり臭きこと噓へなく穢きこと比なし費長房甚た  
 是を惡む翁の曰汝道を得ること此に限りて恨らくは成じと云て歸す而れども行法の功有り  
 て百鬼を驅て社公を使ふ道術ありと（車文類聚に出）

○昔し費長房の能く天文の學に長じ易道に熟す桓景と云ふ弟子に謂て曰九月九日に汝か  
 家に災厄有るへし急に家を出て去り家人各々絳き絹の囊に茱萸を盛て頸に掛山に登りて菊  
 花の酒を飲て一夜を越て此の禍厄を免るべしと桓景その教の如くして夜明けて家に還りて  
 見るに其家に飼たる牛馬雞狗は悉く死せりと（東觀漢記に出）

三國大因緣集卷之九終

三國大因緣集卷之十

五道門

人道部之餘

附 無常

釋迦太子  
殺之緣

○昔し佛在世の時祇陀太子異腹の弟を瑠璃太子と名く釋種の豪族その瑠璃太子の鼻腹より生ぜし事を貶侮りしかは太子甚だ辱恨て忽に反逆を起し祇陀を殺して位を奪ひ釋種を斷滅する事草を薙か如く重なり死して尸亂れたり目連尊者これを憫て佛より白して曰く我れ四の方便を以て舍夷國の釋種を救ふて此の殺害を免しめんと欲す一は舍夷城を擧て虚空の中に着二は海中に藏さん三は鐵圍山の間籠四は佗方界より移さん當に瑠璃太子をして其處を知らざらしむべしと佛の言く衆生の避るべからざる事七種有り謂く生老病死罪福因緣是なり業力の感報する所卿の大神力を以ても救ふこと能はじと目連已ことを得ず私に舍夷城の釋種五千人を取り鉢中に盛て空中星辰の際たに擧て藏す軍散して三億の人死亡せり瑠璃王の兵を引て歸る目連即ち鉢を下して見るに一人も殘らず死盡せり是れ昔し大魚あり五百の漁人殺して食ふ瑠璃王は昔の大魚なり漁人は今五百の釋種あり業力熟して共々人間に來り害因薰習して活こと能はずと觀 譬喻經の ○又如來言はく瑠璃王今不孝不忠諸罪深重な

蓮華女得  
蓮華

り七日の後地獄の火に燒さ殺され未來永劫阿鼻を出でじと瑠璃大に怖て大船にとり乗て大海に浮びて火を免んとす七日の日に自然の火あり水の中より燃出て船を焚没王毒熱狂亂し遂に燒死して沈む 法句經無常品に見たり

○昔し如來の在世に羅闍祇城の中に姪女あり名て蓮華女といふ容貌端正にして國中に雙びなし麗き眸は明珠を耀し絳唇は白玉を含み眉は楊柳の葉を欺き顔は芙蓉の花を妬む言功よして鸚鵡の舌を學び情深して鴛鴦の媚を移す艶色優にやさしかりければ大臣長者みな心を傾け目を眩かし愛惑り而れども蓮華女は宿習の善業にや情思のことあり我適人身を受たれども五障の女人と生れこと更嬌女の身となり唯明暮は鏡鏡に伺ひて容をつくろひ金釧をさして色を衒ひ粧ひ成りては人に媚つ、客に詣ひ新あるを迎ては舊たるを送り眉を揚ては笑を作り情を彰しては佗の心を蕩かし實少き有様我ながら耻かし唯願くハ尼になり世を厭て志を遂げやと思ひ立ちて耆闍崛山におもむさたり中途よして清水の有りければ擲て飲として水に移りし我か面を見るに髪は炯にして紺青の如く容はうるはしく雲間の月僅に出るに異らず丹果の唇 珂雪の齒まことに比なく麗しき粧あり可憐身を只今棄て尼にならんは最惜事なり唯世に願て時めき我情に任せて樂ばやと悔思ひてそれより家に立ち還る如來ハ三明圓にして蓮華女が化導すに時至れりと見そなへし玉

ひ即ち女人の質に變して路に尋て來り向ふその粧はあはた麗しく蓮花女にの香勝れたり翠の眉は宛轉として柳の髪は綽約たり肌は白き脂の如く腰は束たる糸に似たり唇は頻婆果に喩べく齒は珂雪より比ぶべし蓮華女是を見て心に愛を生ず世はかゝる美人も有りけり我か容は是に此れば色あきこと灰の如し緩歩み靜に來るよそをひこの世の人とも覺へずと立よりて問ければ君の何の人ぞ何なる方へおのすれば懸姿にて侍従召連玉はず性くこそといふ化女答て曰く我の城中より出て今歸らんとするに侍従わが蹤を見失へり歩みなれざる路の邊裾は露に濡たりいさごの清水のもとに休らひ疲をも息て語んとて蓮華女と二人水の側に坐して互に來かた行末の事を語るその間に化女すでに蓮華女が膝を枕として睡りけるが須臾の中に俄にむなしく成たり蓮華女大に驚こはそも何なる事ぞと周章ふたひさ水を掬て口に入んとするに忽にさしも麗かりける質も變して色青く瘰癧み腫脹と腫ふくれ爛壞とたいれやふれ腹潰て腸沸出て臭こと限なく蛆めき膿血流髪は抜齒は落ち手足の肢節離れて見るべきやうもあし是はいかなる無常のありさまぞや此美人なを爾なり我もまた幾くか有んと思ひとりてそれより亦佛所に詣て五臓を地と投禮をなして具さよ此事を白て出家を望む如來ささ立て山に皈り本身に還て蓮花女に告玉わく世の人に四ツの專有て恃へからず一は少壯ある者は老に皈し二は強健ある者は必ず死す三は六親娛み會る者は別離

無常

舍衛城

すべし四は財寶を積聚したるは終に分散すべしとて偈を説玉ふ蓮花女この偈を聞て深く無常を觀じ比丘尼となり精進思惟して羅漢を得たり

法句經

昔し一りの梵志あり出て行田頭を過ぐ農夫耕して立ち其兒忽ち蛇に螫れて死す父殊に願み梵志を招て曰某の道に庵有り往て此の事を告げて餉只一人の爲に持來れと報して給と云ふ梵志の曰此死せる者は汝の爲に何そや答曰此れ我が兒也と梵志驚て曰眼前に兒子を殺されて悲傷の色あき何そやと答て曰父子の因縁は各舎の如し曙に至れば出て去る是に何の憂ふる所有らんと梵志彼の家に至りて死せる兒の母に報す母亦た更に悲痛の相なし梵志怪て問ふに答て曰子母の道は巢の中の鷓の如し翼長すれば飛散して別る是に何んの悲か有らんと亦其の姉に問ふ答曰兄弟の渡口の舟に會が如し岸に到れん然り別る是に何の愁か有らんと亦た其姉に問ふ答曰夫婦の契は林に集る宿鳥の如し夜明けの四方は飛揚す是に何の愁有んと亦其の奴に問ふ答曰主僕は猶犢子の母に隨ふか如し一旦別れて亦知ることなしと如是五人共に生死無常の道理を了達す梵志甚だ感歎して祇園に詣て、佛に問ひ奉るに如來亦生死の本空を説諭ふ梵志已ては心意開解して初果を得たりと

五無反復

人生無常にして生死窮極なし是皆空を以て無明を潤はし業因を以て牽引す

如來昔し舍衛國の祇園精舎に在ます時城中に梵志あり一人の女年始めて十四五歳なり面



容端正にして智惠聰明あり辨舌有りて優艶なること國中無雙あり王宮貴族の妻妾とも成ばやと父母甚だ愛憐す一旦忽ちに重病を得て不日にして死亡す梵志この愛に意を失ふひ狂人となり佛所に到る如來を見奉るが故に本心に還り長跪作禮して白して言さく我れ素より子息なし唯一女あり端正にして智辨あり是を愛して愛を忘れ手中の玉珠の如く册しに忽ちに重病を得て我を捨て、前立ちて亡ぬ喚ぶも活らざるとも答へず眼悶身冷て息更に續ず天に詔へ地よ叫ぶも益あし胸悶ね心亂れて悲みに堪ず唯願くは世尊哀を垂て我か愛を釋玉へと聲喚び涙落ちて餘所の袂も温はへり如來即ち梵志に告て曰く世の中に四の事有りて久く保へからず一は常有りと思ふもの皆な必ず無常なり二の富貴必ず久しく榮へず三の會者には必ず離る四の健なるも必ず死すと世尊説く偈言はく常なる者は皆盡く高者は亦墮つ合會有離生者は有死梵志この偈を聞て心即開解して比丘となり深く無常を觀して阿羅漢果を證すと法句經の説

【五】  
秦始皇求  
不死藥

○秦の始皇位に即て廿八年に當りて齊の國の道士は徐福字は市と云ふ者書を上つりて曰く海中に三ツの神山ありその名を蓬萊方丈瀛洲と名づく諸の仙人こゝに住してその中に不老不死の靈藥あり我等いま童男童女五百人を賜り船にのり齋戒して彼の山に至り不死の藥を求め得て君に奉らんと白す始皇即ち童男男女各々五百人を船に乗て徐福を使はさる十一年

【六】  
漢武帝求  
不死藥

を経て遂に仙藥を求め得ず歸り詐て曰く蓬萊の此方溟海の間に大鯨魚あり是は苦しめられて三山に至ること能はず願くは能射ものに仰せて連弩を以て相待ち鯨魚出なば弩を連放にして是を殺し其後ち藥を求め得て獻らんと白す始皇即ち五百の連弩を作り自ら海に赴き候ふに大鯨魚出て、見ゆ遂に是を射殺す大海み血に變す始皇それより平原津と云所に到り鯨龍魚の祟に由て病をうけ大熱惱亂して沙丘の平臺に於て五十歳にして崩し玉ふ崩御の事を天下に隠さん爲に朝夕の時勢更に平常の如くして咸陽に還る日は始皇の尸の臭かりけれハ鮑魚を車に積て始皇の車の後に從がへ尸の氣をまさらかし宮に歸りて驪山に葬り近習の輩一千人を同し墳の中は生あがら築こめたり史記の本されは神仙の妙術を傳へ丹石を服して僅に長生すといふこと有といへり遂にその蹤を見ることあし東岱前後の煙りたちさる日なく北芒新舊の露乾時なし南隣北里都て免ざるものは死の一事なり

○昔し漢の武帝位につき玉ひてより五年に當りて道士五利文成等を使して蓬萊山に往て不老不死の藥を求め又栢梁臺を建てその上に承露盤を作りて天より降る露を取り練て飴とあま丹藥に合せてこれを服し又西王母を請して仙術を學れ玉ひたれども終に七十二歳にして五祚宮に崩し給ふ長安の西北八十里に行きて茂陵と云所に葬りたり漢武故若説神仙求便得茂陵何事在二人間と作りしは羅鄴が詩ありされは楞嚴十種の神仙三洞五科道士唯其

名のみ聞傳へて其身は去て跡あり

○白河院の御時にや權中納言保定卿は寵臣也病の絶入り院より増譽隆命の二僧を遣して加持せしめらるる二僧居二戸之前後法華經を讀む保定卿忽ちに蘇へる保定後に道心門に入て止觀を讀けるに冥々として獨遊誰訪是非と云ふ文を見て涙を流して曰我冥途に行ける時

此の事違ざりき聖教には虚言なしとて彌々道心堅固ありきと 古事談に見

○昔雍門周と云ふ者は當時無雙の琴の上手なり孟嘗君に見ゆれば先生は聞ゆる琴の名手あり琴の音を以て人の心を感じせむと云ふ今も是を以て我か心を悲しみ愁しめんと雍門周こたへて云く今君はこれ既に千乘の主あり我か琴の音を以て争か君を悲しめんと去なから君千秋万歳の後時移り事改まり世かはり子孫遠くなりて君を埋み墳は年舊高臺の傾き碑の文字ことごとく消荆茂り草深く松栢も禿にあり祭人もなく墳の上へ平らかに稚童豎子の子の族ら樵り草刈その上に眺めそびて是の昔時孟嘗君の墳の跡ありその比の天下四君の人たり財寶庫に滿て三千の客常に會して大厦高堂に金玉を鏤め海陸八珍の食を設け衣は錦綉を重て舞樂宴遊に日を送り世の人羨み隨がひしをさしも尊貴の孟嘗君も一旦死して時世替れ此の如くも成りゆく也と云はんは誰か常なること有へきといふに孟嘗君これを聞くに不覺にして涙を流せり 劉向說苑 加、る無常の悲みは淨土にあらすして免れ難くこの

〔七〕 蘇保定卿

〔八〕 雍門周 孟嘗君

〔九〕 綠落花 悟道

〔十〕 老公道 宅不 知死

泡沫の質は生死を出ずしては改むべからず

○昔し國王有り園の中に遊戯す朝に花木の盛りに開を見て甚た愛せらる食し訖て臥玉ふ其間に夫人采女皆共に花を採に枝を折花を散して林中悉く荒敗狼藉也王乃し睡り覺て是を見て一切の法は皆悉く無常也と思惟して辟支佛を悟れりと 大論に見也

○昔し如來舍衛國の祇洹精舎に在ます時城中に一りの婆羅門有て年已てに八旬に向たり髪白く肉消て色衰へ膚悴たり財寶無數にして庫中に盈米穀方斛にして圓内に腐天性頑鈍にして而も慳吝あり道徳を識す無常を計す時に地を點して好廣の屋舎を作る前房後堂山臺室東西の廂南北の簷數十間の廊を作續て金玉を鏤め彩畫を文ます唯後堂の前庭未だ造畢せず婆羅門有て入り來り地を祭り事を勤て長生堅固の詞を祝す如來即ち道眼を以て觀見し玉ふに此老公久しからずして命盡べし自ら知すして恫々として營む精神更に修福の功德なし死し去ては直ちに惡趣に投溺して長時苦痛を受へし甚だ憐愍すへし是によつて佛即ち阿難と共に精舎を出て其門に到り老公を慰問して汝今此の舎を造る何の安穩なる所ぞと云ふ老公白して曰く前房の客を待ち後堂は自ら處す東西の廂は兒息を棲しめ南北の櫺には僕婢を居しむべし夏は涼臺に上りて暑を避し冬は煖室に入て寒を防がん四方の庫藏に財寶米穀を積貯へ牛馬六畜の所住に至るまで皆以て造る是れ我か安穩處の經營あり亦何をか愁

とせんやと如来即ち語玉のく何を永生安泰の講談を求めずして遅遅するや偶 要偈有り是を聞持すれば存亡共に益有り汝に相ひ贈ん小時營事を止めて坐して剛かよ受べしやと老公答て日今方に太だ 遽し坐して剛に受るに違なし後日に更に來り玉へ共に善く語らん其云ふ所の要偈の今説き玉へと世尊即ち偈を説玉はく有り子有財愚惟汲汲。我且非我何有子財。暑當止此寒當止此。愚多預處莫知來變。愚蒙愚極自謂我智。愚而稱智是謂極愚矣婆羅門史に信せず而して曰く今急遽あり後に來て論談し玉へと世尊の感傷して歸り玉ふ老公は屋椽に上て俄に墮て頭べ破れて命終す家室の男女驚き慟て涕哭する聲四隣に滿つ佛の往き去り玉ふこと未だ遠からずして此の大變有り里邑の諸楚志數十人是を傳へて聞く佛を迎へて此の偈を請す世尊即ち爲めに重ねて偈義を説玉ふ諸梵志欣喜して道果を得たり

法句喻 爰に知りぬ咸陽三月の火未央千歳の塵高樓雲母の垣複殿瑠璃の扉悉く磨滅し歸して才史筆に留まれり造營の功徒に命根を銷燦して我も往き人も往く不若彼の土の常然なるに歸せんにはと云云

○昔時吳王荆國を打とらん欲す智臣ありて諫れども聞ずして還りて其臣を殺し玉へり或時舍人あり弓箭を帶して後園に出て衣露にぬれて歸りぬ吳主のやしみて云く何事にぬるぞと舍人が曰く園の樹上に蟬ありて露を飲鳴其しりゑに螻蛄のつて蟬をとらんとす又螻蛄の

【十一】  
吳王欲伐  
荆

【十二】  
死牛食草  
之譬

しりゑに雀ありて螻蛄をとらんと欲す雀のしりゑに我れ又ありて射事をしらず我れ又露のためぬる、事をしらず如是皆其前を務ん事を欲して其後をかへりみずと云へり吳王の曰く善哉朕を諫ること、謂て終に兵を罷られぬと

吳越春秋事文類聚等に見えたり 世間の佛道をしらざる者も亦復如是唯た生前の利を貪りて無常の殺鬼の後に在る事を顧みず

○昔し賢者有り智恵利根にして早く三寶に歸し修徳持戒の精進にして不怠已てに天年を終て靈魂乃し天に生ず其妻子悲愁追慕の牛羊を殺し雞豚を屠り餽饌を備て冢に祠て哀號す彼の天遙かに天眼を以て是を見る其愚にして悲哭することを憐み自ら化して牧牛の小兒となり冢の邊にして牛を牧す牛便ち卒に倒れて死す牧兒乃し大に嗚び哭して草を刈て前に着牛を呼び頭を擧て食しむ諸人は是を見て其の拙さを笑ふ一人進み近づきて問汝は誰が家の子ぞ此の牛は既に死す汝屢呼で草を薦て食せしめんと欲す死牛何ぞ覺知有らんや早く家に歸て語べし此よして嗚哭すとも何の益か有んと牧兒の曰我れ始めよりして愚なるに非ず此牛は死すと雖ども尸は猶在り蘇活の望み無きに非ず汝が父早く死す百種の食を設て冢に祠り共に向て嗚哭す焦骨何んの知る所ぞと衆人聞て愕然として解了す牧兒の曰吾は本と汝が父なり佛の教道を蒙りて天に生ず此故に來て諭すと即ち天身に還復して曰卿等我が如くあらんと欲せば道業を修すべしと云ひ畢て形ち隠て現せず妻子眷屬是より省悟して三寶に歸

〔十三〕  
撒魚之喻

し佛に奉事して布施を行し道跡を得て同時に天上に生ぜど  
 〇昔し莊周出て祝車轍の回る中に鮭魚ありて曰く我は東海の波に住む臣魚あり謂ずる涙りてこゝに困り君に斗升の水あらば願くは我を活といふ莊周顧みて言く暫く待べ我れ南の方吳越に遊ぎ西江の水を激し漚て子を迎へて活べと鮭魚怒恨たる色ありて曰く吾常を失ち來りて自らこの急に逢へり我今斗升の水あらば活らん君が西江の激水を待ば君は唯括魚の肆に我を索んには如じといへり見也 莊子に されば西海に 鮭を扣き東陸に馬をはやめて利用の足ことをしらざるの都て西江の水をたのむて命根の須臾に盡ことを辨ざるに似たり

〔十四〕  
無常の譬

〇昔し一人有て廣野を行く二の醉象のため追る其の時のがるべき便りなく前後を失ふところに一の井あり藤生さがれり是にすがりつき象難を免れんとす時に黑白の二鼠來りて藤根を嚙切らんとす又 傍に四蛇ありて螫とす井底に二三の毒龍ありて火を吐き爪を張り目をいからかして呑とす其の人仰見るに井の上には二象あり今死せんこと進退こゝに谷ぬ忽に蜂あり蜜を以て其の人の口よそ、此の人蜜を喰て必死の難をとするとなり智人の是れを見て驚て佛道修行して速に此の難を免る、とあり 大集經に見たり

〔十五〕

〇譬へば野干有て林間に師子虎豹の食し殘せる肉を拾ひ食して存活す或る時肉の得べき無

子之

〔十六〕  
四山之喻

くして夜半に城を踰て人の舍中に入飢て睡り息む夜明とも覺ず漸く驚て起て去とするに人多くして免出難し自詐て死せる真似して地に在り衆人來て見る一人の曰我野干の耳を須こと有りと即ち截て去る野干念はく我れ耳を失して痛むと雖も身を損せずば可也と又一人の曰其の尾を用ひんと野干復た自ら思はく尾を截は小事也と次に一人の曰我は身を須めん野干自念はく取り去る物の轉多し若我が頭を取らば活路無らん者也即ち起て力を奮ひて逃去るが如し行者亦爾也生ながらよして修せるは耳を失ふが如し老て修せざるは尾を失ふが如し病ひして不修牙を失ふが如し豈更に死に至て頭べを失ふが如くせんや老病の時自ら寛者の死の期に奢ならんや故に自ら能思量すべしと 大論に出

〔十七〕  
瑛羅王三

〇瑛羅王己でに罪人に向て問曰汝が娑婆に在し時に三使を以て警覺す一の汝人中にして見ざりしや頭白く齒落ち目隠く耳 臃 皮緩り肌皺み脊跛り腰曲て杖に倚て行く汝是を見て何自覺知せざる二の汝本と人たりし時に見ずや病に罹し者の床に臥して呻吟し飲食其の味

を失ひ百節酸疼し五體痛苦して言語澁滯し尿臭困篤するを見る汝何ぞ覺知せざるや三には  
 汝本と人間に在て見ざりしや人の死して諸根壞れ身體挺直して枯木の如く偃蹇知覺なし塚  
 間に棄捐せられて鳥獸の爲に噉食狼藉ある汝何ぞ是を見て驚覺して修道せざるや今汝が造  
 罪の因を以て其の地獄に遣すべし以て汝が放逸無道の報を知しめん是れ乃し佗の過に非ず  
 と云て獄卒に附して那落迦に遣はす罪人等伏し理敢て諍そふこと能はず懺悔して甕門に赴  
 くと  
 經律異相に見ゆ

○ 睡婆多未だ出家せざる時出で、往く道にして雨に値て神祠の内に入りて宿す夜更て風冷  
 しく雲閉て人氣もなし物おそろしく覺て梁の上は潜居たり忽に小鬼有り人の尸を負て  
 入り來る須臾に亦大鬼跡より來り尸を爭ふ共に各々我が將來れりと云ふ大鬼の力を勝  
 て擒奪ふ小鬼の曰く梁上の人霄より其の由を見る下て實に依て判せよと云ふ此の人思はく  
 我れ藏れ潜と雖も彼疾知れり此の尸の證明假使實も不實も共に我を活すべからず殺さ  
 るべくの實を判して死なんと終に小鬼前に尸を負て來れりと云ふ大鬼是れ依て尸を得る  
 こと能はず大に瞋を發して此の人の一脚を拔食ふて去る小鬼其の實に由て證明せし事を感  
 して尸の一脚を取寄補ふ忽ちに愈附て舊の如し小鬼既に辭謝して去る此の人思惟す父  
 母の生せし一脚は我が目の前に大鬼の爲に食はれたり今此の一脚は元と是れ我が足に非ず

【十八】  
 假和合身  
 之緣

【十九】  
 狂女  
 佛心

佗の脚を以て連ね綴て我に與ふ此の身は虚幻あり假に合して實なまど而して佛所に詣して  
 問奉る生死はその路別にして自佗の亦た殊殊なり假りに合して此の身を成す假合せば亦た  
 我が心に隨ふべからず如何か故の如くあるやと世尊告て言く四大假りに合して五蘊は幻の  
 如し悟ること何ぞ脱やと此人言下に得道して佛弟子とある世尊則ち善來比丘との給ば頭  
 髮自地は落て袈裟その肩よか、る漸く行して羅漢を得たり  
 大論 又此の人常に市に入りて  
 呼て曰く我が此の身は我身ありや佗の躰なりや何れの所に決定すべき耶と聞く人みな大  
 笑て狂せりと云ふ一比丘これに語りて曰く四大假りに合して五蘊に幻の如し法界の四  
 大此彼に集まり合して人を成すその人遂に自佗の別なし唯一の四大なり四大本と空あり何  
 の處に實を求めん故に假和合と翻名す  
 ○ 佛在世の時舍衛城中の婆羅門婆私吒瑟據が女一子を喪失す憂毒鬱悶して忽ちに狂亂を發  
 し露形被髮去徒跣號喚して四方に馳走し慚耻を忘れて度無し城邑の少兒等嘲哂追嗤す此女  
 或は怒て是を走り逐或は恨みて泣淚大息す更に疲れ已こと無し彼れ先佛の出世の所とに於  
 て衆の徳本を植るを以ての故に夙善漸く熟す如來能く知めし悲愍の心を起し玉ふ是時假  
 の女即ち世尊を見奉りて我が兒の想を生し即ち世尊の足を抱持して嗚嗚按摩す世尊即ち侍  
 者阿難に告て衣服を持して與へて着せしめ種種諸の法要を説玉ふに女便ち本心に還り菩提

心を發起すと 涅槃經の説

○昔し如來說て曰四種の馬有り一には鞭影を見て即ち驚き進みて御者の意に隨がふ二は毛に觸て便ち能く路に進む三には肉に觸て而して後に乃し驚き進む四には鞭を揚て頻りに打ども驚かず肉に當り骨に徹して而して方に覺す是の喩を合するに初の馬とは謂く佗の村里の無常を聞て即ち能く厭離の心を生ずるに喩ふ次の馬は已れが所住の聚落に無常の有を聞て驚くに喩ふ第三の馬は我が親屬の無常に由て即能く驚くに譬ふ第四の馬は猶己身病苦の逼迫するに由て初めて厭ふ心を生ずるに喩ふと 雜阿含經の説

○昔し如來爲諸比丘死想の義を説く一比丘の曰死想を觀するに七年を過さじと有か云七月を保たじと有か云七日と乃至一日をも保難しと佛の言はく是を放逸と名く善く無常を修すと云ふすと一比丘の曰食頃をも保ち難しと佛の言はく是皆放逸と名くと一比丘進て白す出息の入息を保たずと佛の言く是を精進に善く無常を修すと名くと 大論に見

○漢の高祖疾甚し呂后良醫を迎ふ醫入て見ゆ上問て曰く疾治すべきや答て曰く治すべしと上慢り罵て曰く吾が命乃し天に在り縱令扁鵲と云ふとも何の益有らんやと云て遂に疾を治せしめず 漢書に見たり

附 苦樂

〔二十七〕 四馬之譬

〔廿一〕 佛對三比丘問三無常

〔廿二〕 高祖不病令治

〔廿三〕 四比丘辭苦

○四比丘有り各々樹下に坐して共に相問て言く一切世間に於て何者か最も苦なる一人の言く天下の苦惱欲に過たるは無し一人の言く世間の苦飢渴に過たるは無し一人の言く世間苦瞋恚に過たるは無一人の言く天下の苦驚怖に過たるは無しと共に苦の義を争て止す佛其の言を知て往て其の所に到て諸比丘に問ひ玉はく向に何事をか論するやと比丘即ち起て作禮して具に論する所を自佛の言く汝等が論する所は苦の義を究す天下の苦ハ身有るに過るハ無し飢渴寒熱瞋恚驚怖色欲怨禍ハ皆身に由り夫れ身は衆苦の本患禍の元ありと 法句經の說法苑珠林の意

○昔し漢の龐儉が父ハ亂に値ふて先つ逃去りぬ龐儉と母と連て亂を遁て諸方に流浪す更に何つ方にあるとも聞かず定めて山中に迷ひ谷に轉落て岩石に碎かれ或ハ深小大河にかゝりてや流れて死すらん又ハ虎狼に噬又ハ賊手に殺されぬらんと子母のみ語歎くより外おし龐儉或る時我が住む宅に井を掘しかば銅數千斤を掘り得て大に富たり此の上ハ奴を買て田畠を耕し家業を立んとて身を質に入れて仕べき奴を求るに一人の男出來り錢を賣て身を賣と云ふ即ち契券をとりて錢を借し召仕はんとて倩見れば形ち瘦年傾ふき鄙げに成果てたる翁ありかの男泣々曰やうは堂上の主婦ハ我が昔の妻なりと母驚て能々見れば我が夫あり迭に往初の事を語る龐儉は幼少にして別れしかば共に見忘れたり妻と子と別れて久

〔廿四〕 漢龐儉買奴值

しき悲しみの今は相ひ遇喜びとなれり家業て應候その名天下に布せり時の人曰く井を鑿て銅を得奴を買て翁を得たりと風俗通にこれ離別程過て山川万里を隔て事問ふ便りも無かりし所に一朝にして忽ちに回り値は悦び限あからん今無常の強賊に追散されて獨死獨行の悲に値といふとも本願相應の行者は重ねて俱會一處の對面を得て永く不墮惡趣の果報を満尼すべし

○昔し月氏の傍ら林邑國に佛哲和尚とて道行堅固の僧あり大慈悲の心深くして常に國土の貧人を慰れみ何にもして此の窮民を救ひ飢寒の憂を離れ佛道に入らしめ化益を普くせばやと思ふ而りと雖とも珍寶財産の貯めあし多少の貧人を思へき術をし夫れ釋迦佛の因位の時大施太子と號せし日大海を渡て如意珠を求め諸有の貧乏を贍し濟ひ玉ふと云ふ我も亦龍神に由て如意珠の素て國土の窮困を賑し救はんを欲して即ち一葉の舟に乗りて南海に泛び密呪を行なふて龍王を召す龍王即ち波の上に出つ佛哲是を呪縛して珠を索む龍王大に恐れて誓の中の如意珠を解て授んと欲す佛哲右の手に智劍の印を結び左の手を舒て是を受るに龍王給きて曰昔し佛在世の時娑竭羅龍王の女法華經に由て得道し南方無垢世界の成佛を遂先報恩の爲の故に三顆の如意珠を瑠璃の盆に盛て靈鷲山の會上に詣で、供養せしかば釋迦世尊は合掌して受玉へり傷哉今像末の佛弟子として其の法式を破り隻手にして是を受

佛哲和尚  
欲極三  
誓一

廿六  
覺離成  
子來并  
附對三治  
之一

る事よと云ふ佛哲聞て理も屈して印を解て掌を合せて受んとす龍王已に縛を脱して珠を藏して海に入る佛哲欺れて舟亦た破れ行法空くして波の上も立つ婆羅僧正の天竺より震且も赴く舟に伴はれ日本の聖武皇帝の天平八年に本朝に來り僧正と同じく東大寺の供養に値本朝の樂部の中かに菩薩蠻調 拔頭曲調 乞食 等の舞及び林邑の樂は皆佛哲の傳ふる所あり元亨秘書 如是或は衆生の薄福なるに由て求て得ざるの苦或は慈仁の恤及ばざるの歎有

○釋の阿足師は其の本國姓氏を詳かよせず唐の太曆年中に出て形質癡鈍あるが如く精神魯然たるに似たり而れ共其の言ふ所先天の事に契て能く符合す居所定め無と雖も多くの閔卿と云ふ處に寓す塵俗の貴賤來り集て禮拜面謁し檀施山の如くも積と雖も曾て顧みず人若し病に嬰者の來て其の指南を被るに其の神驗を得ざるはなし近頃陝州の地に富庶の家翁張臻と云ふ者の産業且つ多く財貨益増す然るに一人の子あり唯所少此の一つに在り庫中の錢の貫を爛かし圍内の穀は虫を生ず布帛産業悉く身の後に嗣無き徒らに佗の有と爲と常に憂を懷く所に後に一男兒を産す喜慶限り無く鍾愛甚だ深く掌上一顆の寶珠懷中白和の名香と云ふも何ぞ是れに比對せん月漸やく重なり齒已でに積に隨て愚にして頑あり手足攀券として語言蹇澁す唯飲食を貪て味膳を嗜み其の所食平人に倍増す口喉溪壑の

如くして終日暇ども厭期なし年十七許り父母愛憐して其の索むる食物を調へ與へて縦に  
 して制すること能はず醫師を迎へて藥を求め千里を遠しと爲すして到りて療すること既に  
 數年に及ぶ家業悉く敗し財産漸く窮す或人曰閔郷の阿足師の寶誌和尚の法流にして慈仁深  
 く奇特多き名師あり何ぞ彼こに行て心緒を宣て哀を求め其の疾を救はんことを請じざるや  
 と張臻即ち夫妻其の子を具して閔郷に到り頭を叩き涙を拭て其拯濟を請す阿足暫く目を瞑  
 ぎ良久して張臻に謂て曰汝過去世の冤讐既に化して子と成りたる數年の勸尙未だ其の怨を  
 果し盡さず我汝が爲に是を除ひ去んと日を選んで河の上に於て齋を致さしめ廣く衆人を召  
 集めて同く結縁供養せしむ乃し其の男を引出して道場に赴むく衆人阿足の奇異を知て觀者  
 肆の如し少選有壯夫三數輩を招き呼て其の子を叱して挽て河中に投し急流底深く浮没不  
 レ定逝く張臻夫妻且哀み且驚て其の由を測知ること無し阿足即ち張臻に語て曰今汝が爲に  
 冤讐の災を除き訖すと少時有て其の子乃し數十歩の河下に浮び水面に立ち手を拍て父母  
 を罵て曰爾與我冤仇あり宿世の縁業最とも離るべからすと雖ども聖者の持念に達て遠に  
 恨を解冤を散す若し或は爾らずは生生を經とも盡る期有べからず我乃ち家業を壞敗ふ財  
 を損滅して夫妻分離し乞丐無頼の者のと成べき也と云て言語分明にして滯る所無く都  
 て愚惑の狀に非ず頃與の間に水に沈て其の行き去所を不知

宋高僧傳に出

〔廿七〕  
榮啓期之  
三樂

○昔し榮啓期と云ふ者あり道を守りて賢なり鹿の裘袖せのく裙短かし索を以て帶として  
 寒風更に防難し藜の羹僅に飢を養ふて亦た足せとせず自坐して琴を弾して歌ふ孔子そ  
 の樂しむ所は何ぞと問ふ榮啓期答て曰天地万物を生ず其中よめ人を以て貴しとす吾今人と  
 生るゝことを得たり是れ一の樂しみなり男女の中には男子の貴とく女人は身吾既よ男と生  
 れたり是れ二の樂しみあり人と生れても襤の中にして天殤する者の有り吾既に九十五歳に  
 及べり是れ三の樂しみなり貧賤は命あり死は人の終也亦た何をか憂へんと 列子 是に依り  
 て三樂の翁となつて

〔廿八〕  
五王各言  
レ所レ樂

○昔し隣國 諍 あく互に親友となり五國の王常に一處に集會して遊宴して興を催すその中  
 に一の大王を普安と名つく菩薩の行を行して慈仁深く國家を化導して庶民安泰なり餘の四  
 王の邪見放逸なることを愍み或時殿上よ召請し七日七夜娛樂を極む而して後に問て曰各々  
 常に樂しむ所何をか殊と更好み玉ふと一の王の曰く我願くは春陽の日原野に遊て萌出る草  
 葉に心をかけ 蓄綻る露に目を悦ばしめ日外春をらんことを思ふと一の王の曰く我願  
 くは生生活常に王となり綾羅錦繡玉の瓔珞金の 鞵種種莊嚴に奇麗を盡し侍従のおもとびと  
 多く列ね行宮に幸せんに國民羨み目を 傾あば足あんと一の王の曰く我願くは 好美婦  
 人無雙の國色を求め得て床を同しくして遊戯娛樂せば何をか思はんとの一の王の曰く我願



くは父母常に在り兄弟和睦し山海の珍味を盡し音樂を以て共に相娛まば何をか思はんと普安王聞て曰く此の願ひ更に長ずされば一陽來復の春の氣を感じて原野に遊戯して樂しむも山嵐吹て梢を搖し一旦花飛んで春を滅却せば憂へて歸るに樂しみ盡かん次に王身として種種莊嚴すとも福德已に盡磷がは佗又相代て序で愁の憤りとなり次に好美國色の婦女ありとも年月に移されて色衰へ膚悴け我は疾に犯されなば忽に樂しみを忘れ愁苦を生せん次に父母兄弟常に在りとも一朝一夕若し事有らば東西に離散し南北に逃亡して愛戀愛患の苦とならんと也その時四人の王又問て曰く大王か何をか樂しみ玉ふぞと普安王答て曰く我が所レ樂方不生不滅不置不樂不飢不渴不寒不熱存亡自在の大道なりと四王問曰如是勝道の大樂は何れの處にしてか求めんと普安王答て曰く吾が道の師は佛と名つく近く今祇洹精舎に在すと諸王歡喜して各佛所に詣て自ら禮敬して法を求む如來即ち八苦の相を説き玉ふ四王及び臣下百千萬の人天須陀洹果を證して出家して入道 五王經の説

○梁の文宣帝は酒を好みて朝政に疎なり史官事を奏すれども常は醜醜して果す漸く下も怨み傍反と雖も知らず或時左右の侍臣を集め酒宴して歌舞妓樂をなす文宣帝大に酔て曰く快哉大に樂まむこの樂亦何にか換んやと大臣王紘と云ふ人進みて曰く長夜荒飲して國の破る、ことを悟らずこれん何の樂みぞや殆ど大苦ならずや 傳に出つ されば琴詩酒

【廿九】  
梁文宣帝  
荒飲之樂

【三十】  
不淨觀之  
比丘自害

の友を集め雪月花の樂しみを並へ是に樂着して日を送りて亦天上の樂みを笑ふ輩ら一旦報盡さて落魄の時來果の苦痛を思へば平生の愛樂は大苦の因にあらずや

附 不淨

○如來そのかみ跋耆國の婆求河の上の伽藍に在りて諸の比丘の爲に不淨觀を修せしむ比丘みな是を修して我身の上を厭穢み或は刀を求めて自害し或は毒藥を服して命をすて又は自ら縊れ又は高岸より身を投て命を棄たりこゝに比丘ありて鹿杖梵士といふ者の所に到りて曰く汝よく我を殺して得させよ然らばこの衣鉢をば汝に與へんと梵志即ち利刀を以てその比丘の頭を切り命根を斷て衣鉢をとる河の上より到りて刀に付たる血を洗ひける所に天魔來り化して菩薩の形となり水の中より出て、水の上に座し亦立あかるに陸地を踏が如し微妙和雅の音聲を以て梵志を讚嘆して曰善男子汝大福德を得たり是れ實の沙門釋子なり未だ度せざる者を度し未だ解脫せざる者を解脫せしむ比丘の心を安慰せしめ衣鉢を得たりと梵志この音を聞て歡喜心を起す是の如く比丘また往て害せられんことを求むすてに六十人の比丘を殺せり布薩の時に於て如來すなはち阿難に問玉はく諸の比丘見え來らずは何の故ぞと阿難具さよ答て佛に白す是に由て制戒を立るにその等あり其後また觀を改めて十六特勝を修せしめ給ふ 十誦律 に見ゆ この特勝ハ觀惠勝れ心眼開けて無漏の善業を發す故に自殺の難なし

李夫人

此故に特勝の名あり

○昔し漢の李夫人の無雙の美女あり武帝の寵愛亦た比類なし一旦病に臥たり帝自ら幸し玉ふ夫人更に衾を被て謝して曰妾久く病に惟り形替り色衰たりとて見す帝不悅歸り玉弟の爲也我か容貌の美さを以て賤家より愛幸を得たり夫れ色を以て人に事者は色衰て愛薄愛薄ければ恩絶也帝我を念ひ玉ふは我か平生の容を以ての故也今の顔色衰へたり帝見玉は、穢み弄て思ひ絶玉はん况や兄弟には恩有んやと云て遂に見ずして死にけれ帝強に戀ひ悲しみて李廣利を海西侯に封し李延年を協律都尉と爲玉ふ帝尙も悲みて方士李少翁を召て返魅香を燒玉へり 漢書に見

目連之妻

○昔し長老目蓮比丘すでに出家して羅漢道を得たりその妻これを歎き俗家に引き還さんことを計色よき衣を著し瓔珞を垂玉の釵を戴き絞羅の帔をつけ五綵の沓に脂麝を籠沈水香を身にぬり傍を薫馥せしめ種種莊嚴し來りて目連に向ひ軟語を出し泣つ笑つさまぐに誑かし情によはりて心を蕩かし色に愛て眼眩くかど或は恨或はかこちけり時に目連すてに道を悟りぬれば自性を觀して心更に動かす偈を説て呵しけるの汝が身は皮骨連ありて立り筋肉のひ纏ひ不淨内に充滿す韋囊のかはふるろに尿溺を盛九孔つねに漏出つ鬼神だに潔

檀林皇后

しとせず何ぞ自ら貴しとする汝が身は厠の如し薄皮を以て覆へり智者は棄て遠ざくべし世の人も我が如くに汝が身の不淨を知らは皆我が如く惡み厭はん汝種種に莊嚴して身を麗くせりといへども凡夫は貪愛すべく智者の惑べからむ汝は是れ諸の不淨穢惡の集まる所たゞ厠を莊るが如し汝が脇肋の脊骨に著て連るの椽の梁に依り棟と柱の相持が如し内に不淨を保て外に珠玉の飾をつくる畫ける瓶に糞尿を盛に似たり汝來りて我を燒とす飛蛾の自ら燈火を投るが如し一切の諸欲一切の諸毒をば我今ことごとく滅盡す五欲すてに遠離し魔網すでに壞裂して心は猶虚空の如し一切着する所なし假令天女といふとも我が心は染べからずと如し是二十餘行の偈あり妻ついに目連の道果を壞する事能はずと 翻秘要經に見ゆ

○昔し本朝嵯峨天皇の后を檀林皇后とぞ申ける仁明天王には御母なり贈太政大臣正一位清友の娘嘉智子と号す日本無雙の美人にて金雞障の中に養はれて羅綺の粧を飾瓔玉臙の下とに刪れて窈窕の貌を瑩しかば聞つたふる人魂を焦し思ひをかけ心をあやましめこがれすと云ふ事なし既に皇后に立玉ひて朝政をす、め自ら四徳をおさめ六行を護り色に淫せず善を傷ず誠に榮華の春をむかへ君の恩寵にあつかり玉ふ都て六宮の中粉黛社顔の美夫人多しといへども此皇后に比ぶれば色なきが如し百の媚子の態さながら後宮に人なきに似たりされども浮世の榮耀をば草の露水の泡としり深く無常の理をさとり後世の營

に心を傾け五百領の袈裟を手づから裁縫て惠尊法師の入唐するにまじ添て育王山の僧に供養しその外常に三寶を貴び法華經を寫書し諸の功德を積善根を植玉ふ山城の國久世郡に西院といふ所は淳和天王の離宮なりこゝにおはしまして佛道を營み玉ひしが疾に臥玉ひ今は此世の縁つきて特なく見ぬさせ玉ふ時願命して曰はく我死せば葬送の事ゆめく致すべからず尸を野邊に捨て曝すべし穴賢此事違などて薨し給ひけり仰のまゝに西の郊の野邊の草むらに棄置き奉りまかば日を經間に膨脹と腫ふくれて革囊に水を盛たるが如く爛壞とたゞれ潰て腸流れ蛆生蛆集て色黯黯とくろく瘠み風に吹れ日に乾きて半は青く烏來りて兩眼を啄み穿て玄髮拔亂れ蓬が下に纏れて犬狼の競集まり擱裂曳散して爭食ふ手足と頭とみち散々になりて臭きこと傍に盈て遠く聞ゆ初め此後の面を見名を聞て戀慕の波に沈み愛執の火に焦し人みな行きて是を見る臭穢狼藉にして目も當られず各々袂を鼻に支目をふさぎ逃て還る是は年比おはくの人の此皇后を戀たてまつりて深き思ひに心をなやましけるを人の執心をとめて無常不淨を知らしめ佛道をす、めん方便なり彼の草原に拳の礎て有りけるを拾て葬禮の事を營けり今もその所を一拳と名つけて人の住里となれり其後梅氏の祖神と崇梅宮とて平安城の西郊に是あり本朝國史に見ゆかゝる不淨の有様みなこれ有待のしからしむる所なり虚無無極の身を得ずんば早晚この悲みを免るべき

〔冊四〕  
影勝王生  
天之縁

天道部

○昔し影勝大王は善く箏を彈す朱絃音調り宮商節に叶ふ王の妃星光夫人は姿容端美にして國色無比なり而して善く舞を爲す廻雪の映には散花菲菲たり青娥の曲には蘭香芬芬として天地を感動せしむ大王又善く人を相す舞已て夫人の面良を見るに死文顯現す王甚だ憂て語て曰く却後七日更に必ず命終すべしと即ち放て出家せしむ果して命終して天に生す尋て來下して大王に報す其面容端嚴なること前に倍す王愛念増深くして同じく宿せんことを求む妃の曰天と人と境異あり業と果と品替れり大王我に配偶せんと欲せば天の修因を植玉へと言訖て昇り去る王即ち勝業を精勤して死して天に生し夫人に相ひ遇て夫婦となり共に受樂すと根本毗那耶律の説

〔冊五〕  
目連往三  
切利天一  
見三香婆

○昔目連尊者其弟子有病以て切利天に昇りて耆婆に問んど欲す諸天の歡喜苑に入るに値ふ目連在路側立一切の諸天目連の立たるを顧みる者無し耆婆其後より至る目連を見て向ひて手を擧て楫するのみ車に乗して直ち過ぐ目連自謂はく是れ元と人間に在ま時即ち我が弟子也今已でに天福を受けて以て天樂に着し都て本心を失して禮拜せずと乃し神力を以て車を制して駐しむ耆婆即ち車を下て目連の足を禮す目連種種の因縁を宣て呵責す耆婆答て曰我人中に在し時に大徳の弟子たるを以ての故に手を擧て楫す諸天の中に誰か如是す



しに彌勒即ち讚して曰く善來廣惠と呼玉ふ我れ起擧りて禮拜して即ち來り報する也と無着の曰師子覺今何くに在りやと世親の曰我れ師子覺を見るに視史多天の外院の天衆とあり五欲に樂着して來り報するに暇なしと無着の曰彌勒菩薩は何なる相好にして何なる法を説玉ふと世親の曰く相好のことは言語の及ぶ所に非ず妙法を説て菩薩天衆を化し玉ふ事此に異ならず然も音聲清雅にして聞く者倦ことを忘れ受る者は厭はずと云ひ畢りて靈靈として昇去りぬ  
西域記の説

附魔

持世菩薩已てに大行を修して學道を求む惡魔有り是を燒亂せんと欲す諸の天女を將て來る形ち天帝釋の如し顔容端正なる事比類なし天の妙音樂を奏美音を揚て歌詠し持世菩薩の所に到りて語て曰く此女を以て施し奉るへし朝夕傍に侍從せしめ酒掃供給の勞に當て召し仕ひ玉へと菩薩即ち彼の魔を以て實の帝釋なりと思へり而して答て言く女は是れ非法の物にして菩薩清淨行の中に於ては用ゆべき類ひに非ず能く諸の障得となり梵行を穢す更に學道の助けとなることなし此故に我か爲めに宜しき便りならずと爾の時維摩詰此れ惡魔ありと知りて是に語て曰く今此女を我に施すべし我は在家の白衣あれば給仕の爲めに備ふるとも何んの過か有らんと惡魔怖れて去らんと欲するに維摩の神力を以ての故に隠れ去ること

持世菩薩

持世菩薩

と能はず僂仰して易からず天女を施與す維摩即ち諸女を教て正等正覺の大心を獲さしめ法苑樂を説與へて五欲樂を捨てしむ所謂惠施を以て慳貪を離れ淨戒を以て慢恣を離れ忍辱を以て調順を行なひ精進を以て懈倦を治し靜慮を以て亂動を治し般若を以て惑翳を去る菩提廣大の妙樂にして能く衆魔怨を摧伏す諸大菩薩常に其中に於て住す是を法苑樂と名くと諸女已てに心意開解す而して問て曰く今天上の魔宮に歸り云何んか修行すへきと維摩の言く妙法門あり無盡燈と名く譬へは一燈を百千燈に移し傳へて燃す冥き者皆を明らかにして展轉して盡ることなし假令ひ魔宮に住すとも無量の天子天女を勸めて此無盡燈を以て照耀して菩提心を發さしむべしと天女歡喜奉行して天宮に還ると經の說これ無盡燈とは利他教勸の大悲の名なり而れば持世は大菩薩ありと雖も魔宮に便りを伺がふ維摩はこれ金粟如來なり身を在俗に居して三寶を紹隆擁護して菩薩の大道を退轉せざらしむ

佛昔し衣鉢を持去て城に入て乞食玉ふに波旬見て念して云く方に此道徳を破壞せんと即ち御車の人と變して手に鞭を取り把て牛を覓む身には弊壞の鶉衣を著し頭を蓬亂して佛所に向ひ至て問奉る我か牛の放れて往くを見るやと佛は天眼を以て是れの魔破句我れを燒亂せんと欲すと知りて答て言く汝惡魔何れの處に牛有て是れを用ることを爲と破句亦念して此沙門我を是れ魔ありと知る今の隱すこと能はずと即ち佛に問て曰く我は眼根の觸入處

を以てし乃至意根の觸人處を以て我か乗とす沙門何の之所ぞと佛答て言く我は彼の六觸の處に到る是れ汝か到らざる處なりと波旬即ち意に以はく我は御者の如く六觸の乗の如し能く此の六觸乗を御して諸の衆生を運載して三界處に到らしむ所以涅槃は其六觸乗の能く至る處に非すと佛言はく汝か所念の如し是れ汝か至らざる處の六處をさ涅槃の大城ありと破旬聞て禮して去ると 婆沙第九の説

佛在世の日魔有て化導を碍んと欲し自ら瑠璃の琵琶を抱き來て佛前にして曲を彈ず飛鳥の翅を垂れて止まり走獸は蹄を折て踞り是を聞て飢渴を忘れ枯木花開き流水湛ゆ諸王臣下后妃等は感喜愛樂して歸らんことを忘れ諸漏未盡の比丘の心意蕩て醉るか如し佛即ち偈を説て誡め王ふ魔大に震懼墜落して去ると 雜阿含經の説

釋の惠覺法師は其氏族を知らず出家して長安の大寺に住す戒行を勤持ちて心意澄潔あり好みて山谷の間に行き止て禪定の業を修す或夜頭のなき鬼來れり惠覺更に怖る、心あく神色少しも變せずして即ち謂く汝は已てに頭なし定めて頭痛の患をからんと鬼便ち形を隠し去る復或夜空くもり星暗に鬼又來れり頭の髮逆に立ち眼に光りあり口甚だ大にして色赤し但だその頭の下に手足有りて腹なま惠覺又曰く汝已てに腹なし定めて五臟六腑の病なかるべしと須臾に異類異形の者となる惠覺それくに應して言を以て遣に鬼屈して終に

【四十】  
天魔障  
【四十一】  
惡鬼法師  
血行之怪

隠れ去る後ちに冬の時天甚だ寒く雪驟しく降日已てに暮か、りて一人の女子あり袂を笠になし岩づたひにたどり來て道踏たがへて日は暮がたあり剝柱めまらぬ山の中に雪深く降荒り飯さもさだかに亦知る人もなし今夜の宿かし玉へと云ふ形も嬌かに容麗く匂ふかく情ありげに衣服更に鮮なり此世の人とも覺ぬす虎狼の難も痛のしくて柴の戸をひらき内に入れし又女子語りて曰く今は藏へからず我は是れ天女なり上人の徳高く行勝れたるを以て天帝我を遣して慰諭せしむとて燈の下とにさし向ひ種種に語りすかくて色を談じ媚を説き欲して勸めて其意を挽動かすに惠覺その志さし一心貞確にして亂る、思ひなし即ち女に謂て曰く吾か心は死灰の如し汝か相の草薺に尿糞を入れたるか如し是れを以て我れを試むることなかれと女即ち座を立て空にのほり雲を凌ぎ惠覺を顧みて歎して曰く海水の竭へく須彌は傾くべし彼の上人の心志は良に堅貞なりと云ふて形ち即ち隠れたり其後ち晋の隆安三年に法顯三藏と共に西域に遊ひて其終る所を知らず 梁高僧傳の説

阿難は多聞の聖人あり如來涅槃に臨玉ふ時六万四千億の魔の爲め臆亂せらる魔皆佛形を變現して沙羅林の外か十二由旬にして種種に説法す佛即ち文珠を遣はして魔を壞えて阿難を將て佛所に歸ると 涅槃經の説

【四十二】  
阿難  
二阿難

昔し婆羅痾斯國施鹿林の東の方二三里に涸たる池有り周り八十餘歩なり救命池と云ひ亦

隱士仙道之障礙

烈士池と名く數百年の往當一りの隱士有りて此池の側りに廬を結び迹を屏て止住し博く諸の伎術を學し神變の理を究め能く瓦礫をして寶と變し人畜をして形を易しむ但し未だ風雲に馭して仙衆に交はること能はず是より神仙長生不老の道術を求めんと欣圖を閱し古を考がへ見るに其方法に云く將に仙道を學せんと欲せば先づ其志を定め壇場を築こと周り一丈餘にして一りの烈士の信にして武勇なるに長刀を執て壇隅に立て息を屏し言を絶て昏より旦に達り其仙を求る者は壇の中央に座し手に長刀を按口には神咒を誦し視聽を收めて心を接すれい遲明即ち仙に登る執所の長刀の變して寶劍となり空を凌ぎ水を履て諸仙と侶とあり若し劍を執て指揮すれば所欲皆従かふ不老不死にして長生自在なりと隱士即ち烈士を求むるに貧窮無頼の士を得たり恩を興へ養を加ふるに此士感激して眞信有り智有て勇なり謝して曰く吾は貧困無頼にして溝瀆に倒れて餓て死んとす君陰德を以て救済す恩德を報せんと爲るに其命を聞かずと隱士か曰く我幸にして公を得たり吾れに一ツの行法有り公に非ずは吾か爲に是を成せしむる者有べからず請ふ一夕聲せずして立て明に至れと烈士か曰く命ちなりとも尙辭せずして奉つらん況や徒に息を屏して立ち曙に至る事をやと隱士大ニ悦びて壇を設け方法に由て事を行なひ日晡て後ち隱士は劍を執て壇上の中央に座し口に神呪を誦す烈士の長刀を執て壇の側に立て寂寥として音をし既に曉に及びて烈士忽ち

に聲を揚て叫ぶ是の時空中より火下り焔迸りて乃し爆々たり烈士即ち隱士を引立て、池に潜れて難を通る隱士即ち烈士に問ふ我れ子を誠めて言すや遲明に至るまで慎て聲すること無れと何を以てか俄に驚き叫たるやと烈士泣て曰く我れ已に命を受けて後ち夜分に至て昏昏として醉るか如くして變易更に興る昔し事たる主の來りて我を見て大に喜び種種に慰諭す我即ち謝して禮せんと思ふと雖も君の厚恩を感じ誠の言を念して忍びて報語せず彼の主震ひ怒りて我を擊殺す我れ中陰の身を受けて害せられし屍を顧て惜み歎くと雖も尙聲を發せず言すして君か恩を報せんと思ふ遂に南天竺の大婆羅門の家に託胎して子と成り生れても亦恩を荷ひ誠めを思ひて聲を出さず弱冠婚姻し親を養し子を生ずる毎に念して言いはず眷屬咸く怪みて瘡癩也と謂ふ已てに我れ六十五歳に及ふ我か妻謂て曰く汝言ふべし若し夫れ言いはずい當に子を殺害せんと我れ心に思はく既に生を隔て我か身今衰老す唯此稚なき兒子のみありと愛念忽ちに發りて妻を止め劍を奪ふて殺害することを得ざらまめんと欲して遂に聲を發して今此耻を見るも隱士曰我か過なり初めより此魔障有べき事を語り教へざるを以て燒されたりと云ふ烈士は事の成ざることを憤辱して自殺すと城

【四十四】

○往昔大海の中に一ツの大虬あり 無角 其婦妊て猿の心を食はんことを欲す是に由て身體

猿心之欲

羸瘦此是を問ふに其心願を説虬の曰此事甚だ得難し我は大海に在り猴は山林に棲何よ由て  
 可得んと婦の曰若し得て食せずの貽必す墮て我れ亦死せんと虬の曰我れ方便して求めんと  
 海岸に到るに一ツの大樹の梢に大獼猴有て果を取て食す虬か曰婆私師吒獼猴之梵語我れ汝と善  
 友たらんと欲す此大海の中に種種の華果有り我か背に騎彼に往て多く與へんと猴大に喜て  
 虬に騎て海に到る漸漸に水中に趣きて没せんとす猴の曰何そ林中に行かずして水の深さに  
 趣くやと虬の曰實には我か婦妊り汝か心を食せんことを思ふ此故に汝を將て來ると猴即ち  
 思惟して曰く彼れ我を誑欺さて殺さんとす我れ方便して彼れを欺きて命を免れんと虬  
 に語て曰我か心は樹上に止め置く汝疾語らば持來りて與へん者とやと虬聞て而らば還て取  
 り持ち來れと云ふて又岸上に負て上る猴即ち跳て背上を下り大樹の梢に登る虬其本どに留  
 りて久して曰何そ遅さや速かに心を持ち下れと猴の曰汝虬は計こと寛して智慮なし我か心  
 は樹上に在るに非ず常に身内に在り我れ豐饒の菓林に往よりは不如此樹の果を食はんよ  
 はと即ち憤恨して海に歸る彼の時の大獼猴は是れ釋迦佛也虬は今の魔王是也迭に誑欺して  
 尙今日亦如來を欺惑せんと欲すと  
 佛本行經の說

三國 大因緣集卷之十終

三國 大因緣集卷之十一

雜門 信疑部

○昔し蔡邕と云人有り能く音律に通ず嘗て陳留に居す隣人酒食を設けて邕を召す先きに一  
 リの客有り琴を彈ず邕琴聲を聞て取て門に入らずして曰く嘻我れを召て殺害の心有ること  
 は何んの謂そやと云て遂に歸らんとす將命者以て主人に告く主人遽に自ら追て其故を問  
 ふ邕具さに語る客の曰く我れ向に琴を鼓す螿螂の方さ蟬を捕んとするを見る蟬將さに去  
 らんとして未だ飛はず螿螂これか爲めに一たひ前一たひ卻ぞひて深く銜ふ吾か心聳然とし  
 て唯た蟬の螿螂を失せんことを恐る豈に此殺心聲も形る、ことを爲るやと邕莞然として笑  
 て曰く今此事を聞て慮りを解くと事文類聚手に琴を鼓すると雖も心に縁する所は必ず  
 其聽に現蓋し鍾子期死して伯牙琴を破るも此謂欺  
 ○昔し鉄を亡の人あり其鄰の子の竊めるかと疑ふ乃し其子を見るに言語動作一として竊  
 ますと云所をし俄に其鉄を尋得たり其時に至て鄰の子を見るに言語動作一として竊しと疑  
 ふべき所なしと  
 列子に見たり

○昔し漢の將軍李廣は身の長け高く力ら人に絶眼の爛星の如し有る時草澤の中を行くに猛  
 虎ありて草中に踞れり弓取直し箭をへげ射その箭あやまたず手をたへして中この虎更に

祭世聽三  
知殺心

亡鉄疑  
鄰子

李廣射  
堅石



動かす李廣怖みて若しは頑石なるべきや箭に中りて動かす又一箭を射に鏃折篋碎てたす立ちよりて見るに石あり初め虎と信して射ける箭はくづ巻を逼て深く入り後に石乎と疑がひしかば篋碎て立ざりき 漢書李廣傳

〔四〕王覇渡深淵

○後漢の光武の時王莽と云者亂を起して軍兵雲霞の如し王覇將軍と光武皇帝自ら向ふて討に勝ず軍敗れて引て還る王莽これを追こと太急也滹沱河と云ふ大河に行きかゝる斥侯者立還りて曰く氷至りて深し舟に非ずしては渡るべからずと爾時王覇聲をばげまして曰く天甚寒して氷堅早く渡りて北べしと軍士みる河に赴に氷の面て氷堅閉て一騎も流れず岸にあがる追手の兵の河端に來り水の深さを以て引て還る光武の云く王覇が權謀を以て殆きを濟これ天の瑞なりと 後漢王覇傳 氷と云ふに信を生して諸軍深水を渡るに一騎も流れざる方に信力の恃所如是

〔五〕孟中之蛇發疾

○晉の樂廣字彥輔南陽清陽の人あり河南に遷り居す常に親客あり久く來らず廣其の故を問ふに答て曰く前日酒を賜ふ飲之ヲ忽然として孟中に蛇の有るを見る意ろに甚た惡之ヲ既に飲て而して疾とある此故又來らずと于時壁上に塗り弓有り蛇を畫けり廣意らく孟中の蛇は即ち畫弓の影ならんと復酒を酌前きの處に置て客又謂て曰く孟中は蛇ありや答て曰く初の如しと廣乃し其所以を告くるに客豁然として意解て沈痾頓に愈 晉書に出たり

〔六〕鷓鴣奇事

○昔し鷓鴣を愛する人有り毎日海上に行て遊ぶ百千の鷓鴣共に懷て不飛一日其父曰く鷓鴣汝馴て去らすと聞く必ず取り來れ吾れ是れを玩んと翌日海邊に到るに群鷓鴣に舞て而して不飛 列子に見たり

〔七〕倩女離魂

○清河の張鑑幼女あり倩娘と名づく鑑嘗て王宙か妻となさん事を約す既にして是を違して賓僚の賢者へ嫁せしめんと欲す女子此事を聞て樂す宙も又深く恨む宙適京師に赴く即ち舟に乗して行數里よして夜半あり忽ち岸上に人の呼ぶ聲あり問之ヲ乃倩娘あり遂に船中に匿て蜀國に至り居ること五歳にして二子を生す倩遇父母を思ふて共に故郷に歸る宙獨り先づ鑑が家に到て不義にして倩娘と同道して行きし事を拜謝す鑑が曰く吾が女子病閨中に在ること數年なり汝何を詭説するやと宙が曰く未だ舟中に在りと鑑人をして見せしむるに果して然り使者還りて實義を告ぐ閨中の病女聞之ヲ而喜然として起て出つ相ひ迎ふに二形合して一躰となると 剪燈新話并類說に見たり

〔八〕同夢迷詭  
鬼相擊

○昔し山中に古寺有り中に別房あり常に鬼有りて來るが故に諸の道人皆な此房を捨て去りて住する者あし客の比丘有り日暮に此寺に來る維那即ち彼の房に宿せしめ而して語曰此房常に鬼有て來り止宿する人を惱ます如何んか住せんやと客比丘自ら持戒力多聞力を恃て是を畏れずして曰く此小鬼何んの惱ます所有らん我能く是を伏せむと即ち房内に入りて宿す

已てに暮て後ち復た一りの客比丘有り來りて止宿を求む維那亦彼の房に遣はし前きの如くに謂る後の客僧も持戒力を特んで不恐先の比丘戸を閉て端坐して鬼の來るやと伺がひ待つ後ちの比丘夜已てに暗きに門を叩き入らんとす前の比丘さればこそ鬼の來ると謂て戸を開かす後の比丘復た内に鬼有りと謂ひ極力門を擧内なる者復た以て力を極めて撃之ヲ外ある者も亦互ひある者の勝つことを得て戸を押開て衝入る内ある者力を極めて撃之ヲ外ある者も亦互ひに鬼也と謂て打合て夜已てに明て相ひ見れば乃ち是れ故舊の同學也各々相ひ愧て謝すと衆生も亦爾か也五陰本來自性なし人も無く我も無し空しく相を執し理に惑て欲又沈み愛に没憂愁粘着去て心の爲めに妄想の所念更に身心を勞す亦佗の所作に非す 大論の意

【九】  
毘婆沙  
戒念重

○佛在世の毘婆沙尊者は十大弟子の中かに持律第一の名あり弟子二人ありて戒を犯せり彼の犯戒の比丘自ら憂へ悔みて此咎を免れんことを願ふ優婆離即ち爲めに戒律の甚義を以て如法に説て犯罪の咎を除かしめんと欲す二比丘の心愈々締れて疑かひを起し退心を生す維摩詰の曰く婆離如法の戒律を説きて重ねて此二比丘の罪を増長す所以云何ん罪性の内外中間に在るに非す心清淨なれば有情清淨なり心性亦是れ内外中間に非す心已てに如是罪垢も亦然なり諸法尙爾あり一切法性生滅して不住如幻如化如是知る者は是能く持律持戒の人なりと二比丘この空の義を聞いて心意開解すと 經の意 彼の舍利弗は煖金師の子

【十】  
新羅國  
義湘傳

に不淨觀を教へ目連は洗衣師の子に數息觀を教へしか如し共に相應せず如來即ち煖金爐靴の縁を取りて數息觀を示し洗衣垢染の縁を取りて不淨觀を教へ玉ふに即ち二人共に初果を得たり

○唐の新羅國の沙門釋の義湘は姓は朴氏雞林府の人なり其生長して英奇秀逸なること等倫に超たり俗を出て、道に入り逍遙して拘る所無し年二十にして唐土の佛法盛に弘まると聞て元曉法師と共に志を同して西のかたへ遊行して海門唐國の界に至り大船を求めて滄波に赴んとす中途にして大雨に遭り往く前き遠く村里を見ず日已てに暮て雨彌頻なり四方暗裏の道路進退更に辨へ難し道の傍に土龜有るを見る二法師即ち其内に身を隠して雨濕を避す夜已てに明て相ひ視れば乃し土龜に非す古墳の壞敗して骸骨露出たる傍あり雨尙霽す瀉すが如し泥塗滑かにして尺寸も前み難し留まりて又瑳瑳の中に入て宿す夜未た央あらざるに俄に鬼物の恠有り元曉歎して曰昨夜の寓宿は土龜なりと謂て且つ安かりさ此夜鬼窟に託して此恠祟を見る爰に知りぬ心生るか故に種種の法あり心滅する則んハ龜墳不二なり三界唯心萬法唯識心外に法無し胡之別に求ることを用ひん我ハ唐土に往へからすと云て囊を携へて新羅國に返る義湘乃し隻影孤征し死を誓て退心無く唐の高宗帝總章二年に商船に附て登州に達し學業満足して國に歸る國王欽重して講樹花を開き談叢菓を結

ふ大衆雲の如くに萃りて法要を聞く常に遊歴栖止を定め是れ海東華嚴の初祖と號すと  
宋僧傳に出

十一  
皮翅加  
頭上得  
二四果一

○往昔老比丘有り年已てに朽邁せり神精昏塞にして知る所無し諸の年少の比丘種種說法して四道果の相を説を聞て老比丘心中甚だ是を羨む少年の比丘に親みて謂て曰汝等聰惠利根にして四果を貯得たり願くは以て我に分ち與へよと諸の少比丘嗤笑て曰我に四果有り汝是を冀は、好味の食を辨して供養せよ食を受けて而して後に相ひ與へんと老比丘聞て大に歡喜し即ち種種の餽膳を調へ設けて少比丘を請し供養恭敬して而して後ち四果を乞ふ此に於て其食を受け畢て老比丘を指麾さ密に語て曰大德汝實に四果を得んと欲せし此舎の一角隅頭に座して亦佗所に移ること莫れ爾らは果を與へんと老比丘歡喜まて其語に従て坐す諸の少比丘即ち一ツの皮翅を以て其頭上を打て曰此は是れ須陀洹果なりと老比丘聞已て一心繫念して散動せず忽ちに初果を得たり諸の少比丘復た戲弄して曰く向に已て汝に須陀洹果を與ふと雖とも然れとも其故さらに七生七死有り更に此方の角頭に移り座せよ斯陀含果を與へんと老比丘已てに初果を得るか故に心意轉増進して即復移り坐す少比丘復た翅を以て頭を打て謂て曰汝に三果を與ふと老比丘益々專念して即ち二果を證す少比丘復た弄して曰く汝今既に斯陀含果を得たり是猶往來生死の難有り汝更に又此方の角頭に移り座せよ我

亦た阿那含果を與へんと老比丘即ち言の如くに移り坐す少比丘復た翅を以て頭を打て曰く我れ今汝に第三果を與ふと老比丘聞て歡喜倍加のり至心にして即時に復た阿那含果を證す諸の少比丘復た是を弄して曰汝今已て不還果を得たり然れとも尙故さらに色無色界に於て有漏身を受けて無常遷壞念念是れ苦なり汝更に此方の角頭に移り坐せよ次に當に爾に阿羅漢果を與へんと時に老比丘其語に従て移り座す少比丘復た皮翅を以て其頭を打て曰我今已てに爾に彼の第四果を與ふと老比丘一心思惟して即ち阿羅漢果を證す四果を得已て甚だ大に歡喜し復た諸の餽饌を設け種種の香華を調て諸の少比丘を請して其恩徳を報す而して少比丘と共に道品を論し無漏の功徳を談するに諸の少比丘言語滯り義道迷れり爾の時老比丘是に語て曰我れ今已てに羅漢果を證得せりと諸の少比丘咸く皆な先の戲弄を悔謝すと是の故に行人宜く善法を念すべし乃至戲弄も猶其實道を得たりと況や至心からんやと  
雜寶藏經の説

報恩部

○昔し燕の太子丹は秦の始皇の爲に質せられて久く咸陽に在り故郷を戀て暇を乞に始皇許さずして云く馬に角生ひ鳥の頭白からん時還し遣さんと太子丹深く歎て天に祈れば至感に隨て角鳥則ち殿庭に來り甚だ悲みて地に訴れし眞誠に應して白鳥則ち宮簷に鳴く是に由

十二  
角馬白鳥  
之事

て故郷に放ち還さる太子丹燕に歸て白鳥を求めて恩を報せんとするに更に來らず其臣鞠武策て云く黒鳥を集めて久しく飼玉は、遂に白鳥を得へしと云ふ其言に隨て黒鳥を集めて是を飼に果して白鳥來れり是を捕飼て恩を報すと 史記並遊歴紀聞に見

〔十三〕  
鯉魚放得  
二明珠一

○昔し漢武帝は昆明池を鑿せて水戰を習はしむ池中に靈沼有り往古堯王の時九年の洪水に舟を此池に停むと云ふ池は白鹿原と云ふ所に通洞す原人魚を釣大鯉魚有り 釣を吞て鱗を斷て去る而して甚だ苦しむ武帝幸して是を覽て 釣を拔去て放たしむ其夜武帝の夢に鯉魚來て恩憐の 辱あきことを謝す次の日帝又彼の池に幸し玉ふに鯉魚即ち明月の珠を銜みて岸に置いて去る無雙の珍寶なりと 三案記に出

〔十四〕  
猛虎報恩

〔十五〕  
唐玄宗開  
佛恩德

○晋の代に郭文と云ふ人有り嘗て一頭の虎來りて口を開て向ふ乃し口中に 横れる骨あり 文手を入れてこれを取り去る明日に至れば虎一鹿を將來て堂の前に献すと 自帖に出  
○唐の玄宗帝開元二年の春左街の僧録神光法師に宣問して曰佛は衆生に於て何の恩徳有てか君親妻子を捨て、是に師とし事まつるや其説若し理有らば朕當さに佛法を崇建せん若し理に中らずは滅除すべしと神光法師答て曰く佛の衆生に於る恩は天地に過ぎ明なること日月に踰たり徳は父母よりも重く義は君臣に越たりと帝の曰く天地日月は是れ造化の功を具へ父母君臣は亦 生成の徳を具ふ何を以てか佛は此に過たりと云ふやと神光曰天は能く蓋

〔十六〕  
豫讓欲  
子一趙襄

共載ること能はず地は能く載れ共蓋こと能はず日は則ち晝を照せ共夜を照すこと能はず月は則ち夜を照せ共晝を照すこと能はず父は祇能く生すれ共不能養母の則能く育とも生する事能はず君は亦道有る則んは臣に忠有り君無道なる則んは臣必ず佞奸なり是を以て徳に推る則んは全たからず然るに佛の衆生に於る恩徳の實に則ち爾らず蓋ふ則んは四生普く覆ひ載る則んは六道共に承く明を誦する則んは十方を照耀し朗を云ふ則んは三有に光耀す慈は苦海を提濟し悲の幽冥を度脱す聖を論する則んは聖中の王たり神を論する則んは六通自在なり此故に存亡偏へに救ひ貴賤皆な携ゆ唯願くは陛下留心 敬仰し玉へと帝悦て曰佛恩如此師に非すの宣ること能はば朕願くは回心して生生に敬仰せんと 唐の舊史に見

○昔し戦國の時豫讓と云ふ者あり初め范中行氏と云ふ人に仕へしかどもさして用ひず世にその名を知らる、所を此故に遁去て智伯と云ふ人に事るに甚だ敬愛して客の如くす智伯は元來無道として趙襄子と云ふ人に滅ぼさる豫讓は山中に逃隠れて自歎去て曰く吁女は已れを 悦者爲めに容つくりし士の已れを知る者爲めに死す智伯は我れを知れり我れ必ず智伯が爲めに仇を報ひて死なば我が魂魄更に耻かしき所なからん者をと思ひ立ちて則ち姓名を改めて趙襄子が宮中に入り廁の壁を塗り 懷よ劍を藏してねらひけり趙襄子は是をば夢にも知らず廁に行く頻に心騒す故に豫讓を深得て子細を問に答て曰く我れ智伯が

爲に仇を報せんと思ひ立て如し是と云ふ趙讓子その忠心を感じて曰智伯既に無道なり滅びて又子孫あり汝その仇を報ひんとする是天下の賢人なり我れ謹んで是を避と云て許放つ豫讓尙も心を翻がへさず其身に漆をさして癩人となり炭を飲て聲を腹形ちを易て市に出て乞食する其妻だにも見知らず其友ありて見知りて涙を流して曰く君が才智を以て趙讓子に臣として事なば必ず汝を近づけ幸せんその時本意を遂ぐへきこと最易からん何そ身を損ふひ形を苦しめて襄子を計こと甚だ難し又謀の拙さに非ずやと豫讓が曰く既に襄子が臣とありて亦殺さば是貳心を以て君に事るにある也今我が計所は誠に極めて難し而れども是することは天下後代の人の臣として貳心を懷て其君に事る者を愧しめんと謂ふ爲ありと或時趙襄子馬に乗りて外にゆく豫讓その道の橋の下に隠れて相ひ待つ襄子橋の下に到らんとするに其馬駭き止まる襄子が曰く是れ必ず豫讓ならんとて人を以て探さする案の如く豫讓を捕得たり襄子則ち豫讓を責て曰く汝先に范仲行氏に事へし時に智伯既に范仲行氏を滅ばせり汝其の爲めに仇をば報せずして却て智伯事へて臣となりたり智伯も既に死せり汝智伯が爲めに今我に仇を報ひんとする事は何そやと豫讓答て曰く吾れ誠に范仲行氏に事へたり而れども范仲行氏を我を用ひず唯だ尋常の人の如くに謂へり我れ此故に亦尋常の臣の如くよして仕へたり智伯は我れを敬愛すること尊客の如くす此故に我も亦た

忠信を以て主君の敵に仇を報ひんとする也と趙襄子聞て大に歎息し涙を流して曰く噫汝主君の智伯が爲めに志ざしをなす事は隠なく名を施せり我亦汝を捕へて放ち計しける事も度々なり今汝自ら謀をなせ我も復た汝を宥べからずと豫讓が曰く明君の人の善を掩はず忠臣は名に死するの義あり前さよ君既に我を宥免せり天下の人みな君を賢ありと稱すと云ふことなし我が運盡たり今日即ち誅せられん而れども願くは君の衣を受け得て是を打て怨を報る意を致さば死すとも恨みあからんと襄子大義を感じて衣を脱て與ふ豫讓大に悦こひ劍を授て三たび躍て衣を斬て曰く我が願ひ已に満たり智伯も能く知り玉へ仇すでに報ゆるありとて其劍を以て自ら刎て死すと

史記刺客傳に出

孝行部

○昔し盛彦と云人あり父早く没す母に仕て至孝あり後に母眼を患て終に盲者となる彦自ら侍養す一りの小婢あり臆病すること疎なるを以て數撻る婢忿恨みて彦が出るを伺て竊に鱗鱗を取て炙ものとし飴を施てこれを與ふ母食て以て美かりとす然れども尋常の味ひに非らざるを疑て密に藏置て彦の歸るを待て是れを示す彦不淨物あるを見て母を抱て慟哭して息絶す母悲て歎く事甚し聲に應して彦復た蘇る于時母の兩眼豁然として即ち開くと

晉書に出たり

盛彦之母  
眼病

〔十八〕  
朱壽昌母劉氏

○朱壽昌生れて七歳あるとさに父長安の太守となる其時壽昌が母劉氏をは去り出して行きけり其後劉氏は民間に嫁す壽昌長人ありて已てに仕へて五十年を経たり母を相ひ見んことを願へども在所を知らず故に母若し空しくなり玉は、追善のため世に在さば此功德によりて再び逢たてまつらんとて自身に針を刺て血を出し經を書寫し玉ふよ遂に母のありかを求得て奉事孝養しけり 長編に見たり

〔十九〕  
曹娥

○漢のときに曹盱と云者あり會稽上虞の人あり一りの女子あり曹娥と名つく性至孝なり父盱公漢安二年五月五日に縣江に於て桴に乗り溺に溺りて婆妙神を迎ふ中流にして桴やぶれて溺死す時に曹娥年十四歳なり江に沿て號哭すること十七日終に父の尸屍を見ず自ら水中に身を投て共に没溺す三日の後父の尸骸を懷て水面に浮ひ出つ里人憐みて父子の尸を取り上げて是れを墳墓に埋其とき郡守度尙と云人郡郵淳に命して碑の銘をかゝしめて是れを建て祭る然して後曹娥が靈魂鳥とありて江を恨み岸の上りに飛鳴す又西山より木石を舍來りて江に投入れうづまんとせしとなり 山海經列女傳 等に見たり ○蔡邕と云もの碑文の後に黃絹幼婦外孫壘曰の八字を題す 事文類聚に見たり

〔二十〕  
希仁

○大明の陳榮字は希仁建州の甌寧の人なり幼少よして父にをくれぬ家貧して自ら耕す母眼を患て終に瘖たり希仁太悲しみ醫師を求めて療す百薬を竭ども更にしるしなレ夕ごと

北辰よ向ひ禮拜稽首して母の眼明にならん事を禱る或夜空中に聲あり言て曰く汝舌を以て母の病眼を舐へしと希仁此語を聞て大によろこび即ち母の眼を舐る閉眼忽と開て明あり其後十年餘にして永樂年中に大洪水あり民屋ごとく漂没す時に希仁と母と居る所はるか隔れりされども子母一本の木に取りつき流れに隨て行くこと十里計にして海中に出つ其夜郡守の夢に神人來て曰く舟を櫂をひして待ち玉へ必ず明日潮の満とき漂流せんところの希仁と母と共に此岸によるへしと郡主神勅に任せて舟を用意す日中に至りて海上を見れば希仁と母一ツの木に乗風に吹れて汀に著即ち郡主の舟にとりのりて互に相ひ見れり親子あり衆人孝感の所以を嘆す郡守問て曰く汝いかなる孝道をつくして如是の天感を蒙るやと希仁が曰く我れ愚癡よして孝の道とては一ツも知ることなし唯た平生に一飲一食の間も敢て母を忘る、事あさのみと 皇明通紀に見たり

〔二十一〕  
唐王少玄

○唐の王少玄が父は他國の軍に趣きて打ち死せり少玄はその跡に誕生して更に父を知らず十歳になりて父の在り所を問に母泣き語りけるは汝が父は軍に立ちて討死せり尸はその所の土中に埋めぬらん汝いまだ胎内に在ける時に父には後て孤とされるそやと云ふ少玄悲しみ泣て戰場の跡に行て父の白骨なりと求め得んと欲るに榛荆のむばら蔓まとはり茫々として風冷しくその時死せし多少の人とも尸朽肉消累々として散り亂れ取納る者もなく

魂は亡卿の鬼となり骨の草根の塵に和し重覆ること目も更に當てられ誰家の子いかにある人の後とも知べきやうあし少玄泣々彼方此方とめぐりて骨をば多く集むれども指てそれとも知べからず或人教て云ふやうその子の血を刺て骨にそ、くに其血の流れて落るハ夫に非す父の骨ならば血ハその骨に染付て流れ落すと少玄身を刺て血を出し多少の骨に滲て腐は間あく疵つき十日のうち尋ねければ至孝の志さし神感空しからず遂は一具の父の白骨を尋得たり歸りて厝をたて、祭れりと

唐書本傳に見たり

〔二十三〕  
樂正子春堂  
毀足而

○樂正子春堂を下ぬる時に其足を毀ひ傷さぬ是れに依りて數月家を出てす唯た憂る色有り門弟子恠みて其故を問ふ子春答て曰く我れ是れを曾子に聞く曾子は孔子に聞玉へり曰く天の生ずる處地の養なふところ唯た人を太ありとす今父母全して生子全ふして飯す是れ此れを孝と可謂其身にさすつけざるを全たしと云へし故に君子は頃歩の間も敢て孝を忘れたまはず我れ今此身を毀へり是れを以て憂ふる色有りと云へり

禮記に出たり

〔三十三〕  
范宣損  
指啼

○范宣と云者年八歳にして後園に出て菜を摘ぬあやまりて指を損ざして大に啼人問て曰く甚たいためりやと范宣答て曰く痛を以てするは非す身髮膚受之父母不<sub>レ</sub>敢毀傷是れを孝と云ふ今不孝の罪み有り是以て啼のみと

世說新語に見ゆ

〔三十四〕

○昔し如來舍衛國に在まして説法度人し玉ふ爾時阿難衣を著し鉢を持して舍衛城中に入て

分衛す一りの小兒の乞丐有りて盲たる父母を持ち好味の食を乞得る則んは必ず父母に供養し飢食は便ち自ら食ふ阿難是を見るに甚た其兒の心を感じて希有の思ひを作て世尊に此事を語る如來言はく唯其口腹の孝養ハ未た至孝と爲す我過去世の中には父母を供養すること乃し極めて爲難さを能く爲たり乃往過去久遠に大國の王有りて天下を統御す王に六子有り各々一國の主として政治を行なふ一りの大臣有り羅耒曠名く忽ちに返逆を起し大軍を擧て彼の王宮に亂入して大王及び五人の太子を弑す第六の太子此事を聞に尋て軍兵を進めて其國界に來る 禍已てに至りて亦防べき 謀なし後の妻及び一子と共に逃て佗國に奔る七日の糧を齎て道に趣く惶怖の致す所路は惑て曲道を迂十日を経て未た人家有る所に到ることを得る山谷曠野の中に行疲て糧已てに盡て餓に臨て死に垂たり足は荆棘岩石に裂破れて血の流る、こと泉河の如し飢乏困苦して力撓み地上に平臥して起こと能はず太子思惟して云く今此親子三人一處は苦痛して忽ちに餓死に及ぶ此中一人を殺して其肉を食は、二人は存命して亦時を得て敵を伐べしと即ち劔を抜て婦を殺さんと欲す王子是を見て合掌して父に向て白して言く願くは父今は我母を殺すこと莫れ我れ母の肉を食して命を繼の理は堪んや只我身を殺して母の命に代らん肉を以て父母に供養せば我何の恨むる所有んや復白して曰必ず我か命を斷こと莫れ唯肉を殺て取り玉へ若我死せば肉則ち臭爛して久しく貯べから

二十五  
跋摩迦仙  
母孝養父

すと自ら身肉を割て父母に與ふ如し是、日々に割て稍食して進み行くに猶未だ村里に到ることを得ず王子の身肉已てに唯三鬘を餘す今王子も亦父母に隨ひ往ことを能はず身肉盡て筋骨僅連あれり復三鬘の肉を殺て父母に與ふ泣々是を食し一鬘を残して王子の食に留め而して王子を捨て、父母は別れて道に進む王子更に悔恨の心無く猶父母を目送して悲泣す爾の時孝心の感する所天帝釋の官殿震動す帝釋驚きて此王子の希有の事を觀見し化して餓狼と作て其前に來る時王子悲愍して謂はく我れ此肉を食すと亦便ち死せん唯此餓狼に與へて命を救はんと帝釋即ち狼身を變えて人と、作て曰汝今肉を割て父母を孝養す悔ひ心有や否やと王子答て曰更に悔無しと帝釋の曰今甚た苦痛惱亂す誰か汝か悔ひ心無きことを信知せんと王子誓て曰我一念の悔無くハ身肉還て平復せん若悔有らば此にして即ち死せんと此言を作に身躰肉盈て瘡瘡て平復すること本の如し帝釋歡喜して王子及び父母を一處に留して軍衆を給て本國に還去怨敵悉く退治せしめ遂に擁護して閻浮提の王とす爾時の小兒の王子は釋尊今我身是なり父母ハ即ち今日の淨飯王摩耶夫人是なりと如來又言はく但今日のみ仁慈孝養の事を讚嘆するは非ず無量劫より以の來た常に亦讚嘆す

雜寶藏經の説

○佛の言はく乃往過去世の時に迦尸國王の地界の山中に一りの仙人有り跋摩迦仙と名く父母年老て兩眼盲たり仙人常に好味の菓を取り甘美の水を汲て盲たる父母に孝養し閑靜寂

莫の處に置て父母の心意を慰さめ若し出行すれば其往く方を告げ飯る則んは先つ對面し其奉事するに我か苦勞を省みず便利の不淨をば仙人手から洗滌して纖毫も父母の心に悖こと無し一日父母に白して水を取る爲に出で、瀧水の處に至る時に國王梵摩達諸臣を將て出て、中に遊獵す跋摩迦仙鹿皮の裘を著す王即ち香に見るに鹿の水を飲むと謂て弓を挽て是を射る毒箭誤たす仙人の身に中る跋摩迦仙高聲に唱て曰一箭已てに三人を殺す斯の苦痛何して酷しきやと梵摩達王此聲を聞て大に驚き弓箭を地に投ぜ即ち往て看る勅して問て曰此山中に仙人有り摩迦と号す慈仁孝順にして盲たる父母を養ふと國中皆を稱嘆す今汝ハ是跋摩迦ありやと仙人答曰我れ即是也我か此身の苦痛ハ恨み憂る所無し只父母年老て兩目盲たり而して饑乏くして人の養ふ者無ことを憂ふと王即ち彼の父母の菴りに至る父時に妻に語て云く我か眼數腫き動く將に我か子の跋摩迦に大なる禍の患有りやと老母亦た夫に語て云我か乳房も亦傷やとして疼動く將に我か子に不詳の禍有りやと俄に王の幸の音を聞て盲父母大に恐れて曰我子の跋摩迦が還るにも非ず此は容易く人の來るべき處に非ず是誰やと王答て云我ハ是れ迦尸國の梵摩達王ありと盲父母驚き敬まふて云く我か子若し菴りに在ましかは好華果を以て奉上すへきを今朝水を取に往て晚く久しく待とも歸らずと王便ち悲泣して偈を説て曰我れ此國の王と爲て此山に於て遊獵し但禽獸を射んと欲して



不覺にして中て人を害す我れ冷王位を捨て、來て盲父母は事へん汝か與子異こと無らん  
 慣んて憂苦を生ずること莫れ此時盲父母偈を以て答曰我が子慈にして孝順なり王憐愍見  
 と雖も何ぞ我子又如此ことを得ん願くは我に子の處を示せと王即ち盲父母を將て睽摩迦か  
 邊に至る父母胸を髀懷惱號咷して偈を以て悲唱追歎す時に孝感の所以に由て天帝釋の宮殿  
 震動す即ち來下して睽摩迦に語て曰汝王處に於て惡心を生ずるやと答曰に實惡心無しと帝  
 釋重て曰誰か當に汝か惡心無ことを信すへさと睽摩迦誓て曰我れ王所に惡心有らば毒即ち  
 遍身に盈て命終せん若し我れ王は於て惡心無くは毒箭の鏃抜け出て、瘡即ち愈んと忍ちに  
 箭出て、毒除こり痛み止で疵愈ること故の如し帝釋歡喜して天宮に還る梵摩達王踊躍感  
 喜して便ち教命を出し普く國內に告て慈仁を修し孝順を勤めしむ一國大に道德の風に歸す  
 爾時の盲父母は今淨飯王摩耶夫人是なり睽摩迦とは釋尊我が身是あり迦尸國の王舍利弗天  
 帝釋は今の摩訶迦葉是也慈仁孝順の菩薩の行法にして常に修して今正覺を成すと雜寶藏  
 ○過去の日雪山に一ツの鸚鵡あり其父母老て盲たり常々華菓を取りて是れを養ふ時に田  
 主あり稻を種て願くは衆生と共に食せんと誓ひたり鸚鵡常に其稻穂を拔采て父母に供す田  
 主伺かふて羅を設けて捕得たり鸚鵡の言く先き衆に生と共に食せんと願す此故に我れ拔さ  
 采れり今其施心を翻して何ぞ羅を以て捕たるやと田主問て曰く稻を采り誰にか與へたる

二十六  
 釋尊因位  
 我觀之時  
 一

と答て曰く盲たる父母あり若て便なし我これに奉りて養ふと田主聞て大にその孝心を感  
 し今は心に任せて取れと云て放ち宿爾の時の鸚鵡は釋迦佛あり田主は今の舍利弗是なりと  
雜寶藏經の説

出世孝節

○昔し佛世に出玉へり宿王華智佛と名づく時に王有り妙莊嚴と云ふ夫人あり淨徳と云ふ二  
 子あり一りを淨藏と名つけ二りを淨眼と名づく其父妙莊嚴王外道婆羅門の法を信して  
 佛法を信せず淨徳夫人と二人の王子とは佛法を信す二人の王子其母のみもとに行き白して  
 言さく願くは雲雷音宿王華智佛の所に詣て玉へ我等も同くまいり親近し供養せん所以如何  
 とおれば此佛は一切人天衆のために法華經を説玉へるとなり母の曰く汝等が父の外道の法  
 を信受す汝等何ぞぞして父妙莊嚴を偕て共に親子四人ながら佛所にいたらんと時に淨藏  
 父の王の前に至り身を虚空にあぐると七多羅樹にして種々神變を現す父の王是れを見て外  
 道婆羅門の家になきどころなり汝誰を師として如是なる術をあらへるやと淨藏答て曰く  
 我か師は宿王華智如來と号す我が現するところの神變偏に我が師の佛力なりと父の王是れ  
 を聞て親子四人一同に佛所に至りぬれの父忽ちに邪を翻して正法に歸し玉ひしとあり  
注釋經出

二十七  
 佛莊嚴本

〔二十八〕  
佛欲返  
三本國  
先令三優  
陀那通

○昔し佛優陀那も告て曰く我れ初め出家せし時に父母の爲めに驚き我れ若し佛道を成せは還て父母を度せん今己ては得佛す正さに國に皈らんとす汝先づ本國に行きて十八變を現して我れ已てに佛道を成せし事を告げよと優陀那佛勅を承て迦維羅衛に至りて種々に神變を現して佛成道の相を奏聞す父の王是れを聞玉ひて云く如來何の時か此國に還り玉はん

不孝部

○宋の歐陽環と云もの王氏を娶兵亂に依て王氏が父久く歐陽環が處に來らず或日尋ね來りて我は父なりとて具に其姓名をかたる女王氏は是れ我か父たることは知れども其貧窮獨身の軀を見てよろこびす拒塞で内へも入れず父餘の悲しさに然らばせめて今夜一宿を借して玉のれといへとも更にゆるさず追出すときに父いかりを合我が女を恨みて云く我れは汝が父にあらすや今是の如くの働をあすこと其科太し我れ訟と云て啼々立ちかへりぬ衆人は是の言を聞て謂らく定て官人のもとに行き訟んかとはからざるに天神に訟へたり即ち明旦に至りぬれ雨霽しきりに鳴籟き車軸の雨を下し其女を門外に牽出して震電し殺す

〔二十九〕  
歐陽環妻  
不幸之現

〔三十〕  
程惡子欲  
自害我

さて居邊の近きところに天神の祠あり夜明ぬれば夫陽環近隣の人と同く行て是れを見るに神殿の座上に於て一ツの書を得たり披て是を見るに父神人に女めの不孝を訟ふるの詞なり速疾の現報顯然なり 自敬篇に見たり

○程惡子は順義と云ふ處に居して一子を生す極めて愛憐す其性無道にして一りの老母を養なふに甚た不孝なり常に心に適ざる時は母を捕て罵念り毆辱し母日に泣て涙乾かず恐こと怨を見るか如く事ること婢の如し一日孫を抱て誤て地に墜たり額少し傷しかり程惡子大に怒て罵躍る聲色甚厲し母怖れて走り逃妹女の家に潜たり日を經て怒り未だ解ず刀を礪て衣の下下に匿し母を迎て曰兒已てに疵愈たり疾歸れと云ふ母今は難なしと喜び連て歸る道にしてを地に毆仆し刀を抜て腹を刺すに其刀反戻て程惡子自ら我が肚を突腹出で、死す是を埋むに其尸常に地上に出で露はれて狗鴉に食散され人更に憐れむ者なしと

〔三十一〕  
欲殺母  
天雷

○昔し不孝の子あり老母を養ふ新婦亦至りて無道なり姑を惡こと怨の如し夫に教へて其母を殺さしむ夫本とより愚癡なるを以て夜に入りて其母を將て曠野に至り母を縛て害せんと欲す罪逆の甚しきこと上天に感徹し黒雲四方に合り俄かに雷電し其子の上へに雷落ち懸りて搏れ死す母は事無くして家に歸る其新婦戸を開き是れ夫なりと謂て密に問て曰

く殺たるやと姑も亦密かに答て曰く已てに殺すと夜明て後ち方に夫の死せりと知りて大に悲痛まて泣き出て去る不孝の現報如是、後に地獄に入て受苦無量ありと

三十二  
佛因位慈  
童女之縁

○佛因位の時波羅奈國の長者の子と生れて慈童女と名く父早く喪て財寶悉く盡家衰へて貧乏なり一りの老母に事と雖とも困窮して食を奉るの方計なし童女即ち薪を市に賣て日に二錢を得て母に奉る次の日に四錢の利を得たり次の日獲利轉勝れて八錢を得たり次の日猶利に就て十六錢を得て母に奉る衆人其聰惠明敏あるを見て是を憐みて教て曰汝か父の在し時は常に海に入て寶を得て果して長者と成しを今孤と成て貧乏に至る汝何ぞ海に入らざるぞ慈童即ち母に語て曰我が父往當海に入て寶を探り我れ亦何ぞ海に入らざらんやと母聞て謂はく慈童が孝順慈仁なる争てか母を離れて海に入るべきと是に由て驕て曰汝も亦父の如くは海に入て財寶を求め來れと慈童は此言を聞て便ち伴侶を借なひ已て母を辭して去んとす母泣て曰我れ唯一子なり我が死せんを待て離れよと慈童曰向に許し已て那を復た遮するや伴侶已てに定まる信を立て、決せり復た越むさ往かざることを能はずと母即ち兒の脚を抱きて哭す慈童是を通んとして母の髮數莖を抜て母を放ちて諸の商賈と共に海に入て寶所に達り多く珍寶を取て同伴と共に還る路にして伴を失ふは路迷ふて一ツの山上に到る遙かに見れば紺瑠璃色の城あり饑渴まて至り向ふ城中に四人の玉女有て四の如意珠を擎

て妓樂を作て迎へ入れて四萬歳の中に大快樂を受く自然に此城を厭ひて出て、行頗梨城を見る八人の玉女有て八の如意珠を擎て妓樂を作て迎へ入れ八萬歳の中極大歡樂し又厭心を生して出て行白銀の城を見る十六人の玉女有て十六の如意珠を擎て迎へ入れ大快樂を受ること十六萬歳あり復厭心を起して出て行黄金の城を見る三十二人の玉女有て三十二の如意寶珠を擎て妓樂を作て迎へ入れて三十二萬歳の中快樂無極あり諸の玉女の曰汝前後の所住常に好勝の處を得たり此より外には更に好處なしと慈童復た厭心を生して念て曰王女等我を慕て是語有り猶出て、進まば必ず好處有らんと即ち黄金城を離れて行遙に鐵城を見る心に疑惟して念はく是れ外郭の鐵に去て内城は極好あらんと進て城に入る亦玉女の來り迎ふ者なし城門の中に入る忽ち一人有り頭上に火盆を戴きたり慈童女に向て此火盆を脱童女が頭上に置いて出去りぬ極熱難堪身心惱亂し頭らを振ば火星四方に散て還て身を焚手を揚て脱んと欲すれば重きこと盤石の如く火亦其手を爛す慈童問獄卒曰く我れ此火盆の苦は何の罪の報ひ來る所をやと答曰汝昔し閻浮提よして老母に孝養し慈仁柔順なるを以て慈童と号す貧困にして薪を賣に第一の日に二錢の利を得て母に供養す是の功德に由て瑠璃城四如意珠及び四五女有て四萬歳の中大快樂を感得す次に四錢乃至十六錢を得て母に供養して前後計數六十萬歳の中快樂を得たり後に海に入て寶を取り老母を安泰に孝養

せんと欲して母を辭して出る時母即ち汝か脚を抱て哭す是を遁んとして誤て母の髮數莖を絶す福報已てに盡て惡報云にに至り今此火盆を戴けりと慈童又問ふ此地獄中に罪報を受ること我か如くなる者頗ふる亦有やと獄卒答曰く百千無量にして稱計すへからすと慈童目ら思惟す我れ今免へからず願くは此獄中一切の苦を我か身に集めて餘を救はんぞ此念を起す時火盆即ち地に墮ち尋て命終して親率天に生す慈童女とは今釋迦是なりと雜寶藏經第一之卷說

是れ孝養の福は且く四大城六十萬劫の華報を受たりと雖とも不意の少罪亦苦果を感す一念の悲心を以て獄中を脱して天に生す善惡の因緣寧ろ慎まざらんや

三國 大因緣集卷之十一終

三國 大因緣集卷之十二

雜門 修善部

〔二〕 橋戸迦本

〔三〕 梅檀香長者之說

○往昔迦葉佛の滅後に摩訶提國に婆羅門あり摩訶橋戸迦と名づく大福德あり朋友三十二人と共に心を合せて迦葉佛塔の破壊したるを修補すこの功德を以て死して同く忉利天に生ず本願の主の天王となり助力の友は臣となり天主の所座は中央あり喜見城と名づく三十二人は四方各々八天宮にありて臣の位に住す如來その本姓を呼で橋戸迦と言大論の説

○昔し如來世尊迦毘羅衛國尼拘陀精舎に在ます時一りの長者あり財寶豐饒あり其婦懷妊して月滿て一男兒を産生す容貌端正にして身の毛孔より牛頭栴檀の香氣を出たま面門より優鉢羅華の香を出だす父母親屬歡喜して相師を召て占相せしめ字を與て梅檀香と名づく年漸く長大して仁慈柔和なり見る者愛敬す諸の親友と遊ひ行きて尼拘陀精舎に到り世尊の三十二大人の相八十種好莊嚴光明普く囉て百千の日の如くなるを見て心に歡喜を懷き前て佛足を禮し却て一面に坐す佛即ち爲めに四諦の法を説玉ふに心意開解して須陀洹果を證す尋て出家を求む佛即ち善來と言に鬚髮自ら落て法服着身便ち沙門となり勤行精進にして阿羅漢果を證す三明六通有て八解脱を具す諸天人悉く敬仰す諸比丘その本縁を問ふ佛告

て言はく乃往過去九十一劫に波羅奈國に毘婆尸佛出世して入涅槃し玉ふ彼の國王を樂頭末帝と名く王即ち佛舍利を收め四寶莊嚴の塔を造る群臣后妃采女各々香華を持して塔中に入りて供養す塔の地已てに踏壞たり時に長者あり好泥を用て塗補あひ梅檀香を以て其上に塗散して發願して歸る是の功德に由て九十一劫以來惡趣に墮せず天上人中に生して身口常に香薰す今世尊に値て身口故に香ばしく出家して得道すと百緣經 是一香座一香泥の功德尙如是

○三福樂  
果報

○昔し夫婦あり一子を持たり親子三人志ざしを發し同心に三事を作せり一に船を造て百姓の往還を度し二には市の中に好井を堀りて清涼の水を以て諸人に供し三に城の四門に圍を造りて人の便利に給す是の功德を修して命終の後らみな天上に生ず福樂を受ること自然あり人中に下生して富貴長壽なり所生の處永く三塗に落す佛の言はく此少福を設たるすら果報を得ること無量あり何ん況んや廣く功德を修し寺塔佛像を造立し布施を行じ諸の福業を作さば百千万倍これに勝て稱計すべからず譬喻經 の説

○四阿那律之  
過現

○乃往過去九十一劫に毗婆尸佛入涅槃の後に一りの劫賊あり佛の塔中に入りて莊嚴の具を盜まんと欲す佛前の燈明漸く滅とす賊即ち箭を以て是を挑ぐその光りに依りて佛像の相好莊嚴威德巍然たるを見て身の毛も豎て心に思ふやう佗人尙能く財寶を捨て福を求め奇麗

莊嚴の佛塔を造立す我れは如何なれば造立供養するまでこそあからめ是を盗んで身命を賣んとする罪の深さよ多生に福分なくして今貧賤となれり今亦佗の信施を破り佛の物を盜まば死て地獄におち生々常に貧困ならんと慚愧して捨て出で去る燈炷を挑たる因縁に由りて九十一劫常に善處に生して今佛弟子となり阿羅漢道を得て大衆の中に天眼第一なり況や至心に捨施して三寶勝妙の福田に供養せば福德無量あらん譬喻經 の説

造惡部

○五吳  
報

○昔し三國の時吳の主孫皓は孫權か子なり始め位も即て無道あり偏く國中の神祠を毀ち佛館を破る臣僚諫言を奉る往初先主曰に靈應を感じ奇瑞を得て寺を荆の祠を建玉ふ更に今毀破せば天意に乖き神理に忤て國家安くんぞ治らん乎と孫皓即ち張昱を遣して康僧會に告しむ問答數般にして會の理辨出ること鋒刃の如し張昱遂に屈せられて還り來て白す孫皓即ち會を召して問て曰く佛法に善惡報應を言と是れ得て聞くべしや會答て曰く明主慈仁孝道を以て天下を治む爾る則んば赤烏翔て老人星見ゆ醴泉湧て嘉禾苗いづ善已も感應あり惡も亦如是此故に惡を隱微の處に爲ば鬼得て誅之惡を顯明の地に爲ば人得て誅之と云へり易に積善の餘慶と稱し詩に求福不同と美たり儒典の格言ありと雖とも即ち佛教の明訓なりと孫皓の曰く然る則んば周孔十既に明かに言所佛教を用るに及ばすと康僧會の曰周公孔

子は深く言ず略其跡を示す佛教は止淺言に非ず詳かに其要を示して皆善法に入れしむ聖人は惟善の多からざることを恐る陛下以て嫌ひ玉ふは何ぞやと孫皓埋に屈して罷て寺院を破らず後に孫皓已に佛像に溺して忽ちに陰腫を憂ふ百計すれども愈す果して會を請ふて罪を悔齋戒して而して瘡ゆ是より大に佛法を信じ五戒を愛持すと法苑珠林に見ゆ

○昔し殷の末第二十九代の主を紂王とぞ云ひける位に即て大に矜り姫妃と云ふ美人を愛して鉅鹿と云ふ所に廻り三十里の庫を作りて米穀多積み朝歌と云ふ所より高さ二十丈の臺を作りて財寶を盈貯へ世の歡さ人の憂をも知らず唯だ此姫妃か申す所萬つに付きて背くことなし沙丘と云ふ所に周り一千里の苑を作り其中に臺閣を建臺の前に酒を湛て池とし糟を以て堤とし林の枝に肉を懸其中に若き男女六百人を裸にまて立いれ長夜の宴と云ふことを爲て夜る晝るの境もなく亂行の遊をせさせ虎甜牛飲とて肉は手にも取ず林に掛なから食ひ酒の盃を用ひず口をさしよせて飲その粧ひ虎の肉を甜ひ牛の水を飲に似たり亦炮烙の刑と云ふことを初め南庭に五丈の銅の柱を二本立て上鐵の繩を張其下たに炭火を熾し罪人の背に石を負せ繩の上りに責のばせて渡するも罪人氣力疲て炭火の中に落て焦死す姫妃是見て太だ興じければ後に科なき者をも姫妃が心を慰めん爲めに捕へて此刑に行なふ故に野人村老毎日に非分の害に遇ふ者多かりけり周の文王いまだ西伯と云ひける時に此事を聞

紂王酒池  
炮烙刑

て天下の歎き亂世の基いなりと太息痛心せらる崇侯虎と云ふ者紂王に告たりければ大に怒て西伯を擒て羑里の獄舎に入れけり西伯の臣に閔天と云ふ者沙金三千兩大苑の馬百疋美人百人を紂王に奉りて西伯の囚れを乞ひ請たり西伯歸りて猶人民の燒殺る、事を悲しみ洛西の地三百里を姫妃に奉りて炮烙の刑を止む姫妃は欲心に傾ふき喜ひの餘に西伯に武を治る官を授けらる西伯已てに涓濱と云ふ所の陽にして太公望を得て軍法の太師とし徳を行なひ仁を施しければ天下みなその徳澤に販して其子武王の世に至り紂王を討て殷を奪周の世とあして八百餘年を持てり史記本紀の説

宿惡部

付餘習

○目連既に終りに垂として執杖梵志か所に到りて乞食せらる梵志大に惡み怒りて眷屬是を捕圍て四方より瓦石を擲こと雨の如く目連これに當りて骨肉傷れ血流れて泉の如く地に委して狼藉也目連目眩き脚蹶り心に念して言く我れ今此不祥にあへり速かに滅度すべし舍利弗の初めより親友として同しく出家し同學同證すと還りて舍利弗の所に到る朱の千入に染かへり肉爛て骨見る既にして舍利弗に見ぬ欣然として涅槃す舍利弗尋で滅度す是れ外道の非常を痛む所以なり於是諸天墮涙如し雨佛に先こと七日なり業報の所招賢聖も免る、事能はず遂に此に至る增一阿含の説

目連爲二  
外道一被  
殺

羅羅前

○羅睺羅は胎内よりありしこと六年あり乃往過去の時き大王として衆僧を請して後ろの園に住め娛樂を以ての故に忘れて六日の中ちその食を供せず是れ惡心を以て忘れたるには非すと雖とも死して黑繩地獄に墮て苦を受けること六萬歳なり其最後に今佛の子となり胎内に在ること六年これ昔し六日の中に比丘を空く供せざるが故に此報ありと

懺悔部

○昔し國王有り遊興を好み射獵を事とし肉を食し酒を飲出る則きは是の如く官中に還り入る則んば燈明を燃し名香を燒き散華禮拜去て三寶の名字を唱ふ侍從の官人白して言さく大王已てに出れば射獵して狐兔を脅かし麋鹿を逐野鳥を網にし林禽を射る肉食飲酒狼藉縱橫なり入れの則ち散華燒香燃燈禮拜す是に何んの福有るべきやと大王是を聞て便ち人をして大鑊に水を汲し薪柴を燃に忽ちに沸湯となる一ツの餅金を投して彼の官人を呼で其金を探取しむ官人の曰く極熱の沸湯如何んぞ手を内るに燒爛せざるへさやと王の曰汝方便を作て是を取と官人の言く何んの方便をか作と王の曰汝去て火を消し水を以て湯の中に添よと即ち王の言の如くして鑊底の金を深り取ことを得たり大王語て言く我れ出る則んば快馬の龍の如くあるに騎て是に一鞭を當れば逸さこと飛か如し弓弦を扣き霹靂の聲を作放つ箭鷲の叫びを揚げ狐兔神を昏し猴猿膽を落し麋鹿棲を離れ猪狸臥戸を失ふて走ること風

羅羅前

惡子敗心得三道

の如し我れ是を逐ふに鼻端に火を出たし耳後に風を生し射て殺し鑿て捕る此樂み更に人を以て憂を忘れしむと雖とも宮中に還て是を思ふに罪已てに造爲す是則ち沸湯の如し我れ此故に燒香禮拜する時自ら火を去て水を添るが如し何んぞ福無しと爲やと

雜喻譬經の説

○昔し佛在世の日に人小兒たりし時又兄弟姉妹なし唯是れ一子なるを以て父母憐愛する事掌上の珍珠の如く懷中の奇寶の如くす抱持鞠育して晝夜を分たす寒暑風濕の瘴毒を防ぎ疾痛傷損の過失を怖る漸く長と成る師友に詣して書學を勸め伎藝を訓るに其兒驕逸推意にして永く心を用ひず朝たに受て夕べに弄て初めより勉めて誦習せず放蕩遊樂して山野に走り禮讓仁慈の思ひは夢にも知らず如し是年を積て都て知識する所無し父母是を憂ひて屢諫れども聽す呼還して家業を治せしむるに其兒愈奢侈にして華美を好み自ら産業を勤めず遂に窮落して衆中弛廢る其間に父母死喪す其兒更に棺槨を造爲すること厚から老薄葬して弄て是より尙放縱にして狂象の鐵鈎無く跳猿の轡勒を離れたるか如く家財竭盡さ田園を售て倍快意恣ま、なり日に匱乏に至れども願す亂頭徒跣して衣服縑縵なり慳貪摺揆して賢良を賤て諍鬪濫猥に去て佗人を侮る偷竊傷害縱橫狼藉なり國人皆を凶惡と名けて指さし憎て出入せしめず是に於て自ら惡を知らず却て衆人を怨み上みの父母の養育に不足有り怨み次に師友の教訓に慙あらざる故を責先祖の神靈我を弄て福の助け無しと

怨み下には我か身の慙軻なることを怨み其特怙すべき所なし又思はく我れ此貧乏困窮にして諸人の爲に棄捐せらるる佛に事て其福を求めんには如じと即ち佛所に往て作禮して白して言さく佛道は寛弘にして普く容ざる所なし願くは聽て弟子と爲玉へと如來告て言はく夫れ道を求んと欲せば當に清淨の行を修すべし汝ち今俗塵の垢を齎て我か法中に入るとも何そ益か有ん唯疾く家に歸て居業を修よ若し出家して戒を犯さは却て重罪を累んと即ち偈を説玉はく不誦爲言垢不勤爲家垢不嚴爲色垢放逸爲事垢慳爲惠施垢不善爲行垢今世亦後世惡法爲常垢一矣是れ垢中の垢は愚癡あるより甚さは無し學して當に此垢を捨べし此丘には此垢なしと是の偈を聞て自ら慚癡の過失を知り即ち佛敎を承受して家に歸り傷の義を思惟えて改悔して自ら禮讓を專とし言行を慎み守一平等の心を起る經道を誦習し居業を營勤し戒を奉して自ら攝し非宣を去て正理を行なふ宗族鄉黨皆其孝悌を感じ善名遐に布て國內即ち賢者の徳を稱す三年の後亦佛所に於て出家し内に止觀を修して四諦正道外に精進なり果して羅漢道を證得すと

法句經の説

〔十一〕  
提章女之

○昔し裴扇關國に女人有り提章と名く姓は婆羅門種にして家甚だ富り夫と夙く死して一人の兒も無し朝夕に悲啼すれども益無し憂思塞胸汲々と去て舒暢せず婆羅門の法として心に契さる者は身を燒て那羅延天に生せんと願す既に薪を積て自ら燒とす爾時一りの沙門有

り鉢底婆と名く智慧精進にして衆生を化度す皆な聽受して邪を改て正に歸す此燒身の相を見て提章女に告て曰原に夫れ先身の罪業は隨三精神一逐來り而も亦與身合せ徒に自身を燒とも安そ能く罪を滅せん福福は心に隨て生ず善惡の法悉く心念に隨て報を受く善法は無して憂惱の中に罪を滅えて善報を望むこと理に於て通せず今身を燒て焦爛すとも神識は不滅業障に由て地獄の身を感じ苦惱彌劇からん喩へん牛に車を懸て重きを挽じむ牛念して謂く患苦は此車に在り是を壞らば脱れんと若石に掛て車を破るに又新たに車を造りて挽しむ今も亦然なり罪業已に心に薰染して不盡假令百千万身を燒とも因縁相續して絶すへからず唯た一心至誠に懺悔すれば前身の作惡は雲の覆月如し後心に善を起は燈の消闇如しと提章女心意開解し懺悔して十善を受け奉持して得道すと

經律異相に出つ

〔十二〕  
晉周處除三害

○晉の周處字は子隱義興陽羨と云處の人なり膂力人に絶たり性細行を修せず唯た惡逆を專とす州民太たこれと思ふ處自人の爲めに惡ることを知て慨然として改め勵の志あり老母に謂て曰く今時和氣歲豐なり何の苦ありてか樂ざるやと父答て曰く歲豐なりと雖とも三害未だ除らず何の樂ことか有ん處又問て曰く三害とは何の謂そや答て曰く一に南山の白額の猛處二には長橋の下蛟此二つの物時時衆民を害す次に子と并て三つとす處聞て曰吾れ能く是れを除んと乃ち山に入て猛處を平げ水に投して蛟を殺し其より志を勵して學を



好み遂に吳王に仕へて忠信をなし御史中丞と成と

見習書

草水部

〔十三〕 閻浮樹

○南州の東の際に閻浮樹ありその林の下に河あり閻浮菓の汁少石に染て皆金となる是を閻浮檀金と名つくといふ 楞嚴經 又この樹に依りて此洲を閻浮と名つくといふ 西域記

〔十四〕 銀山女樹

○海中に白銀山有り中に樹を生ず名つけて女樹と云ふ天明日出る時其樹に嬰兒を生ず日出て已ば能く行歩し食時に至れば皆少年となり遊戯跳躍す日中には盛年の人となり日晩には老年となり日没は即ち死す尸は夜中に銷失去て日出れば復た爾なりと 正法念經の説

〔十五〕 重葉樹

○波斯國の西海の中に一チの方石有て島嶼と成る石上に樹有て幹赤く葉青し樹上に花有て色白し落て後菓を生ず狀ち小兒の相にして長六七寸面目耳鼻髮毛悉く備り笑ひ舞て其美艶なること云ふべからず若し一枝を摘取に小兒便ち死すと 唐書に見ゆ

〔十六〕 人果樹

○南海に人果樹有り其果初生の狀ち男女の童形に去て髮毛音目皆具す熟するに隨て白さくと凝る膏の如し帶拔て地に落れば蒸み枯て尸林の如しと 立世阿毗曇論の説

〔十七〕 檮檀樹

○牛頭梅檀の摩黎山に出つ 大論 この香若し一鉢を燒ば小千世界に薫す若し人これを得て身に塗ば火に入れども燒す水に入ども死せずと 華嚴經に見ゆ

〔十八〕 大椿

○上古に大椿と云ふ樹あり八千歳を春とし八千歳を秋とす 莊子に見へたり

〔十九〕 伊蘭林

○末利山の中に伊蘭林を生ずその香ひ臭こと腐たる屍の如し 觀佛三昧海經の説

〔二十〕 指佞草

○昔し堯王聖君ありしかば忽ちに階前に指佞に草生ず佞人若し朝に入れば此草屈て是を指と 博物志に見たり

珠玉部

〔廿一〕 和氏之璧

○楚人和氏楚山の中に於て玉璞を得たり乃ち厲王に獻す王玉人をして相しむるに石なりと云ふ和詐を爲と云て而して其左の足を削る武王位に即王ふに及て和又獻之王玉人をして相しむるに又石なりと云ふ王又初を以て詐れりとして其右の足を削る文王即位に及て和乃し其璞を抱て楚山の下に哭すること三日三夜なり已てに泣盡て而繼之血を以す文王聞て人をして其故を問しめて曰く天下之別者多し子ち奚そ哭すること悲しきと和が曰く吾れ肌る、ことを悲むに非ず夫の寶玉として題之石の號を以てし貞士として名之詐を以てすることを哭す是れ吾か悲む所以なりと王乃し玉人をして其璞を理しむるに果てて寶玉を得たり遂に命して曰く和氏之璧 韓非子に見たり

雜因緣部

○釋の常觀の和州三輪の縣に住の密教を學し慈行を修す嘗て吉野の神祠に詣す中路にし稚子兩三人相對して泣を見る其幼ふして哀情深を怪てこれを問ふ其長は女すにし

て年十二三許あるが答て曰く我等新に母を喪す父の遠く往て未だ飯り玉はず母時疫を病玉ふ故に里人懼諱て來て甲もの無し吾れは女の身あり弟どもは幼なるして東西を分たす故に葬を如何とむする事なし唯諸弟と共に聚りて哭のみと觀聞之慙て謂らく我今神祠に詣する身なり神甚た死穢を諱玉ふ若し此穢を受けば神前に詣すること能はじ然れども我れ此行を廢するに忍びず吉野の參詣の先つ止て又重て思ひ立つべしと便ち死人を肩に挂て近き野に葬すさて三輪へ還らんとするに身軀強梗して動くこと能はず乃し思惟すらく我れ己に神に約す中途に犯穢して飯る故に神の尤なりや又思へらく吾れ悲行を以て穢濁を受く故に中路にして退す是れ倦疲て等閑に飯るに非らず然れば神豈多く忤哉と試に吉野の方へ向て進む五軀尋常の如くにして少まも妨なし復た念すらく我身已てに恙無し猶進退を試んと欲して三輪の方へ向て歸るか如くすれば身又前の如くにして動せず因て已ことを得ずして吉野に行く既神祠に到て益々恐れを憶が故に取て遯く向す樹下に憩て而して持念す時に權現巫と現し祠を踊出て遙に觀を着て曰く比丘此に來れと觀聞之以爲我れ忌に觸て來る神これを罰し玉ふやと思ひ悚慄して來りし事を悔ゆ巫漸く近いて曰く待奉ること久し何んぞ暮や我れ忌諱せず只た師の慈濟を貴ぶ耳と即ち袖を合て殿前に到り玉ふ觀感涙を流して歸る

元亨釋書に見たり

〔廿三〕  
優婆塞  
羅漢  
油事

○昔し波斯匿王の女め出家して比丘尼となり羅漢道を證す年已て二百三十曾て如來を見奉れり優婆塞多尊者知彼尼親見佛其所に至て諮問せん事を請比丘即ち鉢に油を盛て戸扉の後に置く惣多其所に到て扉に入る時油數滴を覆す共に相ひ慰問して而して後ち座に就て問大姉比丘尼往昔世尊在世の日諸比丘の威儀進退如何にと比丘尼答て曰く昔去佛在世の六群比丘は最とも兪暴ありさ此房に入し時未だ曾て一滯の水をだに棄ざりき大徳今者智惠高勝あるを以て世の人號して無相好の佛とす然も吾か房に入て油數滴を棄す是を以て觀に佛在世の人定て奇妙也とすと惣多是の語を聞て甚た自ら悔責して極て慚愧を懷く比丘尼の曰く大徳自ら耻慚の悔を爲こと莫れ佛言の我が滅度の後ち初日の衆生は二日の者に勝三日の人の益々復た卑劣ならん如是展轉して福徳衰耗し愚癡闇蔽にして善法羸損せんと况んや佛滅百年に及ふ復た非威儀の事を作と雖も正に其道義を得たり何んを慙みと爲に足んと

付注藏經の説

○昔し阿恕迦王は佛法に歸して信懇あり自ら僧の爲に食を行すこの時寶頭盧尊者この座に預り蘇油を以て飯に拌せて食す大王の曰く蘇油の性極めて消し難し而るを如是多く用て是を食せば恐くは宿食の疾と爲べしと尊者答て曰く是れ今何の疾とならんや佛在世の時の水と今の世の蘇油とその性等故に多く食すれとも疾とならずと尊者即ち斯の事を證知せ

〔廿四〕  
佛世之  
蘇油

〔五五〕  
玄昉僧正  
井藤廣嗣

まめんと欲して神通の手を舒て地底四萬二千餘里に到り地下に沈じ佛在世の蘇油を取りて大王ヲ示す是を食するは甘露の如く今の蘇油はその味い苦澁なること毒の如くに覺ゆ尊者の曰くこの閻浮提の衆生下世に降り福德衰減し米穀を始め草木の菓實所有の精味悉く地中に隱没す是れ其薄福の驗ありと付法藏 如來の入滅未だ百年に盈ざるに尙斯れ等徴あり況や今二千餘回の歳霜を送り正像二時の曆數を謝す世降り人拙なく成ること思て知るへし

●昔し本朝聖武天皇の御宇に玄昉僧正と云ふは姓は阿刀氏出家して東大寺の義淵和尚に従て唯識を學し智辨兩から備へて君臣雙て敬ひ道德高勝の名を施こま禁中の出入更らに咎る者なし後宮の往來亦憚る所なし或時右大臣藤原の廣嗣公參内して後宮を見るに玄昉と光明皇后と一處に坐して呢語をあし濫行無禮あり廣嗣大に驚き天皇に奏す天皇幸して見玉へば皇后は如意輪觀音と現し玄昉の十一面觀音と顯はれ共に衆生濟度の方便を語る光明耀さて傍を照す天皇甚だ歡喜廣嗣は佛法を斥ひ玄昉を譏すと思ひ玉ふ是より天皇と大臣と快らす玄昉を憎み出たり終に廣嗣を肥前國松浦の里に流し遣す廣嗣は正しく我が目に觸たる無禮の行ひあり天皇の愛に没れて還て我を憎み刺へ流刑に處せらるゝ事何そやと怨み憤りて軍兵を招き謀叛を起す天皇即ち大野東人を大將軍として官軍を遣して責らる廣嗣防に叶はず大に怒りて自ら首を刎空に昇て官軍を蹴殺して靈魂亦八尺の大赤鏡とあり松浦の

村里に轉ふ是に遇者皆倒れて死す此故又村民愁へて社を立て鎮め祭る今松浦の鏡の明神と号す其間に玄昉は入唐して法相を學し日本の大使多治の廣成か舫に乗りて歸朝す經論五十餘卷及び佛像等を將來せり天平九年に僧正とあり同十一年六月に築紫の觀音寺慶讚す玄昉僧正供養の導師たり已てに高座に昇る時天井より熊の如くある手を出だして玄昉の首を抜て騰去る日を経て後ち興福寺の門の前へに彼の首を落せり蓋し廣嗣の靈往昔の怨を報せりなりと續日本紀に見ゆ

〔廿六〕  
傳法院覺

●傳法院の覺鑿は俗姓は平氏將門の苗胤あり代代武略の家にして其父亦勇者の譽あり近郷の諸人恐れ敬ふ覺鑿幼なふまて以爲く我が父に勝れて亦世に豪貴の人はなしと一日郡代の官吏年貢を促し來る放恣喧呼して租税を責虎父恐れて首を出たさず其家に比丘あり小兒是に問て曰彼れ今何人なれば我が父を辱しめ誠むるや父亦常に武勇なる今如是恐るやと比丘の曰官吏已に租税の年貢を虎り取る汝の父是に忤こと能はずと兒又曰く官吏の誰に比ぶるや比丘の曰此國の主あり凡そ諸國郡縣皆な國守の命に従わさる者あし汝の父も國守の被官ありと兒の曰く我れ始め天下の貴人も我が父に勝はなしと思ふに猶此國の主有りやと比丘の曰く國守も未だ貴人の極りに非ず其上へに宰相とて天下の政道を定むる臣上あり又その上へに天子とて一天四海に第一の君ありと兒良久して曰く天下四海至尊天子に廻たる

者は無しと比丘の曰く天子の上へは神明あり天界に梵天帝釋あり猶是も勝て尊く類なきは佛なり無上尊と名く佛に三身有り中にも法身如來なりと兒の曰く世の人佛の位に登ると比丘の曰く方に今剃染の沙門なり其教行に二種あり其中に密教大乘の法に由りて修行精進すれば法身の如來無上尊の位に登る汝の心に云何思ふと兒の曰く其教の人は何くに在る我れ尋て求めんと比丘の曰く紀州高野山の弘法大師入定の地なり彼に定尊阿闍梨とて密教の學者有りと兒是より遊學の志を發しを授て京に入りて仁和寺に到り又興福寺の慧曉に從て唯識を習ふ又仁和寺より還て密教灌頂を受け三井の覺猷僧正に從て秘密定剛の灌頂を稟く夫より高野山に上りて定尊に親みて益々秘奥を極め傳法院を建て覺鑿即ち高野を移さんと欲する心あり初め鳥羽院不豫なり夢に一りの沙門あり南方より來り手に柳の枝を執て香水を灑と覺て後病ひ差後ちに覺鑿の面容を見玉ふに夢の僧に違て天子上皇尊崇日に熾なり太相國藤原の忠通公は御堂の關白と号す夢に覺鑿は太唐青龍寺の惠果阿闍梨の再來なりと見て覺て益々敬ひ貴する高野山は空海の徒直然阿闍梨の後ち堂宇頽廢漏澤祈禱維範明辨等の師皆な力を盡して營と雖も本とに復と能ず覺鑿已てに修補の大功を遂て漸く造畢す亦傳法院密嚴院建其光麗なること本寺に勝れたり高野の大衆是を合ひ而るに覺鑿即身成佛の義を立て、父母所生の肉體即ち大日覺王の全身を顯現すと云ふ高野山の衆衆是を聞て大

無淨念王  
并彌陀有緣國

〔廿八〕  
彌陀六喻

一僧て傳法院に推寄せて覺鑿を中かに取り籠て四方より礫を投ること雨の如し覺鑿入定して座す其石更に中す時に一念の慢想を生ず忽ちに石一ツ頭べし中りて血流る座を立て堂に入りたり大衆跡を認て堂に上る覺鑿あし唯二體の不動尊あり大衆の曰く此中か一體は覺鑿なるべし穴殊々妖や敷る程あらば是こそ有らぬ御身に刀を立て、顯せと云ふて二躰の尊に刀の鋒をたつるに覺鑿の身即ち鮮血流れて狼狽して死す時康治二年十二月十二日歳四十九 別傳并釋書見

○往昔恒河沙劫は此世界を刪提嵐國と名つく轉輪聖王あり無淨念と名つく大臣あり寶海梵士と名く大臣の子出家して正覺を成し寶藏如來と名く無淨念王此佛の示教に由て菩提心を發し清淨土を取り大願を發して已てに正覺を唱へて阿彌陀佛と成り玉ふの說 乃往過去の時此國を清泰と名く阿彌陀佛の父を月上轉輪王と名け母を殊勝妙顏夫人と号す彌陀已ては發心覺道し願行成就して正覺を唱へ玉ふと云へり 鼓音聲經の說

昔し佛在世の時一りの道人あり河の邊りに住して樹下に座して道を學すること十二年を経て終に妄念を除息すること能はず目に色を見る耳に聲を聞く其身は靜かなるに似て意は十方に馳散す貪想更に起りて十二年の中ち道を得ず如來此人の度すべき時至ることを知めして化して沙門とあり其處に至り同く樹下に宿す須臾ありて月明らかに出一天に雲なし

〔廿九〕  
折天  
一

朝に照して隈なかりしに一ツの龜あり河の中より出て樹下に來る復た水狗ありて飢て食を求む龜を見て即ち瞰んとす龜即ち頭と尾と及び四脚を縮て甲の中に藏たり百計すれども瞰こそ能はず水狗少し遠く退ぞく則んは龜即ち頭尾四脚を舒て歩む復た來りて瞰んと欲すれば復た縮り藏る水狗勞屈して捨て去る龜遂に脱る事を得たり道人是を見て化沙門に謂て曰く此龜に命ちを護る鎧ありて水狗その瞰べき便りを失ふへりと化沙門の言く我れ今世の學道の人を見るに此龜にだにも如す徒らに年歳を送りて無常の到ることを知らず六根を放にして外魔の爲めに便りを得らる唯能く六情を治めずは道を得べからずと即ち偈を説て言く藏六如龜防意如城慧與魔戰勝則無患この偈に由て道人證悟することを得たり法句經の說宗鏡録に引く之如是自ら六根を守護して功德の法財を成立して生死海を解脱せんと欲す而して動れば心を惑亂顛倒せられて願行功德を奪る、者皆衛護なきが故なり

○昔し貧人有り一心は福を祈りて天を供養すること十二年を満す天此人を感て自ら其身を現して問て曰く汝何をか求ると貧人答て曰く我れ貧困にして窮す此故に富貴を求め所願を満足せんことを祈ると天即ち一器を與へて謂て曰く是を德瓶と名く所須の物其意は隨て皆此瓶の中より出と其人是の瓶を得已て意の所欲に應して得すと云ふ物なし忽ちに富祐なること云ふべからず諸人皆其俄爾として富ることを恠みて問に遂に瓶を出して示し種種の

〔三十〕  
貧困夫婦  
自殺之縁

物瓶より出るを見せしめ嬌逸にして瓶に登りて舞踏す其瓶即ち遂て諸有の物同時に銷失すと大論に出つ

○昔し如來舍衛國の祇園精舍に在ける時一りの長者有り財寶豐饒なり一りの男兒を生す其子年未だ十二にして父母速く命終せり幻稚にして孤とあり生活理家の事を知らず財寶を費散して數年の間たに已てに内窮に及ふ而るに父の親友に長者有りて甚だ愍み我か娘を配て妻とし屋宅を改ため造り種種の珍寶車馬衣服資具を整へ奴婢僕從を召添て送り與へ二たび長者とあし其門戸を取り立んと欲す而れども聲とあり其性懶惰とをこたりて家を治め産業を營む事を知らず財寶徒らに費損して日に困乏に至る女の父復た財物を與へて家計を勸め治生を教ゆと雖も更に無狀失却す如是三たび財を分ち與ふるに遂に亡損して本は復べき道なし父即ち我か女を取り歸して佗の聲を求めんと議る一族皆なこの議定に同す女竊に聞て我が夫とに語て曰く君已てに治生家業の計に拙く貧困に及ふこと數度なり我か父是の故に屢資財を送ると雖も悉く費損して雪を以て淵に入る、が如く籠を并へて塘とするに似たり今ハ力なく我を奪て佗人に嫁せ君をば永く捨んと議る君云何んがすべさ何んの計をか作と欲するやと其夫これを聞くに慚しく口惜さことを限りなし自ら思はく我れ福分薄く生れて天道の理を失ち家計生活の法を習す世路産業の道に拙なく貧窮困乏

に至る今亦婦を失なひあば我は乞丐人となり溝瀆の中かゝ餓て死あん況や多年の恩愛其情の深こと生を易ども忘んや生ながら別れては膽斷腸切れて勝忍ぶま地有るべからず悲痛の間に命生て益なしと便ち惡念を興して婦を將て深閨に入りて曰く今君と離れては一日も堪忍ぶべからず共に一處死せんには如しと即ち婦を刺殺して還自ら喉を刺て死す奴婢驚き走て婦の父母に告く長者の大小驚き往て見るに夫婦一處又重なり死去て涕泣號哭して棺殮葬送を營み尙悲みに堪ず佛所に詣てて白して言さく我等無徳よしして一女を嫁して愚夫の妻とす夫と曾て生計を知らず數々力を加ふと雖ども彌々貧困に逼る此故に女を奪ひ還さんと議る所よ夫即ち婦を殺して亦自ら死す此悲痛荼毒の思ひ已こと能はる願くハ世尊この愛患を除き給へと云ふて五躰を地に投て涙泉の如し爾時如來彼の長者に告て言ハく貧困は前世の業果貪愚は患害の門戸愛情ハ世人の常の病ハ死生ハ輪回の苦の本也也三界五道此に由て沈むこと淵の如く陥ること坑に似たり憂悲苦痛して無數劫に至り尙未た悔心なし況んや至愚の人寧ろ此貪愛情欲の楚毒能く身を滅し族を滅し及ひ衆生を賊害すと云ふこと識得せんや何に況や彼の愚夫庸婦に於てをや現生の欲愛に没して當來の趣向苦果を知らず自ら漫に死地に至れりと世尊偈を説き給はく愚ハ以貪自ら縛る不レ求レ度ニ彼岸ニ貪て爲財愛欲あり害レ人亦自害す愛欲の意を爲レ田姪怒癡を爲種と乃 至嗜欲の賊害レ命故惠不ニ貪欲と長者と

の偈を聞て憂を忘れ悲みを亡じて須陀洹道を得たりと

注句經譬喩の說

雜事實部

魯國談姑

○昔し魯國より大軍を起して魯國にとりかけ漸く城下に推つめたり魯の國氏恐て逃齊の軍兵これを追て或ハ殺し或ハ打倒して衣裳を剝資財を奪ふ而る所に一りの婦人あり一兒を懷に抱き一兒の手を挽て山路を差て逃走る軍兵頗に追つめて剝捕とすさし急に逼しかば其抱さたる兒を棄て手を挽たる兒を抱て走る軍兵遂に追つめて捕へて問て曰く人の親の子を愛憐することは大小更も替るへからず而して小なる者をは取り分て愛するハ世の人の常なり而るに今此の急に及びて少子を捨て大あるを抱き逃るは云何なる故ぞと婦答て曰く少子は妾か産る所大なる兒はこれ夫の兄の子なり姑これを妾に預て逃しむ母として子を悲ひハ私の愛あり姑の命を守るハ公義あり公義を背て私を致さんハ妾今死すと爲ざる所なり此故に我か子を棄て夫の兄の兒を救んとすと齊の軍兵これを聞て大に感して曰く魯國の野人の婦猶を此節を守り義を重くす況や朝廷をやと云ふて軍を引て還る魯の君聞て金帛を婦に賜ひ家を興して義姑と名づけりらる列女傳是れ道義を守る則んは子は棄べし自ら已れを視に至りては一毛と雖ども棄難し自身を守り痛ること何を以てか是れに比べんや菩薩同軀慈悲を以て衆生を視はして愛憐し玉ふ事何ぞ夫妻父子を以て喩とせん唯是れ自己を視る

【冊二】  
堯主不  
受不

【冊三】  
南郭先生

【冊四】  
移家妄

【冊五】  
晉靈公造  
靈九層

が如しと大經に説り嗟乎尊矣 仰て可信す

○昔し堯王天下を治めて國豊は民安し華封と云ふ所の人來りて曰く願くは聖人の壽を祝して千秋萬歳を唱ん又曰く財寶充滿て富貴をらしめん又曰く男子多く持玉ひて孫々榮て永く傳へんことを祝せんと堯王辭して曰く男子多き則んは懼れ多く財寶多き則んば事繁く壽ちながさ則きは辱多しとて其人を還して祝を受けず 莊子に出つ

○昔し齊の宣王甚た筭を好み三百人を集めて等く吹しめて聞くに猶飽す南郭先生は筭を吹ことを知らず而して三百人の中に在て吹筭の祿を食宣王薨して後主即ち曰く寡人も亦筭を好む一一各是を吹へしと南郭先生乃し逃と 韓子に見也

○魯の哀公孔子は語て曰く此國に能く物忘する者有り家を移して佗處に行く其妻を忘れて去りぬと孔子の曰妻は是れ尙日れと躰を別にす古への夏の桀王般の紂王の直に我が身を忘れたる者也と 家語 無道放逸にして佛法を求めざる者の未來の苦果更に不恐是れ自身を忘る所以んに非ずや

○昔し晉の靈公は九層の臺を造る三年に至れとも成す其臣荀息と云ふ者語て曰く臣能く十二の棋子を累九ツの卵を以て其上に加へ載るの術を得たりと靈公の曰く其れ何ぞ崩ざらん實に危哉と荀息か曰く何の危 ことか有らん公は九層の臺を造り玉ふ三年に至るとも未た

【冊六】  
蔡邕作  
焦尾琴

【冊七】  
飛衛欲  
射師

成らず男は耕さず女は織す國費の民困む亦是れ甚た危しと靈公遂に臺を作ことを止むと 説苑に見也

○漢の蔡邕字をば伯喈と名つく音律に妙を極む吳の國の人桐の木を燒て飯を爨くものあり蔡邕その燂々と云ふ聲を聞て曰く此れ良材也とて其門を叩きて桐を乞ひとり削て琴を作るに固に殊勝の音を出たす彼の燒け盡さざる所尙黒し故に焦尾の琴と名つく天下無雙の器なり 後漢書本傳に見也

○昔し隋朝の末年に齊君謨と云ふ者善く射の術に長す目を閉て箭を放に口に應して中る百び發して弛さず百たびなから中れり天下その術に及ぶ者なし飛衛と云者 一日王 弟子とある織縷を以て蝨を繫これを窓に懸て燕角の弓に吳幹の矢をはげて射さしむ初めは大方中らず漸く鏃定まりて蝨の大さ車輪の如く見ゆ三年にして其妙を得たり飛衛思はく師を殺して我れ名をとらんと或時野中に行き逢たり即ち箭を發すること頻あり齊君謨弓をもちたす一ツの短刀を執りて矢の來るを防く飛衛本よりその曲に妙術を得て矢繼早く目坪を違へず射ける所に齊君謨短刀を以て撃折末後の一矢を口を開きて承しかば得たりと思ひて喉に射入れたるを其鏃を嚙て止めたり我れ三年の弟子ありと雖ども汝が野心の相を見るか故に鏃を嚙の法をば誨へざりさと飛衛大に耻て辭謝す 朝野僉載祖庭事苑太平廣記同に見也

〔廿八〕  
工尹一記  
太子一記

○楚の共王爲太子一時に車に乗りて出で、行く路にして賢士工尹に遇ふ工尹走り避て門中に隠れんとす太子是れを見て車より下て從て向ひて曰く吾れ聞く其父を敬する者は其子を兼せずと云ふ公の子は大夫たり其父として何ぞ如し是あるやと工尹が曰く向には吾れ太子を望み見て其面てを見る今より後は太子の心を記すと云へりさ劉山說苑是れ唯其面容を見る

〔廿九〕  
雷煥得  
劍車

○昔し吳の國は其分野は斗牛の間に中る常に紫色の氣あり張華と云ふ者是を見て豫章の雷煥と云ふ者に問ひけれの答て曰く寶劍埋れて其下たに有りて氣已でに上に昇のみ今豐城縣の間たありと云ふ張華即ち雷煥を擧して豐城の令とあす雷煥即ち紫氣の立つ處を認て故さ獄舎の跡を掘こと四丈計の下たに石函あり中に二ツの名劍あり一ツは龍泉と題し一ツは太阿と名つく西山北岩下の土を以て拭に光瑩なること玉の散が如し一ツは張華に送り一ツは自ら佩其後ちに事に坐せられて張華誅せられしに劍即ち失たり又程なく雷煥も死たり其子彼の劍を佩て延平津を渡る時劍自ら拔て躍て水中入る人を以て潜さ探に水底に兩ツの龍あり長數丈にして光り耀波を揚て伏と云ふ晋書に出つ

〔四七〕  
楊震四知

○漢の楊震の東萊の太守とありて昌邑と云ふところを過するに其邑の令に王密と云ふものあり是れは楊震か進め擧て此所の令と爲なり震の元來清白貞廉にして私の蓄へなき故よ其身貧乏あり故に王密恩を謝せんがために黄金千斤を懷にしてひそかに震よまくる震が曰く我れ若し逸才あるを知る故に薦て令となすあり君我れに何のよしみありて金をまくるや我れ受ること能はずと密かさねて曰く今暮夜に及へり誰も知るものなし唯ひそかに受け玉へと震が曰く汝何ぞ知る者をしと云ふや天知り地知り我れしり子知るいかんか不知なりと云ふて受ることをせんやと王密大に愧て去ぬ漢書これを楊震が四知と云て人々傳て賞するなり

三國 大因緣集卷之十二 終



明治廿六年十一月廿八日印刷  
同 年十二月二日發行

編輯者 京都府平民

西村七平

京都市下京區中珠敷屋町通  
烏丸東入廿人講町廿二番戶

印發 兼 京都府平民  
刷行 者

西村七兵衛

京都市下京區中珠敷屋町通  
烏丸東入廿人講町廿二番戶

發行所

京都市東六條  
中珠敷屋町

西村法藏館



